麻原彰晃の世界 PART17

世界は尊師を待っている





麻原彰晃



麻原彰晃の世界 PART17

世界は尊師を待っている



麻原彰晃





麻原彰晃の世界 ❖ PART 17

世界は尊師を待っている

―― 目次 ――

未来はここに



途切れなく続く大地
この広大なロシアの地に
今一筋の光が射し込んだ
それは長い長い忍耐の日々の後
やっと訪れた希望の光であった
ロシアが大きな飛躍を遂げる
記念すべきこの一瞬のために
予言の成就のために
麻原尊師は今日本を旅立った

第1部　ロシア編 PART1

予言の

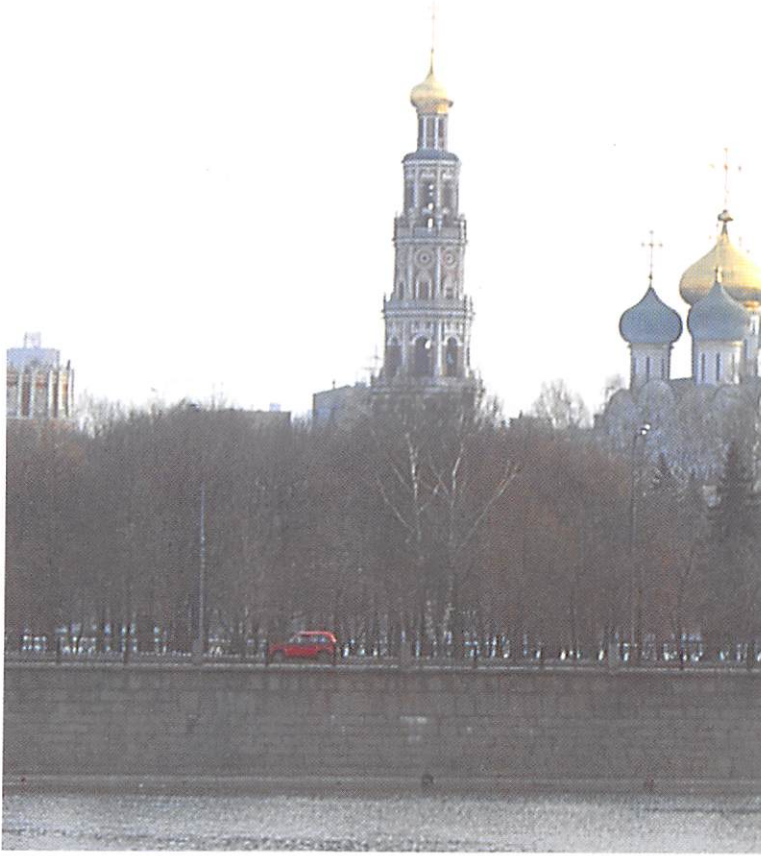






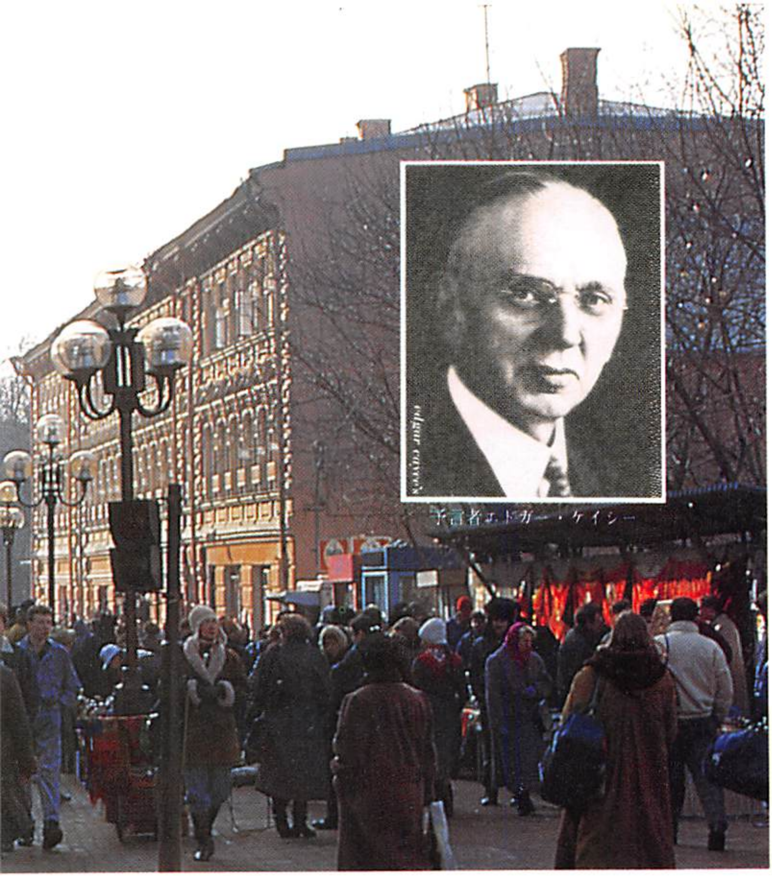
◆予言の国ロシアへ

一九九二年三月七日から十六日までの九日間、新生ロシアからの招待を受けて、麻原尊師と直弟子・信徒合わせて約三百名がモスクワを訪問した。





ロシアから今回の招待の話が持ち上がったのは、九一年の十一月初めのことであった。オウム真理教、麻原彰晃尊師に、ぜひロシアに来て真理の法を説いてほしいというのである。
ロシアは、共産主義体制が崩壊して以来、政情不安が続き、


予言者エドガー・ケイシー

連邦時代の経済政策の破綻(はたん)は隠せず、人々の生活にも暗い影がさしている。かつての東側第一の国家としての威厳は早なく、人々が心から救済の手を求めている国、それがロシアなのである。

　ところで、麻原尊師がロシア側の招きを受けた理由は、危機に直面しているロシア救済のためだけではない。そこにはさらに深遠な意味合いがあった。それは、今世紀屈指の予言者といわれるエドガー・ケイシーが残した「ロシアを通して世界の希望がやってくる」という予言やアメリカの他の予言者たちが、



ロシアに関して意味ありげな予言を多く残していることに由来するのである。ともあれ、ロシアでの活動は、オウム真理教にとっても、世界の未来にとっても、重要な役割を果たすに違いない。

半世紀以上もの長きにわたって宗教に対して固く閉ざしていた重い扉がやっと開き、ロシアに、そして世界に今新しい春が訪れようとしている。

◆春の訪れとともに

三月八日、夜のモスクワ――。

ヨーロッパ風の華麗な建物の間





露日基金の会長ロボフ氏は、本ツアー中、常時オウム真理教のサポートをしてくださった。

に、近代的建築物が混在している。世界有数の首都としてはどこか寂しい印象もあるが、それは今この国の政治・経済が混乱に陥っているせいもあるのだろう。道行く人々の顔も、気のせいか、笑みが少ないように感じられる。

この日、モスクワ市内のホテルで、麻原尊師は露日友好基金の会長ロボフ氏（前ソ連首相代行、現大統領直属専門評議会議長）と会談された。日本にも訪れ、今回の尊師訪問に大きな協力をしてくださった氏。この地で尊師と再び会うことができたことをとても喜んでおられた。



「露日基金の会館が、モスクワの中心地にできます。その中の一部をオウム真理教の拠点にすればいいのではないでしょうか。」などと提案され、これからのオウム真理教の活動に積極的に協力を申し出てくださった。

救済ツアーの初日である今日は、くしくもロシアの〝春の訪れ〟の休日に当たっていた。そういえば、かなりの寒さを覚悟して来たのに、思いの他暖かい。長くつらい冬を耐えてきたこの地が、尊師の来訪と同時に明るい春を迎えたかのようであった。

ロシア語版の尊師ご著書を熱心に読む学生（モスクワ大学にて）。



学生であふれんばかりの尊師講演会風景。



（モスクワ工科物理大学にて）



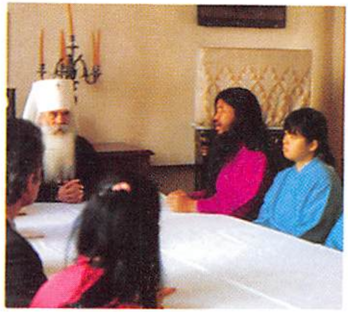
ロシアの大学の最高峰モスクワ大学。

◆崇高な仏教の理念のために

三月九日、モスクワ大学での講演は、モスクワの若者に仏教がどのように受け入れられるか、今後のオウム真理教の活動の行方を占う上でも興味の持たれるところだった。講演三十分前、早くも会場には学生が詰めかけ、果たして異国の若者に仏教が受け入れられるのだろうかというスタッフの一抹の不安は吹き飛んでしまった。尊師講演中も食い入るように聴き入っていた学生たち。その反響は、日本の東大・京大の講演と比べても優る



クレムリン大会宮殿でルツコイ副大統領と。







ロシア最大の宗教、ロシア正教の最高実力者ペテリウム府主教とは、宗派を超えて人々の幸福のための協力の握手が交わされた。



とも劣らないものだった。

三月十日。ロシア正教の最高実力者ペテリウム府主教との会談の後、尊師は一路クレムリン宮殿へと向かわれた。

「赤の広場」にある世界の多くの政治家たちを迎えたスパスカヤ塔の門をくぐった尊師一行を宮殿の一室で待っていたのは、低いよく響く声をした男性。——ルツコイ副大統領である。

「麻原尊師と会えて、とてもうれしい。」

笑顔で話を切り出された副大統領に対し、巧みに法にのっとってロシア再建について語られる









〝ホワイト・ハウス〞の中、最高会議議長との会見へと向かう尊師一行。

尊師。また、尊師はエリツィン大統領のエイズ撲滅運動に賛同し、百万本の注射針を大統領に贈呈することを申し出るなど、会談は終始和やかに進められた。

時間としては、それほど長いものではなかっただろう。しかし、今後の交流を予感させるには十分な会見だった。

ルツコイ副大統領会見の翌日、三月十一日は、エリツィン大統領に次ぐ政治家といわれている最高会議議長ハズブラトフ氏との会談である。会談は、通称ロシアの〝ホワイト・ハウス〞で行なわれた。





ハズブラトフ最高会議議長。



和やかな雰囲気の中、話し合いは進んでいった。



「尊師が日本だけでなく、全世界で、その純粋な仏教の崇高な理念を普及するため、本当に偉大なご活動をなさっていることをわたしはよく承知しております。この活動のますますのご成功と、ご健康をお祈りします。」

そう述べられたハズブラトフ氏は、笑顔で今後の惜しみない協力を約束してくださった。

このとき尊師からは、無料の病院を建てて奉仕活動をする計画が伝えられた。今、ロシアでは診療が有料化され、しかも薬品・設備の不足等によって人々が十分な医療を受けられない状況にある。それを憂慮なさって

の尊師の提案だった。

◆モスクワっ子を魅了した「死と転生」公演

三月十二日、ロシアを訪問して六日目。今日は町並みにも少しもやがかかり、モスクワは幻想的な印象をよりいっそう強めている。

休日の今日、クレムリン宮殿はいつもの観光客の賑わいもな



東洋の芸術を見ようとクレムリン大会宮殿に集まる人々。







モスクワ放送のアナウンサーも駆けつけ、尊師にインタビューを行なった。



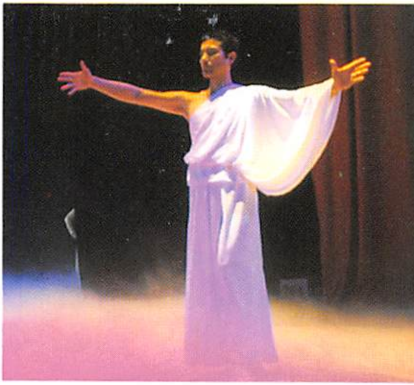
くシーンと静まり返っていた。そんな中、ただ大会宮殿だけが慌ただしくざわめいている。オウム真理教のダンス・オペレッタ「死と転生」公演の準備が行なわれているのである。

夕方六時三十分。開演間近になると、それまで静まり返っていたクレムリン宮殿に大勢の人が押しかけた。どこからこんなに人が集まったのだろうとスタッ



人が死んでから転生するまでの49日間を再現した舞台は、仏教的基盤がないロシアの人々にも受け入れられ、絶賛を浴びた（「死と転生」の内容については、オウチニコフ氏のインタビューを参照 P.43）。





フも驚くほどの混雑。六千百五十人を収容するクレムリン大ホールであったが、日本を代表するオウム真理教の公演を一目見ようという人々でチケットは瞬く間に完売。当日売りを期待してホール前に待つ人々は千名にも上った。

今回の「死と転生」は、振りつけも大ホール用に新しくアレンジし直され、ロシア語の同時通訳が各座席のイヤホーンで聴けるように配慮されていた。幕が上がると多くのロシア人がイヤホーン片手に身を乗り出して食い入るようにステージを見つめていた。公演には、露日基金





ステージ上より、ロボフ氏も「死と転生」を称賛された。

会長のロボフ氏も顔を見せ、舞台終了後は尊師と共にステージに上られ、オウム真理教のロシアへの一連の援助を感謝するスピーチをされた。

「スパスィーバ（ありがとう）！」

尊師のあいさつで幕が降りると、ステージの周りに続々と人が集まり、今回の公演についての感想を語ってくれた。胸を押さえてわき上がる感動を表現する人、連絡を求めて進んで住所を書く人なども続出した。

「音楽も素晴らしく、舞踏も技術がハイレベルですね。」

「仏教徒ではないけれど、この舞台でのことは信じることがで

きます。」

「わたしはモスクワ仏教徒協会の会員ですが、仏教の教義にのっとった舞台を見れるのは非常にうれしく思います。このような企画は素晴らしいですね。」

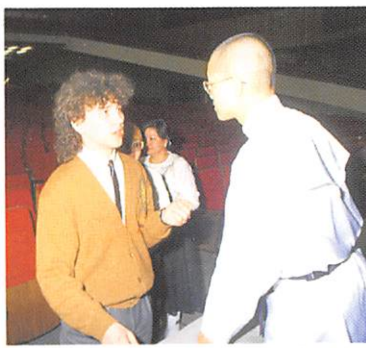
「二回目の公演はいつですか。友人にも見せたいので教えてください。また、オウム真理教のモスクワのセンターができたら、すぐ連絡してください。」

言葉を超えて、文化を超えて、モスクワの人々を魅了した「死と転生」。大成功に終わったこの公演の売り上げは、恵まれない子供たちのチャリティー基金として寄付された。



モスクワの町のそこここで、「死と転生」のポスターを目にすることができた。







公演後、オウム真理教のスタッフを捕まえて、感動を伝えるモスクワっ子たち。

◆ノーベル賞学者を交えて "真理を科学する"

三月十三日、モスクワ工科物理大学学長、そしてレーザー研究でノーベル賞を受章したバソーフ博士との会見が行なわれた。オウム真理教の技術者を交えて物理学の未来について話は弾んだ。

翌日には、ロシア連邦スポーツ委員会会長とも会談し、修行の成果のスポーツに対する応用を試みるオウム真理教との交流を約束した。

三月十五日、尊師より病院にエイズからロシアの子供たちを



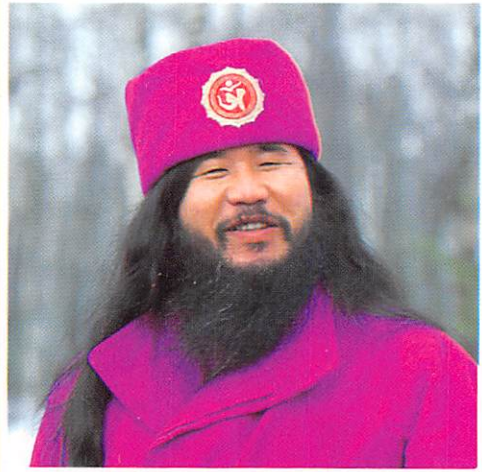
モスクワ工科物理大学学長との会談。



尊師からエイズ撲滅のための注射針百万本が贈呈された。



身ぶり手ぶりを交えながら、オウム真理教の物理の専門家たちからの質問に答えるバソーフ博士。



守るための注射器千本と注射針百万本の贈呈が行なわれ、今回のオウム真理教ロシア訪問は一旦幕を閉じた。

宗教・科学・文化など、麻原尊師とオウム真理教の持つ多面性が花開いた観のあるロシア訪問——今後も病院建設、科学技術交流など長期的展望に立った活動が継続されていく予定である。

長い共産党支配が終わり、精神的支柱を求めているロシアの人々のために、この地に仏教が、真理が芽を吹き育っていくことを願わずにはいられなかった。

世界を真理で幸福に

3月9日

尊師講演会

於：モスクワ大学

モスクワ市内を見下ろすように堂々たる姿で建つモスクワ大学。さしずめ日本でいえば東大といったところだろうか。ロシア最高峰に位置する大学で、学生数三万人、スタッフを入れて六万人の規模である。大学の新館は二十八階建ての偉容を誇る建物で、敷地内は車で移動しなければならないほど広い。

三月九日の朝、麻原尊師はこのモスクワ大学の第一副学長であるサドウニチ氏（当時、学長選挙で学長は不在。現在は氏がモスクワ大学学長となっている）と教育、文化、ロシアの未来について話し合われた。

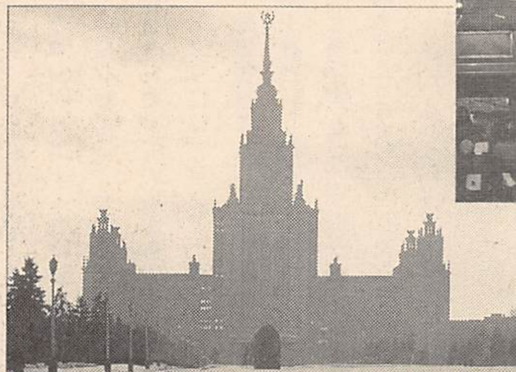
そして、その午後、モスクワ大学の講堂で行なわれた尊師講演会には、六百人を超える聴衆が詰めかけた。講演前後には、オウム真理教のスタッフをつかまえては、身振り手振りを交え熱心に質問する学生の姿があちらこちらに見られ、モスクワの若者が宗教に対して強い関心を寄せていることをうかがわせた。





尊師の講話に聴き入る学生たち。







真剣な眼差しで



サドウニチ モスクワ大学第一副学長。

◆ロシアの夜明けに向けて

オウム真理教の麻原彰晃です。モスクワの皆さん、初めてお目にかかります。よろしくお願いいします。

今、このモスクワをはじめとして、ロシアは一つの過渡的時期に入ってきています。しかし、この過渡的時期は、世界のどの国も経験したことのない、ある意味で素晴らしい過渡的時期のように、わたしには思えます。それは、すべての魂の物質的平等、物質的幸福、そして世界のプロレタリアートの物質的向上といった共産主義のもとに、国家建設を計画的になされていたソビエト。そのソビエトが、いよいよ物質の段階から精神の段階に、心の段階へと移行していっているからです。

もともとモスクワには、ロシア正教という一つの伝統的宗教が存在しています。そしてこのキリスト教の預言にも、あるいはまだあまり浸透していない仏教的予言の中にも、資本主義対共産主義という物質的世界の流れ、これを過渡期とし、そしていよいよ精神の本質的な流れへと移行するというふうに予言されています。

そして、例えばここにいらっしゃるモスクワ大学の学生の方をはじめとして、わたしは

今回、多くのロシアの方々とお会いすることができましたが、そのどの方も知的で、そして合理的、数学的思考をなさる方だなという印象を持ちました。

◆真理の実践とは?

もちろん、すべての現象、すべてのフェノメノン（編集部注：phenomenon 現象、事象、兆候）は、数学的に、あるいは科学的に割り切れないものは何一つ存在していません。例えば、スポーツの世界を例に採ってみましょう。もし、ある人が水泳において世界のトップレベル、あるいはオリンピックで金メダルを目指して練習したとしましょう。当然この人の筋肉は、水中用の筋肉となりますから——もちろん筋肉の全体的発達ということがありますから、他のスポーツに対してもある程度通用するでしょうが——当然水泳向きの体が形成されます。

これと同じように、もし人間が人間の意識から離脱し、神の意識状態に至る条件を一つ一つクリアするとするならば、その人の人生そのものが神と同じ価値のあるものとなることは疑いありません。

例えばある人が、数学において世界的名声を得たいと、あるいは数学において、世界のトップの学者になりたいと考えるならば、その日々の研究の中で、数学と、そして、例えば空間との関係、例えば科学との関係、そして現象と数との関係について徹底的に思索・検討を繰り返すことでしょう。

これらと同じように、人間はどのようにしたら幸福になれるのか、どのようにしたら苦しみを超越できるのかということを命題に、日々の生活をコントロールしていくこと、これが真理の実践です。

◆布施、持戒、忍辱の実践

この真理の実践には、在家の六段階の実践と、そしてその後ある生に到達した場合、つまり、その在家の生を何生か何十生か繰り返した後に、出家し、そして供養に値する魂へと至る段階の二期に初歩的な教えは分類することができます。

まず第一の段階は、物質的に貧しい人に対して、あるいは困っている人に対して、どんどん物を施してあげる。あるいは、精神的に苦しみを感じている人のところに行って、そ

の人の苦しみを取り除いてあげる。あるいは、絶対的真理の法則を、世の中に広めるといったような作業、これを実践します。そしてこの段階を、第一ステージ、布施の段階といいます。

第二の段階では、わたしたちの心の要素、言葉の要素、そして、行為の要素を客観的に分析し、苦しみの要因を捨断するステージである持戒のステージが待っています。この第二ステージの基本的な戒律は、まず生き物を殺さない、人のものを盗まない、愛のないセックスをしない、嘘をつかない、そして必要のない言葉をしゃべらない、悪口を言わない、人を誹謗(ひぼう)・中傷しない、そして、心において他人に対して邪悪な心を持たない、必要以上の愛著、つまり対象に対してとらわれない、そして迷妄を取り払うといった十の戒律の実践段階へと入っていきます。

なぜこの段階が必要なのでしょうか。それは真に多くの人々に尊敬されるためには、あるいは、多くの人々をリードするためには、心の豊かさ、そして物質的優位性、言葉の力、そして心のクリアさといったものが必要となるからです。

例えば、ここにいる皆さんが、この第一段階の布施の実践、第二段階の持戒をもし実践

なさるならば、それだけで五年後、あるいは十年後には、偉大な力を有することとなるでしょう。

第三の段階は、耐え忍ぶという段階です。この耐え忍ぶ段階によって、強靭な意志の力を培います。例えば、皆さんが経済活動にしろ、あるいは科学の研究にしろ、あるいは芸術活動にしろ、あるいは政治という道を選ぶにしろ、どの道を選ぶにしろ、強い耐える力、そして強い意志の力が必要です。そして、この強い意志の力を実現するためには、生命の強いエネルギーが必要となります。そのためにも第一のステージ、第二のステージの通過が必要なのです。そして、この忍辱(にんにく)のステージに到達すると、この世でかなわないものは何一つないといわれています。

◆奮闘努力、瞑想、智慧の実践

では、第四のステージは何でしょうか。これは奮闘努力のステージといわれています。この奮闘努力とは、自己の限界を絶えず超える努力をするステージです。では、何を奮闘努力するのでしょうか。それには四つの段階があります。





尊師講演会のポスターに見入る学生。



まず第一の段階は、今なしているいいことを、よりいっそう拡大しようとする努力です。第二の段階は、今まだなすことのできない善行を、早く実現化させようとする努力です。第三の段階は、今なしている悪いことをやめてしまおうとする努力です。そして第四の段階は、今はまだなしていないけども、未来においてなすかもしれない悪いことを、なさないようにしようとする努力です。そして、これらの努力を奮闘する、これらの努力を徹底的に行なう、これが第四のステージです。これによってわたしたちの心はクリアになる。わたしたちは、わたしたちの心の内側について思索・検討することができるようになります。

そして、この段階に来ると、わたしたちは初めて瞑想をする権利を与えられます。

ではなぜ、それまでの段階で瞑想することが不利益になるのでしょうか。もともと瞑想とは、わたしたちが生まれる前から、あるいは生まれてから行なってきた善行、あるいは悪行、あるいは善行にも悪行にも属さないこと、これを内側の目で経験することなのです。ですから、もし瞑想する人が人間、あるいは人間以下の心の状態であったり、あるいは人間・人間以下の意識の状態であったりするならば、その人は、その低い世界の経験を瞑想

と勘違いし、堕落することとなるでしょう。

例えばそれはちょうど、英語を一生懸命勉強していた人が、ロシアへ来たとして、全くその英語というものは使いものにならないのと同じです。つまり、英語を一生懸命勉強した場合、当然それは、英語の通じる国にだけ通じるのであり、例えばロシア、あるいは日本といった、別の言語形態をとっている国では、通用しないということなのです。

そしてわたしたちは、瞑想の狙いとしては、今の人生の終わり、そして生まれ変わりのときに、神になり、あるいは神以上の存在になることを今実践しているかどうかの確認のために、瞑想を行なうわけですから、当然その前の段階で、わたしたちの心、あるいは意識といわれるものは、神の状態に至っていなければ何の意味もなさないわけです。

そしてわたしたちは、わたしたちの内側をクリアにした後、そして、最終的には瞑想によって、その一つ一つのけがれを取り除いた後、わたしたちは最後に、智慧(ちえ)の段階へと入ります。

この智慧とは何なのでしょうか。これは、例えばロシアでも研究されている超自然的な力、神の力を得、神に到達するステージへと入ってくるわけです。

第一番目のステージは、頭頂から別の身体を抜け出させ、そして、いろいろな世界を経験するステージです。第二番目は、神々と会話をする力です。第三番目は、他人の心を読み取り、視覚的に見る力です。第四番目は、自分自身の生まれる前の生、これを何生も何生も見、また他人の生まれる前の生を何生も何生も知る力です。そして、第五番目は、例えばここにある人がいたとして、この人は今行なっている言葉・行為・心の働きによって来世どうなるのかを知る力です。そして、この段階の最終的な智慧、これは苦しみ、どのようにして苦しみが生じるか、あるいはどのようにして苦しみを滅するか、あるいはその滅するための方法は、どのようなものがあるのか、あるいは欲望とは何であるか、欲望はどのようにして生じるのか、その欲望はどのようにして滅することができるのか、あるいは滅するための方法はないのかと、これらを学ぶことなく知る力です。

◆豊かな心を培うために

そして、これらの基本的在家の訓練を何生も何生も行なった魂は、より積極的なマハーヤーナの世界へと入っていきます。これは、すべての魂の自由、絶対的な自由・絶対的な

幸福・絶対的な歓喜を与えるための修行です。この絶対的な自由・絶対的な幸福・絶対的な歓喜を与えようとする魂の訓練は、四つの心のパートの訓練に分けることができます。

その第一は、すべての魂に対して慈愛を持つこと。第二番目は、すべての魂の本質的不幸に対して悲しみを抱くこと。第三番目は、すべての魂の長所に対して、称賛を実践すること。そして、第四番目は、自己の苦しみに対して、あるいは自己の苦痛に対して、それに頓着しないということです。

真理の実践に慣れていない人は、次の言葉を聞いたら、ちょっとびっくりするかもしれません。このマハーヤーナの修行の基本的思想は、「自己の苦しみを喜びとし、他の魂の苦しみを自己の苦しみとする」という思想です。この実践は、一見、自己の幸福のために行なう修行という点から考えると、あるいは自己の幸福を追求するための宗教という点から考えると逆説的な矛盾を感じるかもしれません。しかし、実際わたしたちの感覚、例えば苦しみに対する感覚、あるいは苦しみに対する心の働きというものは、人それぞれ違うわけです。

例えばこのモスクワは大変寒いわけですが、マイナス六度、あるいはマイナス七度となっ

たとき、ある人は大変寒くて、凍えそうだと感じるでしょう。ある人は、寒いけども、耐えられない寒さではないと感じるかもしれません。ある人は、その寒さに対して、ほとんど気にならないかもしれません。

実際わたしの経験した瞑想においても、マイナス一三度、マイナス一四度の中で、裸でその空間に座り、そこで瞑想するといった修行をなしたものです。もちろん心臓の部位は青くなり、うっ血状態になりました。しかし、感覚は寒さを全く気にしない状態を形成することができるのです。

これらの実践は、すべて先程述べた、自己の苦しみを喜びとし、他人の苦しみ、他の魂の苦しみを自己の苦しみとするという思想から出ています。

このロシアという大国は、多くの資源を有し、多くの素晴らしい人材を有し、未来に対する可能性を大変秘めた国であると思います。もし、ロシアの人、一人一人が、ロシアの国のために、いや地球人類すべての人のために、このマハーヤーナの思想を身につけることができたならば、資源、そして人材、そして、その発達した心の状態という三つの条件によって、世界でも最高の豊かな国へと変化することは間違いないはずです。

仏教において、この地球を四つの大陸のパートに分けています。そして、このロシアはクル州と呼ばれています。そして、このクルの大陸には、お釈迦様も何度となく生まれ変わられ、そして王様になったと仏典には記載されているのです。確かに、例えば神秘主義者であったマダム・ブラバツキーをはじめとし、このロシアの、例えば国旗に表われている、白・青・赤という三つの色、これらはすべてわたしたちの内的エネルギーの状態を表わしていますし、例えば、科学的超能力の研究――これは今も行なわれているわけですが――これらの伏線も、先程述べた仏教の開祖であるお釈迦様の遠い遠い昔のデータ、これが働いてるのかもしれません。いずれにしろ、このロシアの発展の可能性というものは、多大なものがあることは間違いないのです。

◆二つの選択

今日の講演の最後に、オウム真理教の宗教的姿勢について、少しお話をしたいと思います。オウム真理教の姿勢と、このロシアの科学文明との間には、大きな共通性があります。密閉されたステンレス・チェンバーを用意し、そこでの呼吸の状態を測り、つまり酸素の

消費状態、二酸化炭素の増加状態を測り、完全に呼吸の停止、これが二時間、四時間、あるいは長い場合は十二時間といった経験をした者のみを成就者と断定しています。この段階が、サマディ、瞑想の最終段階といわれているステージだからです。

これらの実験や、あるいは瞑想によって体温を上昇させる実験、その他科学的に証明できるものをどんどん証明していこうとしているわけです。

それはなぜでしょうか。それは、例えば死後の世界は存在する、あるいは存在しない、あるいは存在する人もいれば存在しない人もいるといったこのような議論に対して、単純に経験だけ、つまりその瞑想家の経験だけに頼っていたのでは、すべての魂に納得させるデータを提供することができないからです。そして、わたしたちが生きている意味合いというものは、すべての魂の絶対的な自由・幸福・歓喜を与えることにあるわけですから、科学的検証によって、すべての魂を——まあ、初めは一部かもしれませんが——導きたいと考えてるからです。

オウム真理教は、これから、例えばロシアの科学者、その他にお願いして、わたしとそれから弟子たちのそういう内側の体験をよりいっそう科学的にデータとしてまとめ、ロシ

アの国の方々、あるいは日本の国の方々、いや、最終的にはすべての地球の人々に、その御国(みくに)の福音(ふくいん)、つまり神々の世界の教えを広めたいと考えています。

あなた方には二つの道が存在しています。それは、見える世界だけを信じ、欲望を満足させることに奔走し、結局、欲望を満たすことのできない状態でこの人生を終わるのか、あるいは欲望を超越し、神に至り、神を超越し、あなた方の本質的な、絶対的な自由・幸福・歓喜を得るのか。この二つの道の選択をするのは、あなた方一人一人です。

今回は皆さんと、初めての会です。これから、わたしの方からも積極的に皆さんに近づいていきたいと思いますから、皆さんも、興味のあられる方は、ぜひとも真理の実践を行ない、そして皆さんの最高の状態へと、到達していただきたいものです。

世界の平和のために
——シャンバラはつくり上げるもの

3月11日

オウチニコフ氏インタビュー

於：モスクワ　ペンタ・ホテル

オウム真理教がロシアで行なった援助・救済活動について、海外をはじめとして日本国内のマスコミの多くが取り上げ報道した。

中でも、尊師の九日間の活動に常に関心を持って取材に当たっていたのが、共産圏第一の新聞、プラウダ紙（現在廃刊になった）の政治論説委員であったオウチニコフ氏だった。氏は、日本や中国問題に詳しい論説員として知られており、宗教にも深い関心を寄せていた。「死と転生」公演、尊師のモスクワ大学講演にも姿を見せ、熱心にメモを取っていたオウチニコフ氏が、ホテルに尊師を訪ねて急きょ申し込まれたインタビューは、尊師のロシアでの活動について、そして仏教の奥儀についてと多岐にわたった。特に「死と転生」公演は、かつてダライ・ラマ法王と会見したこともあるオウチニコフ氏にとって興味深かった様子で、コメントを寄せてくれた。

「わたしたちは、今日の舞台で、チベットの経典を見ることができました。この音楽・舞踏による公演は、西洋人にとってとてもわかりやすく、オウム真理教が日本の知的水準の高い若者の信徒をたくさん持っている理由がよくわかりました。」



モスクワ大学での尊師講演にも出席されたオウチニコフ氏。



社会問題から宗教まで、氏のインタビューは多岐にわたった。





氏によって「チベット経典の再現」と評された
ダンス・オペレッタ「死と転生」。

◆ロシアに真理を

――麻原尊師の名前は、外国でもよく知られています。スリランカやラオスに国賓として迎えられていらっしゃることや、チベットのダライ・ラマ法王とも密接な関係を持っていらっしゃることもよく存じております。ところで、今回は、どういう目的でロシアにいらっしゃったのでしょうか。

（尊師）ロシアに真理を広めたいと考えています。その真理の目的とは何かというと、すべての魂を十三段階の救済の流れに入れていくこと、それを、このロシアでも行ないたいなと考えているんです。

その十三段階の救済計画というのは、少し長くなりますので簡単に説明させていただきますと、まず第一段階は、お釈迦様の教え、そしてお釈迦様の弟子、そしてお釈迦様自体――まあ、わたしとしてはお釈迦様の弟子ということになるわけですが――その人たちに対して信を持って生活する。

第二番目は、その教えを理解して、その教えの法則に従って生きるようにすると。

そして第三は、この苦しみの世界に最高七回生まれ変わり、八回目は生まれ変わらないで、より高い世界へ生まれ変わる。

で、第四番目は、人間界へ生まれ変わるわけですが、人間世界の中でも特に豊かな、といってもかなり豊かな家に生まれ変わり、

そこで真理の実践を何生か行ない、そして、もうその後はこの苦しみの世界へ生まれ変わらないという転生です。

第五番目は、その人のデータというか心の働き、これがただ真理しか存在しないようにする。これは仏教的な言葉を使うならば、地獄・動物・低級霊域（ていきゅうれいいき）という三つの世界へ生まれ変わらないということを意味しています。

第六番目は、この苦しみの世界にはもう生まれ変わらないで、絶対的な幸福と歓喜のある形状の世界へ生まれ変わるという段階です。

第七番目は、その形状の世界の中の最高の世界で、年をいっさい取らない、いつも若くしていられる状態で、幸福と歓喜を有する世界へと生まれ変わります。

第八の段階は、年を取らない世界へ生まれ変わり、そこで努力をし、そしてそれによって〝不死〟つまり、死を超越した状態へ至るという段階です。

第九の段階は、同じように年を取らない世界へ生まれ変わるのですが、その段階で、そこでの幸福と歓喜を味わい、その後自然な状態で不死を得る段階です。

そして、第十の段階は、より深い非形状の世界――形の存在しない世界へ転生しまして、そこで勝手に煩悩が減少し、そして

不死を得る段階です。

それから第十一の段階は、人間は死ぬわけですが、死後しばらく経ってから、だいたい七日以上経ってから、そこで完全にその煩悩を止滅し、そして不死を得る状態です。



そして第十二番目の段階は、死の直後に同じように煩悩を止滅する段階です。

そして第十三番目の段階は、生きながらにして煩悩を完全に止滅し、不死を得る状態です。

◆ロシアの問題は仏教の実践で解決できる

――オウム真理教の理念の一つとして〝絶対の幸福〟を挙げていらっしゃいますが、残念ながら、ロシアには今のところ激しい対立をはじめとするたくさんの矛盾が存在しています。尊師は、オウム真理教の教えに基づいて、どのように我が国の人々を幸福にしようとお考えなのでしょうか。



（尊師） はい。仏教の教えの大原則は、第

一段階においては、自己の欲望をコントロールすることから入ります。そして第二段階においては、すべての魂の幸福を願い、実践する段階に入っていきます。
特にその中で四つの偉大な心の実践というものがあります。その第一は、すべての魂の幸福を本当に願う心を培う実践です。そして第二段階は、すべての魂の不幸に対して本当に心から悲しむ実践です。そして第三段階は、すべての魂の素晴らしい行為に対して、あるいは素晴らしい言葉に対して、あるいは素晴らしい心の働きに対して称賛をする実践です。そして、第四の段階は、いかなる苦しみに対しても、いかなる自己の不運に対しても全く頓着しない、つまり全くこだわらない実践です。
これらの四つの偉大な心の実践に加えて、真理の第一実践課題は不放逸、つまり努力をし続けることですから、努力を行ない、しかもその努力が、すべての魂のための努力につながるわけですから、当然先程おっしゃったロシアの問題点、例えば憎しみですとか、あるいは闘争ですとか、あるいは相反する意識の人たちに対しての問題というのは、すべて解決されることになるんじゃないでしょうか。
——わたしはぜひ「死と転生」の公演を見にいきたいと思っているのですが、よろし

かったら「死と転生」の内容についてお話しいただけますでしょうか。

（尊師）はい。人間は死ぬときに、必ず五大エレメントの崩壊からのプロセスをたどります。この五大エレメントの崩壊というのは、まず固体成分である肉体の崩壊、次は水の元素の崩壊である血液成分の崩壊、そして三番目に、体温の放出である熱元素の崩壊、次は四番目は呼吸機能の崩壊、そして最後は空間への意識の崩壊ですね。

で、この後、人間は心の本質へと到達し、そして、死ぬまでの経験をその死後に経験することになります。例えば、長い間心の本質を見極めていた人は、心の世界へと入っていきますし、あるいは神々を崇拝する人は、その神々の世界へと入っていきますし、あるいは人間の経験を重視してきた人は、人間の経験へと入っていきます。そして四十九日間という短い間に、その人の死ぬまでの生の経験の集約された形を経験した後、次の生へと生まれ変わるわけです。

それを視覚的に、それから音楽、音を使ってつくり上げられたオペレッタが「死と転生」なんです。ですから「死と転生」をしっかりと理解していただければ、死から次の生までのプロセスは完璧な形で理解できたといえるでしょう。

◆シャンバラこそ地球の理想像

――わたしは以前にダライ・ラマ法王とお会いしたことがあります。その折、法王から〝ジャンバラ〟という言葉を聞きましたが、この〝シャンバラ〟とはどういう意味なのでしょうか。ダライ・ラマ法王とも親交が深く、ヒマラヤで日本人としては初めて最終の悟りの段階を達成された麻原尊師にお伺いしたいのですが。

(尊師) はい。もともと〝シャンバラ〟と





いうのは、これは〝ジューバラ〟という言葉とも通じていまして、「自由自在」を表わしているわけです。
で、そこでの住民は、すべて聖者であり、また神通力者、つまりスーパーナチュラルパワーの持ち主なんですね。そして、そこでの魂は、すべての衆生の本当の意味での幸福を絶えず考えています。
ここで一つ問題になってくるのは、そのシャンバラの民と、それから、わたしたち

もちろん、わたし自体は秘密チァクラを使って、そのシャンバラへ自由に出入りすることはできます。しかし、それはあまり価値のあることだと考えていません。価値のあることは、やはりこの地球全体の魂がシャンバラの住人になることだと思います。

——麻原尊師は、宗教はもともと同じものであるとおっしゃっておられますが、百年ほど前、ブラバッキーというロシア人が、同じような考え方に基づいて自分の神智学を発達させました。このブラバッキーの教えについて、ご意見をお伺いしたいのですが。

（尊師）わたし自体は、ブラバッキー夫人の功績というものは、高く評価しています

人間、あるいは動物が別種の魂であるかということです。もちろんそれは同じ魂だということができます。ですから、わたしたちの計画としましては、この地球のすべての魂が超越的な力を持ち、つまりスーパーナチュラルパワーを持ち、そして、すべての魂の幸福を願う心をすべての人類一人一人が持つようになり、そして、すべての魂が死後シャンバラに行ける、あるいはシャンバラより高い世界、あるいはそれより低い世界ではあるけれども、この人間の世界よりはずっとずっと高い世界へ生まれ変われるような地球づくりをしたいと考えています。

し、もしマダム・ブラバツキーのような実践が世界全体に起きたとするならば、先程言ったとおり、世界がシャンバラ化することは間違いないと思います。

ただ、ブラバツキー夫人が、彼女の経験したものすべてを表現しているとは考えていません。よって、これはわたしの役目でもあるし、仏教徒の役目でもあると思いますが、あるいはヨーガ行者の役割でもあると思うわけですが、そのマダム・ブラバツキーが表現していなかった部分——重要な部分がたくさんあるわけですが——そのすべてを早く公にし、そしてすべての魂の霊的な進化、心の成熟を促すべきではないかと考えています。

——今日は貴重なお話をいろいろお伺いすることができました。どうもありがとうございました。

（尊師） どうもありがとうございました。

仏教と科学、その新しい未来

3月13日

尊師講演会

於：モスクワ工科物理大学



レーザー研究で名高いバソーフ博士。



学長も壇上に上がられ、スピーチをされた。

モスクワ工科物理大学学長、そしてレーザー研究でノーベル賞を受賞したバソーフ博士らとの会談では、オウム真理教の科学者・技術者を交えて量子力学の未来について熱心な討論が行なわれた。

　尊師は以前から、現代理論物理学の到達点と真理――サキャ神賢の説かれた世界観とその法則との一致を指摘しており、最先端の物理学者との交流によっ





モスクワでの尊師の人気は今や日本以上!? 尊師の説法に感動した聴衆から、説法後、一日を割いてもとても対応できないくらいの多くの質問が殺到した。



て真理を科学的に裏づけるというオウム真理教の姿勢を示した。

　この科学者らとの会談後、尊師は工科物理大学の学生、職員に対してアインシュタインの相対性理論と仏教観を対比させながら、すべての事象に対して矛盾なく真理が貫かれていることを説き明かされ、モスクワ大学の講演と同様に会場に詰めかけた大勢の人々に仏教理論の素晴らしさを印象づけた。

◆光への科学的アプローチ

麻原彰晃です。

モスクワ工科物理大学の皆さん、今日は、わたしは皆さんに、目に見えない世界のことについてお話をしたいと思います。

しかし、それはちょうど皆さんが経験していらっしゃる、例えばレーザーと同じように、ある段階から目に見えないものを科学的に証明することができると同じように、精神の世界、心の世界も証明をすることができるのです。

そしてそれは、科学的検査による証明方法と、それからもう一つはAという条件のもとに行なった場合、必ずBという結果が出るという経験的証明の方法と二つに分けることができます。そして、今回の講演は、ここにおられる、ノーベル賞を受賞されたバソーフ博士の論文を材料に、わたしの経験と、それから仏教やヨーガの理論との対比をしながら、皆さんにお話をしたいと思います。

皆さんもご存じのとおり、アインシュタインは、物質と、そして光との関係を三つのパターンに分類しました。

第一のパターンは、吸収。これは光が物質に対して注がれた場合、その光のエネルギーによってその物質の根本はより高い次元へと移行するということです。

第二のパターンは、吸収された光がそのまま自然に漏れると。そして漏れることによって、その物質の根本は低い状態で安定をするということです。

第三のパターンは、誘導による光の放出。これは意図的に別のエネルギーの根本を導入し、その力によってその物質が誘導されたエネルギーの二倍、あるいは数倍、あるいは数十倍、数百倍といったエネルギーを放出する——まあ、これがレーザーの理論になっているわけですが——という三つの物質と光との関係です。

そして、これらの三つの光と物質との関係、これはまさに、人間の生き方と大きな関係があります。

◆光の吸収——四つの実践

わたしたちが宗教の実践を行なう場合、まず、いろいろな意味での修行——これを大きく分けると四つのパートに分類することができますが——その実践を行ないます。



講演開始前、壇上で工科物理大学学長が尊師の紹介をされた。

この四つの実践とは、簡単に説明するならば、まず自分と関係のある人たちにいいことを行なうということが第一です。

第二番目は、自分より上の者――ここでいう上の者とは、例えば宗教上の先生やあるいは神、あるいは神を超えた存在――に対しての奉仕です。

第三のタイプの実践は、これは今皆さんが行なっていることもその一部に入るわけですが、要するにこの宇宙の法則というものを考え、研究し、そしてその法則に従って生きる



という訓練です。

第四の実践は、すべての情報——ここでいうすべての情報とは、外的情報・内的情報の二つに分類することができますが——その二つの情報から、完全に自分の本質、これを切り離すという訓練です。

この、第四の外側の情報・内側の情報について少し説明をしたいと思います。

外側の情報とは、要するにわたしたちが目でものを見たり、耳で音を聞いたり、鼻で感じたり、あるいは舌で味わったり、あるいは体全体の

感覚で感じる、これを捨断してしまう。つまり止めてしまうということです。

内側の情報の捨断とは、わたしたちが今まで経験したもの、経験したものから生じる心の働きを完全に止めてしまうということです。これらの実践を行なうことにより、一時的に、例えば物質的に貧しくなったり、あるいは社会的に今まで行ないたいと思ったことが行なえなくなるといったような現象が起きます。

しかし、この段階でわたしたちの心は、少しずつ少しずつ高い意識状態、中間状態において は神を経験し、そして神を超えた最も高い意識状態を経験することができます。

これは、ちょうど光のエネルギーをどんどん吸収し、物質の本質が高いエネルギー状態に変化していくのと全く同じです。

◆光の漏れによる安定——人間世界における喜びへの還元

第二番目のパターンは、これは一般的にわたしたちが行なっている、他人に対していい言葉を話すだとか、あるいは身近な人にいいことを行なうだとか、あるいは心において正しい心を持ち、そしてすべての人のことを考えるだとかいう状態を、自然に漏らして、自

然に光として放出している場合です。

この状態になると、わたしたちは、その光イコール、喜びをこの人間世界において経験することができるようになります。つまり、本来は高い意識状態へ至るはずの光を、わたしたちはこの人間の世界における喜びとして還元するわけです。

◆誘導による光の放出――イニシエーション

第三のパターン、これはまさにバソーフ博士が発明なさったレーザーの理論と一致するわけですが、これは英語的な発音をするならば「イニシエーション」、まあ日本語的な発音をするならば「得度(とくど)」という、他人に対して他人の意識を変革する技術と全く一致するヴァイブレーション、誘導という考え方があります。

これはどういうことかというと、まず神々をしっかり観想する、その神々の周波数と同じ周波数を導くことのできる修行者が、つまり聖者がしっかりまず神々を観想すると。そして、それによってまず神々の光を導き入れると。そして、この周波数に合った自分自身の今まで積んできた、自分自身を高い意識状態に安定させている電子を、電子の位相を一

つ落とすことによって、そして、それを繰り返すことによって強烈な光のエネルギーを放出すると。それによって、その対象となる、まだあまり宗教的に特性を持たない人たちの意識をハイにしてしまう。もちろん、このとき、そのエネルギーを放出する人の意識状態は、いったん下がります。

◆オウム真理教の科学的アプローチ

わたしはこのレーザーの理論を読んだとき、まさに宗教、あるいは精神の世界と、それからこの物理で研究されている世界は同じであることに気づきました。

では、これらのことを次に科学的に検証する方法はあるのかという話をしましょう。

オウム真理教においては、完全なブラックボックス、つまり光の全く入らないステンレスのチェンバーを持ってます。なぜ、この真っ暗な光の入らないステンレスのチェンバーが必要なのかというと、その中で人体から発されるフォトンの数を数えているからです。

これは、先程も話したとおり、人間が善をなし、徳を積み、法則に従った修行をなし、そして寂静の修行をするならば、その人に蓄えられる光の量、および、放出される光の量と

いうものは増大するという考えに基づいているものです。

そして、これは明らかに、その修行のステージ、つまり修行レベルによって変化することが確認されています。もちろん、長い間、正しい修行を積むことにより、その人の放出することのできる光の量、それからその人の蓄えることのできる光の量が違うんだということが証明されています。

◆仏教は科学である

なぜ、わたしたちがこのような科学的検討を行なっているかというと、それはもうすでに、二十一世紀に入ろうとしている今、宗教は存在する、あるいは存在しない、神は存在する、あるいは存在しないといった討論というのは、ナンセンスであると考えているからです。

例えば、バソーフ博士のレーザーの発明、これは明らかに、アインシュタインの理論に基づいたものです。そのものが存在するのか否かということは、今わたしたちが知っている限りの手段を使い、科学的に検討する以外、その存在を証明することは不可能であると

わたしは考えているんです。
ところで、今から二千六百年前にこの世に生まれられた釈迦牟尼、正確な言い方をすれば、ゴータマ・シッダールタという偉大な聖者があります。彼は、ヨーロッパにおいては、今までにない最高の科学者であるという評価を受けています。
例えば、彼の残した経典の中には、この地球の破壊される状態を、克明に弟子たちに説いている経典群があります。このときの物質の変化の様態は、まさに現代物理学で説かれているプロセスと同じです。つまり、まず第一に、地球上の水分が蒸発し、そしてこの地球全体が炎と化し、そして完全にプラズマ化し、そしてプラズマが最終的には核融合の状態を形成すると、このように経典で説かれています。そしてそのとき、ものすごい風が生じる、つまり核の風が生じることまで、その経典にはうたわれているんです。
ところが、これをもし皆さんに、これが仏教ですよという話をしたとしても、あんまりお信じにならないかもしれない。それはなぜかというと、精神世界に興味を持っていらっしゃる方は、あくまでもそれを精神世界の中での話であるというふうな言い方をする。
しかし、よく考えてみましょう。わたしたちの所有しているものは、聖者であろうとも、



ノーベル賞を受賞したバソーフ博士を交えて、理論物理学の未来について語り合う導師。



バソーフ博士

あるいは科学者であろうとも、同じものを所有しています。つまり、この肉体にしろ、あるいはこの地球にしろ、あるいはこの宇宙にしろ、同じものを見ています。しかし、その分析方法が違うだけで、もし分析方法が違い、結果が違うとするならば、それはどちらかの理論に矛盾があるのです。そして、それを論理的に追求したもの、形而上的ではなく、論理的に追求したものが真理であり、仏教なのです。

そして、科学にも同じような分野があります。それは、例えば理論物理学です。あくまでも彼らの研究は、数学的に表現されるにすぎません。この追究の方法と、それから仏教的思索というのは、全く同じです。ですからこの二つの間に、もし結論上の矛盾が出るとするならば、それは、どちらかの検討が正しくないことを表わしています。

理論物理学については、それを検証することが義務づけられ、そして仏教的思索における経典については、それを検証する科学的方法が義務づけられないというのは、これは大きな、わたしは矛盾だと考えています。そして、これらの理論的問題一つ一つが完全に検討され、そして取捨される、つまり、これは正しい、これは正しくないという形で選択されていくならば、本当にわたしたちにとって真実だけが残るのではないでしょうか。

◆修行ステージは科学的にチェックできる

実際、例えばオウム真理教の修行過程において、完全に密閉された圧力容器を用意し、そこで、その弟子が完全に経典どおりの経験を達成しているかどうかのチェックを行ないます。瞑想に入ると、高いステージに到達すると、必ず呼吸が停止します。そして、少なくとも一時間二時間の呼吸停止が計測的に認められない状態では、その人を成就者と認定はしません。

これらの実験の意味合いは、先程も述べたとおり、宗教は必要であるだとか、必要でないだとか、神は存在するとか、存在しないとか、あるいは、まあ例えば、いいことをなせばいいことが返ってくる、悪いことをなせば悪いことが返ってくるだとか、それらすべての理論の背景にある根本的教えを科学的にチェックしているからなのです。

例えば、わたしは一冊の本を書き上げるのに、半日以上かけたことはありません。あるいは作曲を行なうとき、一日に二十曲ぐらい作曲します。そしてこれらを行なうとき、先程述べた、光の自然放出が強まるのです。

つまり、何を言いたいかというと、わたしたちが本当に幸福になるためには、光を蓄え

ればよろしいと。それは先程言った、四つの実践をすればよろしい。そして、貯金と同じように、必要なときにそれを放出すればいい。そしてすべての魂を、高い意識状態に導くためには、先程も述べた、その蓄えられたエネルギー、プラス、神々と波長を合わせることにより、神々からの光を流入させ、レーザーと同じ方法で、その対象となる人たちに放出すればよろしい。

そして、これらのことが実際に行なわれているか否かは、先程述べたフォトンカウンター、あるいはブラックボックスのチェンバー等の実験によって、検出することができる。そしてこれらのステージに到達しているかどうかは、完全なる気密の加圧チェンバーにおける酸素消費のチェック、あるいは二酸化炭素の流出のチェックによって、わたしたちは正確に判断することができると。

◆二十一世紀に向かって

この高い科学レベルを持つ地球が、より高い科学レベルを有するためには、わたしたちがたくさんの光を蓄え、より高い意識状態になるしか方法はありません。

もうすでに、二十一世紀になろうとしています。この時代に、わたしは無神論である、あるいはわたしは神を信じる、つまり有神論であるといった論議はナンセンスです。わたしたちがより発展する、わたしたちがより高い意識状態になる、その方向に向かって、わたしたちは検討・検証、そして努力を積み重ねていかなければならないのです。

ここにいらっしゃる、モスクワ工科物理大学の皆さんは、現象をありのままに正しく見つめようと努力していらっしゃる方々だと思います。しかし、例えば可視光線と不可視光線があるように、もし不可視光線に対して、それを計測する技術がなかったならば、わたしたちは不可視光線の存在を本当の意味で実感し、知り得ることはできなかったでしょう。

それと同じように、この宗教の世界は、見えない部分に属しています。見ることのできない部分に属しています。しかし、これだけ進んだ計測技術のある現代では、そのかなりの部分を証明することができるはずです。そして、わたしの生きている意味合いそのものは、それらを証明することにあると考えています。

どうもありがとうございました。

長い長い時を経て
――十三段階の救済計画

3月15日

尊師説法

於：モスクワ　ペンショナット・クレズマ

モスクワ訪問最終日、ホテルのホールを借り切って大説法祭が行なわれた。それは、ロシア滞在中、連日各界の要人と会談なさった尊師が、信徒さんと交流できる貴重な時間だった。

共産主義の崩壊という一つの時代の流れの中で、今まさに大きな過渡期を迎えているロシア。そこでオウム真理教が繰り広げた活動は、尊師が日々説かれている〝利他の実践〟に他ならなかった。

仏教世界観を表現した「死と転生」のチャリティー公演、エイズから子供たちを守るための百万本の注射針の贈呈、低所得者のための病院建設計画、そしてロシアの未来を担う若者に説かれた真理の法則――。これらは尊師の他を利する心によって必ずや実を結んでいくだろう。

「このロシアに対して、日本で初めて具体的な援助をしてくれた」と尊師の今回の活動を評価してくれたのは、日露基金のロボフ氏だったが、これはオウム真理教が常に極めて実践的な宗教団体であることの一つの証である。いずれにしても、今回の訪問によって、ロシアの地に真理という希望の明かりがしっかりと灯されたことは間違いない。















◆真理で量子力学を超える

今回ロシアへ来て感じたこと、これはオウム真理教の理論構成の実践における欠落と、そして逆に何をどのようにしたらより充実するのかという二つの点を考えさせられました。まず、オウム真理教の理論から、それを現象化させるための欠落、これは特に広報技術課（編集部注：オウム真理教の出家修行者による科学技術の研究開発部門）の、教義とそれから現代物理学のオーバーラップ、およびそれを超えた理論の構築、そしてその理論の構築と同時に、その理論を具体化する作業、これが必要であるということです。

皆さんもご存じのとおり、量子物理学の行き詰まりの原因は、不確定性原理にあります。この不確定性原理とは何かというと、例えば、ある原子があったとして、その原子がいつ崩壊するかは、確率的な方法によってのみ知ることができると。つまり、はっきりとわからないということがこの不確定性原理です。しかし、もしオウムの三グナの理論、ラジャス、タマス、サットヴァ——これは、クォーク理論とかなり共通している部分があるわけですが——ここの解明、および、まず解明できなくとも論理的構築がなされるとするならば、わたしたちは今の物理学を超えて、量子力学を超えることができるでしょう。

例えば、皆さんもご存じのとおり、物理学はニュートンからアインシュタイン、そして今の量子物理学へと移行しています。そこで、ストップしているわけです。そして、それを超えるためには、より深い経験的瞑想から生じた最高の教えであるヨーガ理論や仏教理論、これをもとに新しい物理学の構築をする必要を痛切に感じました。そうでないと、科学は単なる科学技術へと落下してしまうプロセスをたどるしかないと。

◆さらに進んだ医学体系を

次に、優れた点についてお話をしましょう。これは医学です。わたしの、このロシアへ来て得た情報――それからこの情報というのは、耳で聞いた情報とそれからもう一つはアストラル、あるいはコーザルから降りてくる情報の二つあるわけですが、この両方の情報、それから今までのインド、あるいはアメリカ、ヨーロッパ等を歩き回って得た情報の統合から判断すると、今の現代医学は火元素までの医学であると。風のコントロールを行なう技術というものは、どの世界も持ち合わせていないと。

よって、オウム真理教が、この風エレメントのコントロール、および風エレメントの活

用を自在に行なうことができるようになるならば、今の医学を超えた、超自然的な医学、そしてこの超自然的医学はほとんどの病気を完全に消滅させる超自然的医学を構築することができると。そのためには、ドクターは、今持っている自分たちのちっぽけな観念や知識を捨て、そしてもう一度教義に立ち返り、教義をもとに今の医学体系を再チェックする必要があると。

これは、大変な作業になるでしょうが、これは簡単に実現するであろうと。それは、ドクター一人一人が意識において自己を変革する。そして、高い世界のデータを現象化しようとする意識があれば、もう論理的にはすでにかなりの論理が組み立てられているわけだから、それを具体化することはそれほど難しくないのではないかなと考えました。そして、これらの二つの示唆は、より具体的な救済に大きな影響を与えるだろうと考えています。

◆大乗の修行──減少煩悩破壊

ところで、わたしたちは十三段階の救済計画を実践しなければなりません。この十三段階の救済計画とは、皆さんも知っているとおり、信に従うもの、法則に従うもの、そして


ロシア救済大説法祭



最高七回流転者、家から家へと――この家から家へというのは豊かな家から豊かな家へと転生する者、それから一度だけ愛欲の世界へ生まれ変わり、愛欲の神々の世界へ生まれ変わり転生する者、それからいったん形状界へ入り、落ちてきて、それから煩悩破壊する者、それから形状界に完全に入り、そこで修行し、そこで煩悩破壊する者、形状界に入り、そこで楽しみを経験し尽くした後に煩悩破壊する者、もちろん、この二つの前に超越童子天へ至らなければならないことは言うまでもありません。

そして、これはエンパワーメントを行なう者、大乗の修行者のステージといってもいいわけですが、減少煩悩破壊と。減少煩悩破壊とは、相手のカルマを多く受け、そのカルマを時とともに自然に消滅するステージです。

今日は、この減少煩悩破壊についての説明をしましょう。この減少煩悩破壊については、今まであまり説明をされていません。この減少煩悩破壊は、わたしたちにとって最も大切な煩悩破壊のプロセスの一つです。これは、どういうことでしょうかと。これは、例えばある修行者がいて、その修行者が成就すると。そして、他のカルマを引き受けると。他のカルマを引き受けた段階で、その人はいったん煩悩的になると。しかし、その人は自然に

その煩悩的な要素が減少すると。そして、完全な煩悩破壊の状態に至ると。

◆ポイントとなる——三宝帰依

おかしいなと。なぜ、いったんしょったカルマを煩悩破壊できるんだと。疑問を持たれるかもしれない。しかし、それはこのように考えたらよろしい。つまり、煩悩を吸収するとは何かというと、その低位の意識にある者と意識を合わせるということ、これが煩悩をしょうということです。意識が合うとどうなるかというと、相手のデータが入り、こちらのデータが相手に至ると。そうすると、相手のデータは浄化され、こちらのデータは濁ります。ところが、その成就者が、もし三宝に対するしっかりとした帰依が生じているとするならば、どうなるかと。エンパワーメント以外は、完全に三宝に意識が向かっているわけですから、その三宝の浄化された意識と、それから自分がしょった意識とが交ざり合った形となり、そして自然と消滅します。

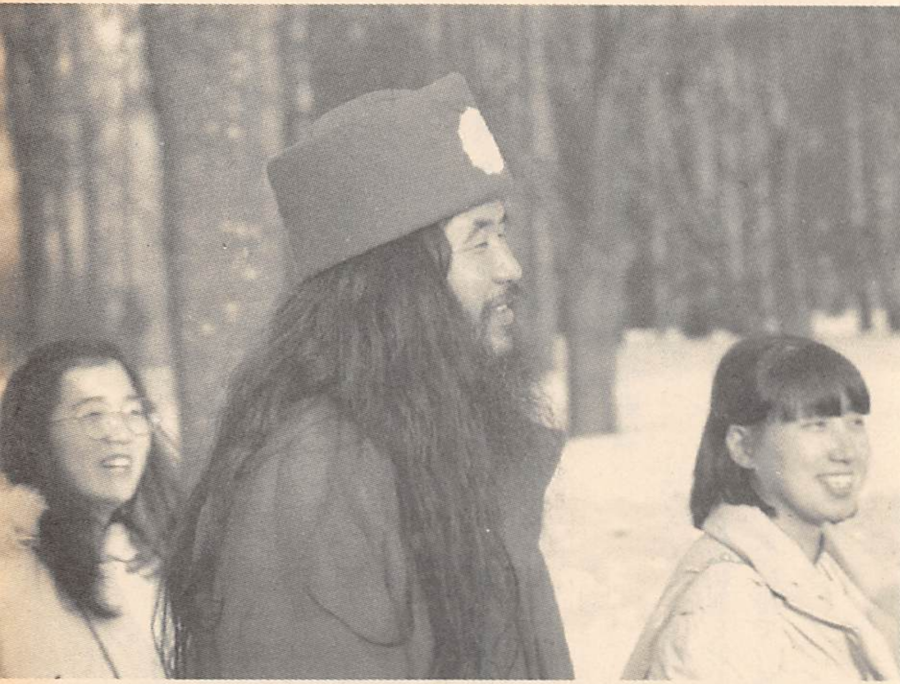
それはおかしいじゃないかと。つまり、それは三宝、例えばシヴァ大神、あるいは真理勝者、あるいはヴァジラの神々やタントラの神々が結局負担を受けることになるではない

かと考える人もいるかもしれない。しかし、例えば大海に、ね、例えば、おしっこをしたとしても、大海はそのおしっこを綺麗に薄めてしまい、客観的に見たならば、限りなくゼロに近い状態にすると。それと同じように、すべての真理勝者の、あるいはすべての成就者の意識の総和、これから見ると、煩悩の、例えば五人や十人、あるいは百人や千人の煩悩の総和などというものは、大した問題ではないと。

したがって、この三宝に対するしっかりとした帰依、これが生じていれば、必ず浄化されます。だから、もし、例えば、ここに成就者がいたとして、エンパワーメントを行ない浄化がされないとするならば、それはその人の三宝に対する帰依が全くないか、あるいは弱いからに他なりません。したがって、わたしたちは、その三宝に対する帰依を充実させる訓練をすることによって、この減少煩悩破壊のプロセスを歩くことができるのです。

◆大切な深い意識の浄化

では、次の中煩悩破壊、この状態とは何でしょうかと。つまり、死後しばらく経って煩悩破壊する、このプロセスとは何かと。これは、まだ表層の意識にけがれが生じていると。



しかし、潜在の意識にけがれが生じていない状態。これは、はっきり言っておかなければならないことだけれども、成就というのは表層意識のクリアな状態、これも指しますが、これよりも潜在意識のクリアな状態、これをより高い成就と見ます。それはなぜかというと、より深い意識の方が、わたしたちの輪廻転生に大きな影響があるからです。

そして表層は、いろんな人と接するわけですから、必ずけがれを有すると考えるべきだからです。

この潜在意識は、わたしたちの例えば変化身の意識状態、あるいはわたしたちの夢の意識状態と言い換えることができます。もちろん正確な言い方をするならば、夢の意識状態より、変化身の意識状態の方が深いといえます。そして、これらの中で、完全なる煩悩破壊のデータが根づいている場合、この人は死んだ後しばらく経って、最終の煩悩破壊、マハー・ニルヴァーナへと向かいます。そして、そこで完全なる煩悩破壊を行なうのです。このときは、意識は一元化されていますから、つまり表層意識は存在していませんから、徹底した集中、完全なる集中といった状態を形成します。

◆大完全煩悩破壊と現世煩悩破壊

では、次に、大完全煩悩破壊についてはどうでしょうか。これは、潜在意識が完全にクリアな状態の人が表層意識についてクリアな意識状態を形成しようと努めると。そして、死という肉体のとらわれ、それを完全に落とした段階で、感覚、イメージ、そして意識、

意志、経験の構成といった、ね、これを一つずつ分解していくと。もちろん、潜在的なものはクリアになっているから、正確な言い方をするならば、感覚と、それからイメージ、これを完全に止滅することによって、止めてしまうことによって、煩悩破壊すると。これが、大完全煩悩破壊です。

では、現世において煩悩破壊するとは何かと。現世において煩悩破壊するというのは、結局この肉体の構成要素である五大エレメントの崩壊、および感覚、イメージの崩壊を、この生きている状態で行なうこと、コントロールを完全にできるような状態を作ること、これが現世煩悩破壊ということになります。

これらの段階的煩悩破壊は、もうお気づきになったと思うが、つまり潜在意識の前生や、あるいは前々生、あるいは長い生を経て、初めて完成されるものです。もちろん、ここにいらっしゃっていて、例えば在家で成就をする、あるいは成就直前である、あるいはいろんな神秘的な体験をする、これらの人は前生において相当の修行をしてきているのでしょう。そして、今生において、それらの経験をより崇高な形で現象化し、高い世界へ生まれ変わる、あるいはニルヴァーナへ入るといったプロセスをたどると。そのような方向で、

教団が皆さんをしっかりと導き入れることができるなら、それはわたしと、それから高弟たちが一生懸命カルマの交換を行なう意味合いがあると思います。

◆救済の使命を負って

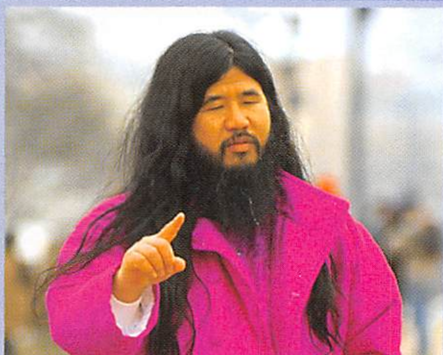
どこの国に行っても感じること、それは人は死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ、死は避けられない。しかし、死に対する知識もなければ、あるいは死に対する興味も皆持ち合わせていない。この現世を生きることに全力であると。そして、この現世を生きることに全力である、その経験の構成は、地獄へと導き、動物へと導き、低級霊域へと導く修習をし続けていると。

しかし、キリスト入滅後、約二千年経ち、オウム真理教が登場し、このオウム真理教は世界に対して神聖世界への道、煩悩破壊への道を説き明かし、広めなければならない使命を負いました。この使命が貫徹できるかどうか、それはここに集まっていらっしゃる方々一人一人が、自分は救済者なんだと、自分は十三段階の救済計画を貫徹させるために生まれてきた魂であると認識できるか否かではないかと考えます。しっかり頑張りましょう。

第2部

ロシア編 PART 2

御国の福音は世界に



四月二十一日
麻原尊師は、ロシアでの救済活動を
さらに具体的に進めるべく
再びロシアに向かって旅立った
わずか十数人の弟子を伴っての訪問は
前回の大使節団とは
だいぶ様相を異にしていた







ラジオ・テレビ放送公社で行なわれた調印風景。この瞬間、オウム真理教の全世界向けラジオ放送開始が決定した。

◆全世界放送決定！

麻原尊師の今回のロシア訪問の成果としてまず真っ先に挙げなければならないのは、情報大臣との会談、放送公社の幹部などとの会見が持たれ、ラジオ放送、テレビ放送などが次々と正式契約の運びとなったことである。日本国内向けの日本語ラジオ放送「エウアゲリオン・テス・バシレイアス」（AM七二〇kHz、短波放送は一七・七一〇MHz）が四月一日からスタートしたのは周知のとおり。

その日本向けのラジオ放送に



ルジュコフ首相をはじめとする政府要人たちは、オウム真理教の活動を理解した上で、宗教法人の認証、ロシア支部開設に積極的に協力する旨を約束してくださった。



モスクワ政府ルジュコフ首相。



加え、今回の訪問ではまさに「ロシアを通して世界の希望が……」の予言の成就ともいうべき全世界向けのラジオ放送の六月開始が正式決定した。

その概要は、短波・中波の同時放送で、英語による放送を毎日一時間行なうというものである。

◆首相もオウム真理教を歓迎！

一方、ロシア国内での活動も大きな進展を見せた。二十三日に行なわれた尊師とモスクワ政府首相のルジュコフ氏との会談で、氏は、宗教法人としての認

可、道場建設などを含めてオウム真理教のロシアでの活動に対して全面的に支援することを約束。諸手を挙げて歓迎の意を表わしてくださった。

一方、旧ソビエト連邦向けの人気ラジオ放送とのタイアップが成約。若者に大人気の『マヤク』がそれだが、ロシアの人ならだれもが知っている八〇％の高聴取率を誇る同放送の情報音楽番組の中で、オウム真理教関連の放送枠が設けられることになったのである。

また、ロシア国内で、同じく九月からのテレビ放送も正式に決定。曜日、時間帯こそ定まっ



病院長自ら案内役をかって出て尊師一行に熱心に説明してくださった。





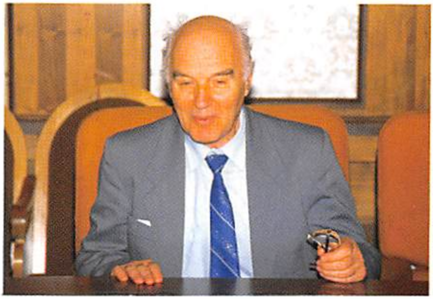


ていないが、高視聴率を誇る「国内第一チャンネル」の青少年向けの番組の中で、毎週一回、六分枠でオウム真理教の番組が放映されることになった。

◆無料診療病院設立が実現へ

日本では厚生省に当たるロシア政府の保険省の大臣との会談で、ロシアの医療政策についての意見交換を交わした翌二十五日、尊師一行はモスクワの中心地、赤の広場から徒歩で十分足らずの場所にある病院を訪れた。

　四階建ての建物に百十床のベッド、医師七十人、看護婦百三十



日本では厚生省に当たるロシア政府保険省のヴォロビエフ大臣。

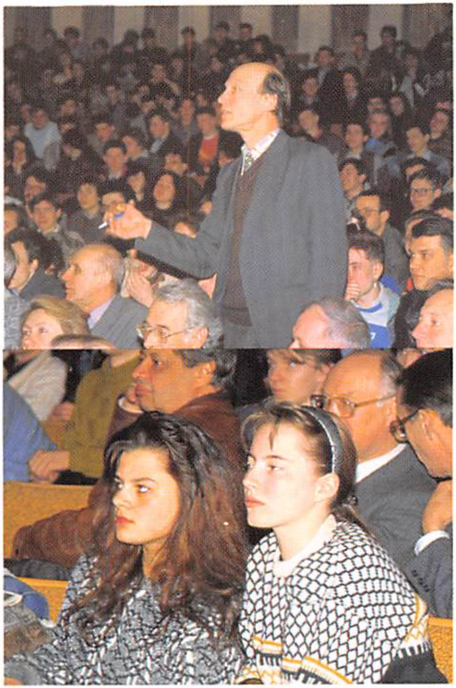






早くも、双方の医療スタッフの交流風景も見られた。





講演会には多くの人々が集まり、どの顔も真剣な表情で尊師の説法に聴き入っていた（モスクワラジオ電子自動制御大学にて）。

人などスタッフ二百数十人を有する同病院は、どんな診療でも行なう総合病院として、かつてはその付近一帯の地域医療を担っていた。ところが、自由化に伴って最近では自由競争下での自己経営を余儀なくされていたわけである。

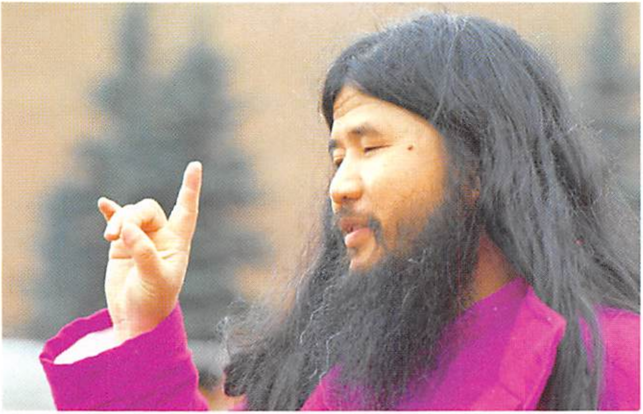
麻原尊師は当初、ゼロからの病院建設を考えられていたようだが、経営に苦しむロシア国内の病院事情も鑑み、オウム真理教が従来の病院をそのまま運営する形で「無料診療病院」の実現を計画。従来のスタッフに加え、オウム真理教附属医院からスタッフを派遣し、オウム真理





前回の訪問の際に講演を行なったモスクワ大学のサドウニチ学長と再び会談。尊師のために開いてくださった晩餐会では、解脱を科学的に証明する共同実験の話も持ち上がり、大いに盛り上がった。

教独自の医療をロシアでも踏襲させていく考えでいる。これには同病院の医院長も大歓迎の様子で、双方の医療スタッフも交えて友好的な交流が行なわれた。



尊師は、オウム真理教がこの病院の運営を任されることになったら、数年以内にロシア一の技術と設備を誇る病院にする旨を約束。この話が順調に進めば、先の訪問の際の尊師の口約実現もそう遠くないだろう。

◆質問殺到！好評の大学講演

多くの優秀な外交官を輩出したモスクワ国際関係大学、エレクトロニクス関連ではロシア一のモスクワ・ラジオ電子自動制御大学で行なわれた尊師講演会には、熱心な若者たちが殺到。特に、モスクワ・ラジオ電子自動制御大学では大講堂を埋め尽くす盛況ぶりだった。

尊師の講話はロシアの若者たちの心を確実に捉え、講演後は前回の訪問の際にも増して多くの質問用紙が寄せられた。

ラジオ放送やテレビ放送の決定、そして、支部開設や無料診療病院建設の具体化など、オウム真理教によってロシアに灯された小さな灯火は、これからも一歩一歩確実に大きくなっていくことは間違いない。

歴史の大きな転換期に立った今、このロシアから希望の光はさらに大きく広がっていくことだろう。

宗教の目的とは
——自己を改造せよ

4月24日

尊師講演会

於：モスクワ国際関係大学

大使節団を伴っての一度目の訪問からひと月余り。同年四月下旬、麻原尊師は再び激動の地、ロシアを訪れる機会を得た。このときモスクワ市内の二つの大学で講演を行なったが、その一つがモスクワ国際関係大学である。

このモスクワ国際関係大学は過去に外交官など多くの優秀な人材を輩出してきたが、意外にも海外にはその名は知られていない。というのも、ゴルバチョフ元ソビエト連邦大統領の行なった代表的な政策の一つ「ペレストロイカ」以前はその存在さえも国外にはシークレットにされていたからである。

もっとも、尊師一行が同大学を訪れた際にはそんな特殊事情からイメージされた秘密めいた雰囲気など微塵も感じられず、むしろ国際感覚あふれる学生たちは、彼らにとって未知なる〝真理の伝導者〟を熱烈な歓迎で迎えてくれた。

モスクワ国際関係大学の陽気な学生たちを前に四月二十四日、麻原尊師は、宗教と文化、宗教と経済の発展などについて語った。



説法風景。



スチェパノフ学長。講演後は学長室に招かれて
親交を暖めた。



モスクワ国際関係大学での



歴史を感じさせるモスクワ国際関係大学の校舎。

◆心の働きとエネルギーの関係

わたしは、モスクワ大学では古典的な仏教の考え方を説明しました。そして、モスクワ工科物理大学では現代科学と仏教との関係について話をしました。そして、今日は皆さんに、宗教と智性、そして文化、あるいは経済の発展についてお話をしたいと思います。

もともと宗教には、三つの目的があると考えられています。その第一は、目に見えない、わたしたちより霊性の高い魂に対する献身、つまり、神に対する献身です。

第二番目は、わたしたちが日々行なっている心の働きや言葉、あるいは行動におけるわたしたちの後悔を取り除いてくれることが目的です。

そして、今回この話と大きな関係があるわけですが、わたしたちの智性を向上させ、そして文化や、あるいは経済、あるいはいろいろな学問等を発展させるための人間を改造する教えです。そして、これは仏教的な言葉を使うならば、パンニャー、智慧という言葉を使い、ヨーガ的にはシッディ、成就という言葉を使います。これは、キリスト教の原点であるユダヤ教の中にも、この人間を改造し、神に近づけるという考え方があります。

わたしたちの心の働きと、そしてエネルギーとの関係は、いろいろな形で今まで精神主

義的科学者が証明をしてきました。例えば、よくこれは東洋の宗教的証明として使われることですが、八〇度や一〇〇度のお湯に手を入れると。そして、全くやけどのしない状態を見せ、それを証明すると。これは、人間の、わたしたちにとって目に見えない――まあ、ヨーガ的な言葉を使うならば風、バーユという言葉があるわけですが――このバーユのエネルギーを手に集中させたがために起きる結果です。

あるいは逆に、動的なものではなく、わたしたちの心の働きを止めることによって、呼吸を停止させるという修行法があります。これは、意図的に呼吸をしないことを我慢するのではなく、自然に止まるのです。

今回わたしと同行した弟子たちの中で、一日の睡眠の時間が二時間を切っている者も数人います。彼らは、精神的ストレスを昇華させる、つまり、精神的ストレスをエネルギーに変えることにより、極端な短い睡眠で生活できる状態を形成しています。

今挙げた話は、最も粗雑な低次元に属するエネルギーの昇華の話です。

◆七つのセンターの働き

一般的に、ヨーガ的にはわたしたちの重要なエネルギーのセンターは七つあるといわれています。しかしわたしの経験では、七万二千カ所にエネルギーが存在しているとわたしは実感しています。この七万二千について、一つ一つ説明することは可能ですが、ここでそれを始めますと膨大な時間がかかりますので、一般的にいわれている七つのセンターについて、まず話をしたいと思います。

まず、わたしたちの尾てい骨に根底をなすエネルギーのセンターがあります。このセンターが活性されますと、わたしたちの肉体的な疲労、あるいは、外的な原因による病がなくなります。例えば例を挙げるならば、風邪をひいたとしてもそれが数十分で消えてしまいます。

第二番目のセンターである、性器に存在するセンターが開発されますと、わたしたちは大変情緒的な詩、あるいは作曲といったようなものができるようになります。この段階で、わたしたちの情緒は大変発達します。

そして、第三番目のセンターである、おへその太陽神経叢（たいようしんけいそう）のセンターが開発されますと、

思索をする力、つまり、考えてものを判断する力が増大します。また、このセンターが開発されますと、大変食欲がなくなり、一日一回の食事でこの人生を生きることができるようになります。

そして、第四番目のセンターである、この胸の中心にあるセンターが開発されますと、わたしたちは大いなる栄誉を受けることができるようになります。

そして、第五番目である、この喉（のど）のセンターが開発されますと、わたしたちは大変有名になり、高い地位や権力を受け、宇宙の実相、つまり宇宙の実体について認識を深めることができるようになります。そして、オーソドックスなこの宇宙の法則の原因と結果について理解できるようになります。

そして、六番目のセンターである、この脳下垂体のセンターが開発されますと、わたしたちは、この世の願望をすべてかなえることができるようになります。

このような六番目の、例えばすべての願望をかなえるということをわたしが話しますと「それはなぜだろうか、非科学的である」とお考えになるかもしれません。もともと、ヨーガの考え方は、例えばここに存在する脳下垂体の働きをお考えになったらわかるとおり、

この脳下垂体の働きは、体全体のコントロールを機能している場所です。そして、自己の肉体に対するコントロールのオーダー、これを他に施すことにより、すべての現象を動かすことができるものであるとわたしは考えています。

そして、七番目の、これはセンターである最後のセンターが開発されますと、わたしたちは、この肉体から出入りができるようになります。これは仏教もそうですし、ヨーガもそうですし、あるいはタオイズム——まあ、中国に伝わる仙道と呼ばれるものがあるわけですが——それもそうですが、これはすべて、この七番目のセンターを開発し、そしてこの肉体から完全に離脱することを目的としています。

それはなぜでしょうか。それは、わたしたちが「この肉体はわたしである」と考えている間は、多くの制約をこの肉体によって受けなければなりません。つまり、わたしたちのこの肉体は、わたしたちに多くの喜びを与えます。しかし、それと同時に、わたしたちは多くの苦しみを受けなければならないのです。したがって、わたしたちがこの七番目のセンターを開発し、そのセンターを自由に使いこなすことができるようになることによって、わたしたちは、その喜びと苦しみから解放されるのです。

そして、この別の身体は、別名〝喜びの身体〟といわれています。この別の身体は、心の働きと密接に関係のある身体です。つまり、わたしたちが喜びを追求し、喜びを求める限り、別の身体は喜びのみを経験させてくれるのです。

◆神通の世界への入り口

今わたしが話した内容は、中級に属する内容です。つまり、この現実の世界に関する内容です。この段階からもう一歩進めた、より高い段階があります。それは、一般的に〝六神通〟と呼ばれている段階です。

まず第一番目は、先程述べた七番目の段階、これが第一番目に来ます。

第二番目は、神々と話すことのできる段階です。この神々と話すとはどういうことかというと、これは、より高い霊的存在、より高い魂の存在との対話のできる段階であるとお考えください。このときわたしたちは、鼓膜を使うのではなく、喉の振動を使います。

次の段階は、他人の心を理解する段階です。これは、三段階に分けることができます。第一番目の段階は、相手の心と感応する段階です。第二の段階は、相手の心の深い部分を

実際に自分の心で感じ、それを言葉として理解する段階です。第三番目の段階は、相手の欲望を視覚的に見、そして、それによって正しく相手の心を判断する段階です。

◆光を超えた意識の世界

この段階から、わたしたちの意識のスピードは光を超えるようになります。まず、わたしたちは今生きている生の過去にさかのぼるようになります。ここでわたしたちは、過去、つまり生まれてから今までの間のいろいろな心の問題について、記憶を再現します。そして、わたしたちは今まで忘れていたいろいろなことを思い出します。

この一つ一つの問題を解決した段階で、わたしたちは父母の交接をヴィジュアル的に見るようになります。そして、ここからわたしたちは、過去世の記憶を一つ一つ経験します。この経験は、その人の心のクリアさによって、その経験できる数は違います。訓練が進んでくると、無数の生を経験するようになります。当然、その段階においてこの宇宙の創造・維持・破壊についても経験します。

そして、この段階が終了した次の段階で、わたしたちは、わたしたちが日々瞬間瞬間に

行なっている、言葉、あるいは心の働き、あるいは行動というものが、次の人生をどのように形成するかを理解するようになります。その三つの情報は、確実に最も深い意識状態に蓄積されます。これについて皆さんは、〝記憶〟という概念によってご理解していただいたらよろしいと思います。

ここで一つ重要になるのは、記憶についてです。わたしたちは、あるものは記憶し、あるものは記憶していないかのように理解しています。しかし、それは実際に正しくありません。わたしたちの心がクリアになれば、わたしたちは、見たもの、聞いたもの、感じたもの、あるいはにおったもの、味わったもの等、すべてを完全な形で記憶しているのです。それなるがゆえに、わたしたちは、ふいに今まで思い出せなかったことを思い出すことができるのです。

そして、これらはすべて蓄積されているからです。そして、この蓄積は、わたしたちの次の生を決定します。そして、それを実際問題として、まずは光として経験します。次は、その光の粒の一粒一粒のヴィジョンとして経験します。

この段階まで来ると、もう最後の段階に入ります。最後、わたしたちは、対象となる魂

がどのような煩悩を有しているか、そして、その欲望はどのような条件によって成立するか、成立した欲望はどのような結果を招くか、招いた結果はどのような次の原因となるか、これらの連続について、わたしたちは完全に理解し、知るようになります。そして、すべてのわたしたちの悪い言葉や、心の働きや、行為が、わたしたちを完全な形で不幸に導くのだということを理解するようになります。したがって、そのようなものから完全に離れます。離れることによって心は静まります。心が静まることによって、よりいっそう高い智慧を有することができるようになるのです。

◆そして、大乗へ

そして、これらのことを獲得すると、例えばそれは芸術の面、あるいは科学の面、あるいは文学の面、あるいは宗教の面といった、いろいろな分野での大いなる発展を可能とします。

もちろんこの段階に来ると、それらのものはすべて無意味に感じられる場合があります。しかし、それらを活用することにより、より多くの人に真実を語り継ごうとする教えが存

在するのです。これが、次の段階のマハーヤーナ、大乗と呼ばれている教えです。この段階に到達した魂は、次の段階へと移行します。これらの神々の力を活用しながら、多くの人たちにその教えを広めるために、その手段として、例えば音楽、例えば美術、例えば科学、例えば宗教といったようなものを活用します。

なぜ、わたしは〝例えば宗教〟という言葉を使ったのでしょうか。宗教とは、もともと、わたしたちの生き方を観念的にとらえたものにすぎません。したがって、最終の段階に入ると、この宗教すら観念の一つにすぎないわけですから、超えなければならないのです。

例えば例を挙げましょう。ここに一人の子供がいたとします。宗教的制約、つまり戒律によって、例えば「暴力を振るってはいけない」という教えがあったとしましょう。しかし、もしその子供が大変危険なことをなし、それを止めるために力を使わなかった場合、その子供が大変危険な目に遭い——まあ、例えば死に瀕するとか——そのようなことがあった場合、どうしたらよろしいでしょうか。

ある段階までの修行者は、当然、そのような状態であっても力を使うことは許されません。しかし、ある段階を過ぎ、つまり、そのような力を行使したとしても心の働きに影響

が出なくなった段階では、その力を使うことは許されるのです。

このような形を極端に発展させたもの、それが俗にいわれる〝密教〟といわれるものであり、あるいは〝金剛乗〟と呼ばれるものです。

そして、これらの、今わたしが話したものが、東洋の宗教体系のすべてであり、この中にキリスト教やユダヤ教も含まれます。

もともと、これらの教えはすべて、インド・ヨーロッパ語族に属するものであり、この発祥の地は、中東、そして中東の前はエジプトであるといわれています。ただ、そこで信奉する神が違うだけです。教えの内容は大変類似しています。

◆インスピレーションと心の豊かさの発達

次に、これらの宗教が、科学文明や、あるいは経済に対してどのように貢献するのかの話に移りましょう。

例えば、大変素晴らしい先生が、ここに一人いたとしましょう。そして、二人の生徒を想定します。一人の生徒は、大変賢いが自分より優れた人の教えは聞かないと。もう一人

の生徒は、ある程度真面目であると。そして、真面目であるだけではなく、自分より優れた人の教えをよく聞き、それについて考え、そして記憶しようとすると。

初めは、当然この前者、つまり賢い生徒の方がより大きな結果を出すことができるでしょう。しかし、ここに立派な、偉大な先生が存在していたとして、その先生の教えを吸収し、それを自分のものにするのはどちらでしょうか。それは当然、後者の生徒、それほど賢くはないが真面目で、そして自分より優れた人の教えを吸収し、それについて考え、理解し、そして自分のものにする生徒のはずです。そして、その先生が偉大であればあるほど、この二人の差というものは徐々に縮まり、逆転し、徐々に差が広がるはずです。

皆さんはレーザーホログラフィーはご存じですか。これは、ある光のデータがあり、その光のデータからデータを取り出すという機械です。しかし、その部分に対して光を当て、そのデータを取り出さなければ、決してそこからデータを取り出すことはできません。

そして、神というものは、わたしたちより、より優れた智性の持ち主であり、智慧(ちえ)の持ち主なのです。わたしたちが、神に意識を向け、そして神から何かを学ぼう、あるいは神の教えを受けようとしたときから、わたしたちは偉大な先生を一人得たことになるのです。

それらは、インスピレーションを発達させます。そして、心の豊かさを発達させます。

◆智性は繁栄の源

これらの要素によって、わたしたちは新しい、より高いデータを得ることができ、そして、それによって、まず科学を発達させることができます。もちろん、下から積み上げていく発達のさせ方もあります。下から土台を固め、発展させる方法は安定しています。その組み立てられている範囲において完全だといえます。しかしそこには、飛躍的な発想はありません。しかし、わたしたちが真に自己を改革しようとする意欲を持ち、そして、真の宗教を実践するならば、それが、飛躍的な特殊なデータを取り出すことができるようになるのです。

では、次は、この科学的な発達がどのような形で経済に結びつくのでしょうか。もともと経済というものは欲望の産物です。例えば、より多くのお金を得たい、より多くのものが欲しい。そしてこれらは、わたしたちの労働意欲をかき立てます。もちろん、その労働意欲を利用して経済資本家は搾取をします。しかし、搾取をされたとしても、わたしたち

が働いた分の何パーセントかは得ることができるのです。

そして、ここは大変重要なところですが、その得たお金を何に使うかという問題が出てきます。まず、わたしたちは、それを衣食住を満足させるために使います。そして、次にわたしたちは、それをよりいっそう欲望を満足させるもの、例えば、電気製品、あるいは娯楽といったようなものに使います。そこには、当然お金が必要です。そして、そこで当然大量のお金が必要となり、大量のお金が出回るようになります。

ここで、一つのことを考えなければなりません。もしわたしたちが、日々、原則的に必要なことはこうであるという観念的な考え方にとらわれていたらどうでしょうか。わたしたちは、他人の煩悩というものを理解しないで、他人が欲しがるような製品を作ることができるでしょうか。つまり、相手の心を知るといった、先程の神秘的な力は、ここで大きな活用を生みます。当然、相手の欲望を満足させるもの、あるいは、相手の必要なものを作るとするならば、それは、高価な値段で売ることができるでしょう。これが、日本の経済の発展を生んだのです。

例えば、例を挙げましょう。同じ機能のコンピュータがあるとします。この機能は全く

同じです。しかし、東南アジアでできるコンピュータと日本のコンピュータとでは、値段が五倍違います。どこが違うのでしょうか。これは、例えば、コンピュータの画像があるわけですが、その画像が見やすくなっているとか、あるいは、キーボードの手触りがいいとか、たったのそれだけの差で、値段が四倍、五倍と跳ね上がるわけです。

例えば、車について考えてみましょう。車のデザイン、外側のデザインによって、機能が全く変わらなくても、同じように、やはり車の値段は一・五倍、あるいは二倍します。したがって、例えば資本主義の国では、デザイナーが大変重要な役割を演じるのです。そしてこれが、資本主義経済を発展させた理由です。

もちろん、皆さんにとってこれらの話はナンセンスに聞こえるかもしれません。しかし、これから資本主義国と対等の立場に立ち、そして経済的に打ち勝っていくためには、これらの要素を理解し、そして、それを当然吸収し、自分のものにする必要があるのです。

資本主義の国、特に経済的に発展した国では物があふれています。しかし、そういう国にお金が集中しています。そして、外貨を獲得するためには、その外国の要素をまず知る必要があるのです。そして、彼らの必要としている要素を知り、それを活用するセンスが

必要なのです。そして、それらのデリケートさを生むもの、これが宗教だとわたしは思います。

皆さんの成功と、そして、ロシアの発展をお祈りいたします。

宗教を科学する
――五大エレメントと分子運動

4月26日

尊師講演会

於：モスクワラジオ電子自動制御大学



エフチヒエフ学長との会談も行なわれた。





大講堂に集まった学生たちを
前に講演を行なう麻原尊師。

教鞭(きょうべん)を執る教授の多くが科学アカデミーに属していることからもその優秀さがうかがえるモスクワラジオ電子自動制御大学。二度目のロシア訪問の際には、理科系の優秀な学生を多く集めている同大学でも尊師講演会が行なわれた。

　このモスクワラジオ電子自動制御大学では特別に用意された大講堂での講演にもかかわらず、会場は学生や教授たちで埋め尽くされ、中にはメモを取りながら耳を傾けている熱心な学生の姿も見られた。





大観衆を前に麻原尊師は、古典的なヨーガと科学の思考の結びつきについてわかりやすい例を交えながら講演。学生たちも当意即妙で見事な説法に大喜びで、説法終了後にはより深い教えを求めようとする人々から、おそらく一日かけても答えきれないだろうほどの多くの質問が殺到した。

麻原尊師はこれらの質問にできる限り丁寧に答えられたが、最後は時間もなくやむなく中断。同大学での講演も大成功のままに幕を閉じた。

◆宗教は一つの流れ

皆さんこんにちは。オウム真理教の麻原彰晃です。

まず、この「オウム真理教」という意味から、今日は話をさせていただきたいと思います。この「オウム」とは、サンスクリット語で、ア・ウ・ムの三文字に分解することができます。そして、これは宇宙の創造・維持・破壊を表わしています。この宇宙の創造・維持・破壊の意味合いというのは、すべては無常である、つまり、すべては変化するものであるということを表わしています。

そして、次にこの「真理」という意味ですが、これは今から二千五百年以上前にお生まれになったお釈迦様（しゃかさま）、あるいは、今から約二千年前にお生まれになったイエス・キリスト、彼らが、法則、つまり絶対的にわたしたちが実践しなければならないものはこうであるという教えを説いたわけですが、その教えの根本となるもの、これを「真理」と呼びます。そして、この真理と密接に関係のあるものが科学です。

わたしはこのモスクワで、今日が四回目の講演に当たります。第一回目の講演は、モスクワ大学にて古典的な仏教の教えをお話ししました。第二回目は、モスクワ工科物理大学

において物理学の光と、そして仏教との関係について話をしました。これは、現代の物理学的教えと、それから仏教との関係が大変深いものであることを表わしています。そして、昨日、モスクワ国際関係大学において、わたしは、修行、つまり精神的訓練がどのような影響を肉体および心に与えるかの話をしました。つまり、肉体的、および精神的訓練によって、わたしたちの心の状態はまず天子になり、そして神になり、神を超えるんだという話をしました。そして、これらの訓練が経済に与える影響、および、社会に与える影響について話をしました。

そして、今回わたしは、皆さんに、古典的なヨーガの考え方、これがどのような形で現代の科学的考え方と密接に結びついているかの話をしたいと考えています。

まず、わたしたちを構成しているもの、これを、ヨーガや仏教においては、地元素、水元素、火元素、風元素、そして空元素という五つの段階に分類します。そして、この五大エレメントの考え方は、イエス・キリストにも受け継がれています。例えば「精霊」という言葉があるわけですが、この「精霊」は、ギリシャ語を調べると、風(ふう)、風(かぜ)という言葉と同じです。この精霊、これは何を意味するかというと、わたしたちの今の意識ではなく、

より高い意識状態を持った別の身体を意味している。そしてそれは、風の働き、内側の身体の風の働きによって、移動するのです。

わたしの採り得る見解は、仏教にしろ、あるいはキリスト教にしろ、一つの流れにすぎないという考え方です。

◆五大エレメントとは？

キリスト教と仏教との関係はまずはこれくらいにしておいて、それではこの五大エレメントの考え方に入っていきましょう。

まず、五大エレメントの最も固定的なもの、これが地元素と呼ばれている固体成分です。最もわかりやすい氷を例に採ればよくわかると思いますが、例えば、通常の温度では液体であるものも、それを冷却することによって固体化します。逆に、いかなる固体の物質も、液体化するか、あるいは気体化するかのどちらかになります。そして、分子運動の考え方からいくならば、この液体と気体の運動とは全く差がないと。つまり、液体の範疇にこの気体の運動が入るんだということを考えるならば、固体から液体へ移行するプロセスは、

まさに物理的変化ということができるでしょう。

そしてこの液体に、より多くのエネルギーを加えることによって、この液体はプラズマ化します。この液体の状態を水元素と呼び、そしてプラズマ化した状態、つまり原子の状態になった状態を火元素と呼びます。この原子に、より強力なエネルギーを加えたらどうなるでしょうか。当然、核融合が起きるはずです。この状態を風元素と呼びます。そして、この風元素により多くのエネルギーを加えた状態、この状態を空元素と呼んでいるのです。

仏教やヨーガの考え方では、わたしたちの身体に七万二千本の管が存在しているといわれています。そしてこの管は、完全なる圧力容器であるということができます。圧力容器であるとするならば、しかもその圧力容器がものすごい高圧に耐えられるとするならば、低温でもこの五つの変化は生じるはずです。そして、体験的にこの変化を、わたしたちはいかなる人も死ぬ前に経験することになります。

その場合の経験は、この地元素から空元素へ至る経験ではなく、わたしたちがその五つの元素に支配されているんだということを経験するのです。つまり、地元素の崩壊、水元素の崩壊、火元素の崩壊、風元素の崩壊、空元素の崩壊のプロセスを経験します。

◆修行者が達成すべきもの

そして、皆さんが瞑想修行、ヨーガの訓練や、あるいは仏教的訓練をなすならば、地元素から水元素への移行、水元素から火元素への移行、火元素から風元素への移行、風元素から空元素への移行という、より次元の高いエネルギー状態を経験することができます。これらの経験は、修行者にとって必ず達成しなければならない経験です。

それはなぜでしょうか。それは、わたしたちが「これがわたしである」といっているものは、この世に何も存在しないという考え方が、これは仏教にしろキリスト教にしろ存在しているからです。その経験をしなければならない理由、それは、この世の中に「これがわたしである」、あるいは「これはわたしの本質である」という物質的要素が存在していないことを経験しなければならないからです。

『聖書』を見ると、面白い表現が一つあります。ある豊かなお金持ちの息子がキリストに尋ねました。

「わたしは、殺すなかれ、盗むなかれ、姦淫するなかれ、偽証するなかれという実践をしています。この上に何を実践したらよろしいのでしょうか。」

と。

キリストは説きました。

「隣人に対する優しさ、つまり、愛を実践しなさい。」

と。

「わたしは、隣人に対する優しさ、愛を実践しています。」

と彼は言いました。それに対してキリストは、

「次にあなたが実践しなければならないものは、家にあるすべてのものを周りの人に分け与え、そして、家を出てわたしの弟子になりなさい。」

という話をしました。

これはなぜでしょうか。それは、結果的にはいろいろなものを所有することにより、心はそれに縛られ、そして不自由な思いを経験しなければならないからです。

◆慈愛の心——全人類のために

ところでここに集まっていらっしゃる皆さんは、大変素晴らしい技術者になる勉強をし

ていらっしゃいます。そして、その学ばれた技術が個人のために還元されるのではなく、国家のため、いや、地球人類のためにもし還元されるような心を皆さんがこれから訓練していくとするならば、それは素晴らしい地球的発展を約束することとなるでしょう。そのためには、個人個人、一人一人の心を成長させ、発展させる必要があります。そして、一人一人が慈愛を持ち、すべてのために、今自分自身が学んでいるものを生かすんだという心を成長させる必要があります。そして、そのような心を皆さんが有するならば、科学技術の発展というものは、人類にとって大きな利益を生み出すこととなるでしょう。

もし皆さんが、この肉体を超越したところに心というものがあり、その心は、わたしたちの日々の生き方によって変化し、そして、その変化した心によって、次の人生、次の生があるんだということを理解することができるならば、皆さんは、間違いなくその方向へと生き方を変えていくことができるはずです。

キリストは、最もわたしたちにとって大切なもの、それは、キリストでもなく、神でもない、精霊であると言っています。そして、この精霊こそは、先程もわたしが述べた、地元素を発展させ昇華し水元素に変え、水元素を発展させ昇華し火元素に変え、そして火元

素を昇華し発展させた段階において初めて経験できる、わたしたちの別の身体であり、別の意識であり、別の心なんです。

この段階に入るとわたしたちは、実感的にまず肉体のエネルギーを感じることができるようになり、その上昇を経験します。そして、このエネルギーの上昇と同時に、意識の変化を経験します。そして、この段階で呼吸は鎮まり、この精霊のステージの最終の段階では、頭頂から別の身体が抜け出し、この人間の世界だけではない、いろいろな世界を経験することができます。

そして、この幻影の身体、意識の身体の最終段階で経験できることは、この宇宙の法則の本質です。つまり、いっさいの現象に対する原因は何である、条件は何である、結果は何である、そしてまた、その結果が次のどのような形での原因となるかです。これを理解した段階でわたしたちは、言葉において、あるいは心の働きにおいて、行為において何をなすことが最も利益になるかを理解します。

皆さんがこの学校で学ばれている、現象をありのままに淡々と見つめ、そして、それを新しい技術に生かすという考え方、これと同じアプローチを、皆さんの日々の生き方に加

えられ、そして、その生き方によって人生を歩まれたらいかがでしょうか。そのときこそ、皆さんが今学んでいらっしゃる科学技術の力が人類のため、そして地球のために還元されることとなると思います。

◆

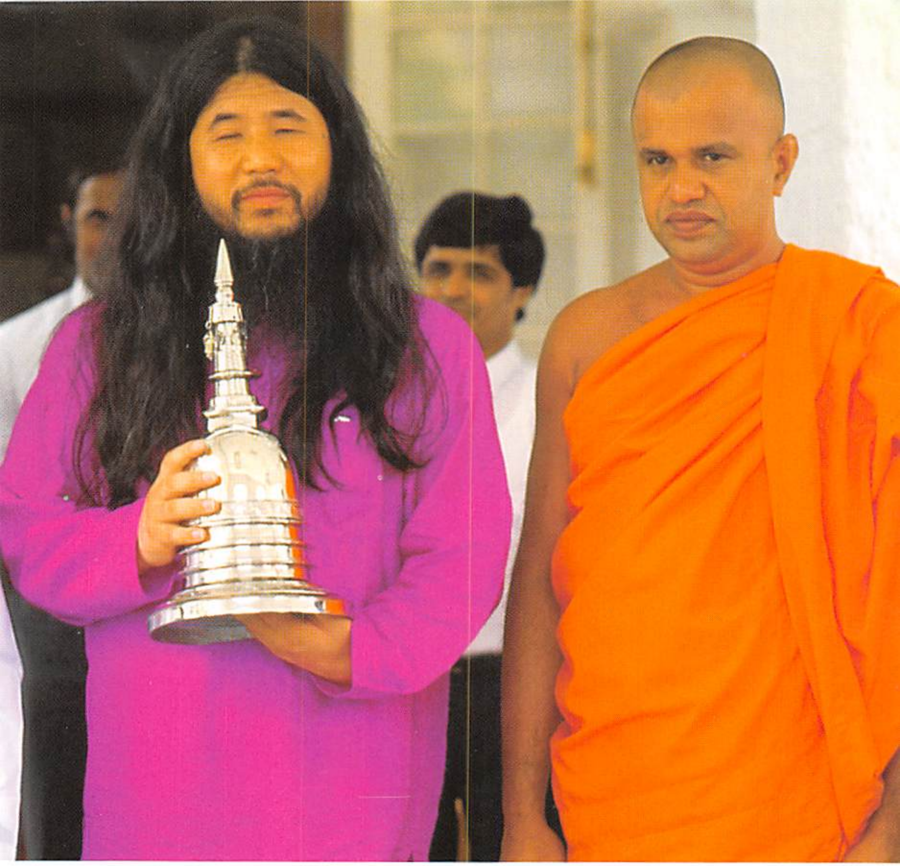
第3部

スリランカ編

スリランカに光は満ちて



「輝く島」の名のとおり
いつの日にか
世界に向けてまばゆい光を放つために
麻原尊師はこの国に救済の砦を築かれた
今、スリランカは新たな光を得て
その輝きを増し始めたのだ



◆真理を絆として

インド洋に滴のような形で浮かぶ美しい島スリランカ――。世界でも上座部仏教（テーラヴァーダ）の拠点として有名な仏教国である。麻原尊師およびオウム真理教が招待を受けて、そのスリランカを初めて訪れたのは昨年（九一年）九月のことだった。

　その折には、各地で大変な歓迎を受けただけでなく、仏教教団にとって最高の宝ともいえる仏舎利（サキャ神賢＝釈迦牟尼の遺骨）を総理大臣から贈呈さ



総理大臣D・B・ビジェトンガ氏より仏舎利を贈呈されて。右はグナロカ会長。

れ、サキャ神賢の教えを忠実に受け継ぐ国に、オウム真理教が正当な教団であることが認められたのである。

オウム真理教をスリランカに紹介してくださったグナロカ会長（南スリランカ福祉協会会長、ナーガビハーラ寺院副住職）も、

「尊師が世界を救うことのできる唯一の人であり、オウム真理教が世界を救うことのできる唯一の宗教です。」

と、尊師とオウム真理教を高く評価しておられる。このグナロカ会長は、オウム・バッシングの最中に尊師関係の情報が多量に耳に入ったため、ご自分でオウム真理教の教義を調べられ、その教えがテーラヴァーダと全く同じものだと気づかれたのだという。そして、かつてご自身の日本語の先生であったスワミ・プンナ（オウム真理教の出家者。ラージャ・ヨーガの成就者）を通して、オウム真理教との交流が始まったというわけだ。

チベットでもラオスでもそうであったが、やはり尊師のステージ、そしてオウム真理教の活動は高いレベルの僧には絶賛される（チベットとラオスでの仏教関係者との交流の模様は、『麻原彰晃の世界スペシャル――約





色とりどりの旗を振って出迎えてくれた少年たち。

東の大地』をご覧いただきたい)。

〝ウエルカム!〟で埋め尽くされた第一回目のスリランカ訪問から半年後の三月、再度の招待を受け、麻原尊師をはじめとするオウム真理教の一行は、テーラヴァーダの息づく国スリランカを訪れた。前回の訪問と大きく違っているのは、そのメンバーが、〝オウム・サッチャ・サンガ・アソシエーション〟の土台を築くための技術者が中心となっていることだった。



麻原尊師一行を歓迎するスリランカの人々。ゲートの文字に注目！



訪れる先々で、踊りや歌による歓迎を受けた。

◆築かれた真理の砦

スリランカ第一の都市コロンボから、海岸沿いに車で三時間ほど南下すると、かつてはアラビア商人たちの東方貿易の拠点として、その後のポルトガル、オランダ、イギリスの植民地時代には支配の拠点として栄えた港町ゴールに至る。そのゴールから内陸部にさらに十五分ほど入った静かな丘陵地帯に、十六万平方メートルに及ぶ〝オウム・サッチャ・サンガ・アソシエーション〟の用地はあった。

バスを降りてなだらかな坂道



会場に向けてのパレード。少女たちが民族音楽を奏でながら先導してくれた。





空から見たサッチャ・サンガの広大な用地。

を歩いていくと、一行を出迎えてくれているのだろうか、笑顔を浮かべてそこここにたたずんでいる人々が目に飛び込んできた。はにかんだような笑顔にこちらからも笑顔を返すと、どの顔も花が開いたようにパッと輝きを増した。その表情からは、〝オウム・サッチャ・サンガ・アソシエーション〟に対する喜びと期待が十分にうかがわれた。

〝オウム・サッチャ・サンガ・アソシエーション〟とは、スリランカの人々の精神面と経済面の両方の強化を計るための奉仕団体であり、仏教の教えによって人々を幸福に導くための、海外における具体的活動の第一歩ともいえる。

　その概要は、職のない人や経済的に貧しい人を対象に、テーラヴァーダの教えを学びながら



村の人たちがヤシの葉で飾ってくれたセレモニー会場。手づくりの温かさが伝わってくる。

自立できるようにするための援助を目的として、宿泊施設と食品工場の他、日本語と英語の研修の施設を建設するというものである。

さらに、この〝オウム・サッチャ・サンガ・アソシエーション〟計画と平行して、障害者や恵まれない人たちのための社会福祉センターや仏教の本を印刷する印刷工場の建設、全世界に正しい仏教を広めるためにパーリ語経典の翻訳と保存を推進する機関の設立なども予定されている。

これらの計画は、スリランカ国内の各方面から大きな期待と



尊師を乗せたヘリコプターの到着。

賛同を寄せられており、総理大臣をはじめとする多くの大臣が特例を設けて協力を申し出てくださっている他、実業家の方々からも惜しみない協力を得ることができた。

午後二時半。上空に爆音をとどろかせて、尊師を乗せたヘリコプターが姿を表わした。地上では、こんな静かな村のどこからこれほどの人が集まったのだろうと思わせる大勢の人々が、自分たちの村に、そして自分たちの国に、希望の光をもたらした人にお会いしたいと、幾重にも輪を作って尊師の到着を待っ



尊師を歓迎する歌を日本語で歌ってくれた少女たち。



ている。

　ヘリコプターが着陸した。と、せきを切ったように人垣が崩れ、地上に降り立った麻原尊師に駆け寄る人、人、人……。一瞬にして、その場は熱気に包まれていった。

　普段は穏やかなスリランカの人たちが、これほど感情をあらわにして尊師を歓迎している——。それは、彼らが、尊師の提唱されている〝オウム・サッチャ・サンガ・アソシエーション〟の計画こそ、自分たちを真に幸福に導くものであると確信し、一刻も早い実現を望んでいることを示していた。

　ではなぜ、スリランカにこのような場が必要なのだろうか？　それは、オープニング・セレモニーにおける尊師のスピーチの中で説明されている。

「……テーラヴァーダこそ、今の西洋文明を超える、最高の科



学のヒントを秘めていることも間違いありません。そのためには、テーラヴァーダについての徹底的研究、および科学的検討が必要となります。

そして、そのテーラヴァーダの他の宗教における優位性が真に証明されたとき、このスリランカは大発展のときをスタートするはずです。そして、現代的立場に立った見地から、このテーラヴァーダを一般の人たちに浸透させること、その目的がオウム真理教に課せられました。」

つまり、ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラヤーナ、ヴァジラヤーナのすべての教えを包含したテーラヴァーダが、限界を露呈しつつある西欧物質文明を超え、人々の精神的支柱となり得る唯一のものだからこそ、最も忠実にその教えを守ってきたスリランカに、世界にサキャ神賢の本当の教えを広めるための最初の砦(とりで)を築かなければならないということなのである。

今、麻原尊師とオウム真理教が果たさなければならない役割は大きい。


ナーガビハーラ寺院では、着飾った象までが一行を出迎えてくれた。

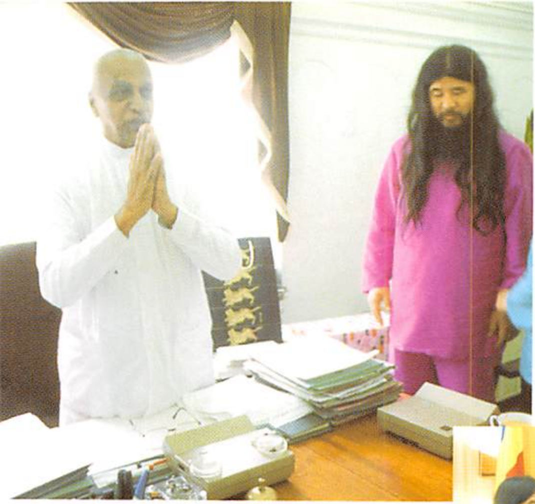
◆スリランカ仏教の陰り

前回のスリランカ訪問の際に、尊師は、

「この国に来て、びっくりしたことがある。それは大変神聖なヴァイブレーションをこの島全体が発していることである。」

と語られた。さらに、日々戒律を守り、身・口・意の統御を行なっているスリランカ仏教に対して、五つの集積（五蘊）を善のみに変え、最終的にはそれらの集積を超越していくという姿勢を高く評価されている。

しかし、そのスリランカの仏



D・B・ビジェトゥンガ総理大臣は、サッチャ・サンガに全面的な協力を申し出てくださった。



尊師は、R・カマゲー仏教大臣に仏教の発展のための援助を申し出られた。



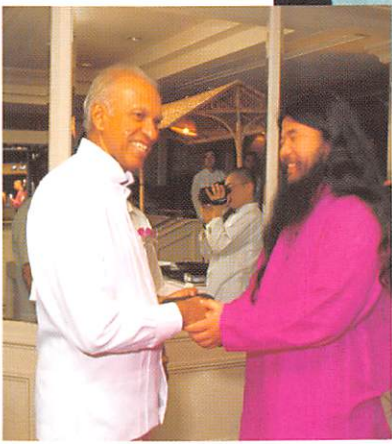
ダラヤトゥネー福祉大臣とは、スリランカの障害者・老人問題について語り合った。

教にも陰りは見られる。急激に押し寄せる近代化の波が、人々を精神的に退廃させ始めているのだ。尊師一行がスリランカを訪れる少し前にも、ある高僧が巨額の金銭を着服し、逮捕されたという事件が起こっている。この事件は、出家修行者は尊敬の対象とされ、僧と一緒の席で食事をすることさえタブーとされているスリランカの国民に大きなショックを与えたようだ。

　このような精神的な荒廃と同時に、経済的な困窮もまたスリランカ仏教界の大きな問題となっている。前回の訪問でも訪れたスブーティ寺は仏舎利を有する



熱心な福祉活動家である大統領夫人に官邸に招かれ、来訪の目的について語られる尊師。



フェスタス・ペレラ国務大臣は、尊師が話された仏教の修行に興味を持たれたようだ。

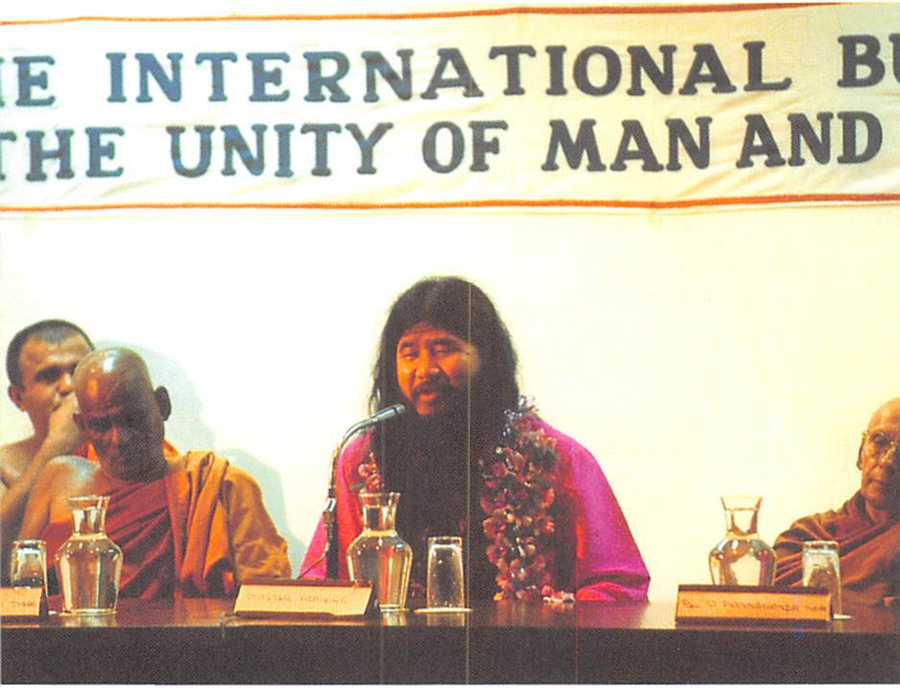


スリランカの近代建築を代表する国会議事堂。

由緒ある寺院だが、その仏舎利を安置するストゥーパが朽ちたまま修復されないでいる。住職の話では、ストゥーパ建設の計画はあるものの、工事費が賄えないために着工が延び延びになっているのだという。それを耳にされた尊師は、貴重な仏舎利を保護するため、このストゥーパの建造費を負担することを申し出られた。

また、仏教大臣の要請もあり、テーラヴァーダの教えを守り、世界に広めるための援助も検討されている。

危機に瀕しているテーラヴァーダを守るために、麻原尊師とオ



国際仏教会議で講演される尊師。

ウム真理教に寄せられる期待は高まっている。

◆パーリ語を仲立ちとして

今回の訪問では、そのような問題を抱えているスリランカの仏教を支え抜こうとされている高僧の方々との対談と、世界仏教会議が実現した。

その模様は、後ほど詳しくお伝えするとして、スリランカの僧との交流は、オウム真理教にとって大きな収穫をもたらした。それは、オウム真理教とスリランカの僧との間に、パーリ語という共通の生きた言語があるこ



パーリ語・仏教学院のカルナダサ学長（右）と語り合う尊師。

とを確認できたことである。

スリランカの僧たちは、パーリ語で書かれた経典を学び、それを実践している。そして、オウム真理教では、サキャ神賢直説の経典をパーリ語から直接訳出している。したがって、僧の話されているパーリ語から、尊師によって決定された正しい訳語が引き出されるし、こちらの表現したいことがパーリ語によってダイレクトに相手に伝わるのだ。日本に伝わっている漢訳の経典を学んでいたのでは、これほど直接的な意思の疎通は絶対に不可能であっただろう。

尊師の決定された訳語の正確



さについては、前回の訪問の際に訪れたパーリ語・仏教学院において、カルナダサ学長自らも認めてくださっていたが、今回の対談で、それが現場で証明されたわけである。

◆「輝く島」に

〝スリランカ〟――シンハリ語で「輝く島」という名の美しい国。しかし、この国の光の源であるテーラヴァーダは徐々に徐々に崩れ去ろうとしている。今、これをくい止めなければ、わたしたちは人類の貴重な宝をまた一つ失うことになってしまうのだ。

〝オウム・サッチャ・サンガ・アソシエーション〟を軸としたスリランカにおける活動は、ただスリランカだけに向けられたものではなく、人類に残された貴重な精神的基盤である、正当なテーラヴァーダを守り抜き、そして、全世界に広めるための第一歩なのである。

「輝く島」の名のとおり、いつの日にか世界に向けてまばゆい光を放つために、麻原尊師はこの国に救済の砦を築かれた。今、スリランカは新たな光を得て、その輝きを増し始めたのだ。

四念処から阿羅漢までの瞑想ステージ

3月25日

チャンドラシリ僧との対談

於：ムッレーリヤワ

コロンボから車で一時間ほどのひなびた町、ムッレーリヤワ――。その町の竹林に覆われた小高い丘に、瞑想の達人と称されるドダンパハラ・チャンドラシリ僧の寺はひっそりと建っていた。

静寂さと神聖な雰囲気をかもしだしているストゥーパや仏像を右に左に眺めながら参道を歩いていくと、やがて灯明の火影がゆらめくこぢんまりとしたたたずまいの庵が見えてくる。その小さな庵の中で、チャンドラシリ僧は一行の到着を待っておられた。

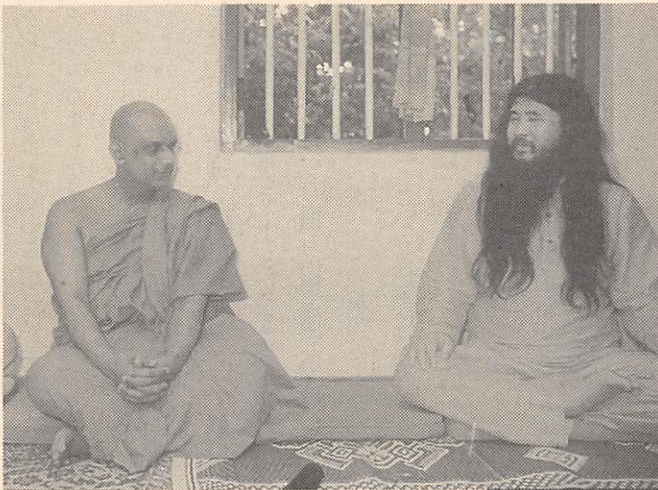
対談は、淡々とした時間の中で過ぎてゆく。僧が語ってくださった「四つの記憶修習述（四念処）」から始まる瞑想ステージは、以前から尊師が説いておられた法と同じものであり、これといった新しい発見はなかったものの、オウム真理教の教義の正しさ、正確さを確認するには十分だった。

真理は一つ――。そんな言葉が浮かんでくる対談であった。

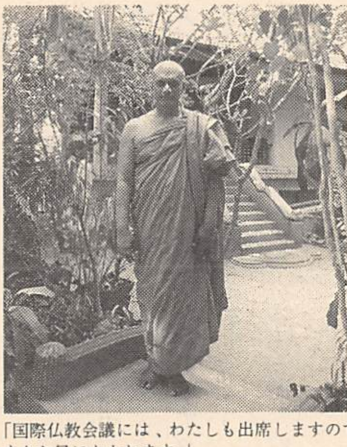




うっそうと繁った竹林に囲まれた閑静な寺で、チャンドラシリ僧との対談は行なわれた。







「国際仏教会議には、わたしも出席しますので、またお目にかかれます。」
チャンドラシリ僧は、そう言って一行を見送ってくださった。



※ヴァンギーサ＝オウム真理教の出家修行者、聖者ヴァンギーサ到達光師を指す。クンダリニー・ヨーガの成就者で、オウム真理教『サキャ神賢直説根本仏典』翻訳チームのリーダー。

◆ベースは四念処

（尊師）まず、『預流相応（よるそうおう）』の中に、「アナータピンディカ」という項目がありまして、その中でサーリプッタが十相、つまり、ダサ・アーカーラについて説く場面があるのですが、この十相の中の、特にサマディィ、それから、精通、離解脱、この三つについての見解をお聞きしたいと思います。

（チャンドラシリ僧：以下僧）では、その瞑想を始めた人が、その瞑想から、〝チッタサマーディィ〟という状態に至るところについて説明いたします。

（尊師）※ヴァンギーサ、チッタサマーディィは「心の離解脱」と訳しているか？

（ヴァンギーサ師）はい、心の離解脱と訳しています。

（尊師）チッタサマーディィの意味は何でしょうか。

（僧）サマディィは内側の瞑想によって得ることができます。チッタサマーディィにはいろいろな種類があります。仏陀の教えとアスバについて考える者は、だれでもチッタサマーディィを得ることできます。

（ヴァンギーサ師）アスバは「不浄」のことです。

（僧）まず、我々は座って、そして肉体がどのようにできているかを考えるならば、それは、髪、体毛、爪、歯、皮膚、肉……

と、我々の体はこのようなものから始まったのです。このように考えることでチッタサマーディを得ることができます。

（尊師）それはわかりました。一番初めは、四念処から入りますね。今おっしゃった身体、次は感覚、そして心の働き、それから法則について瞑想するわけですが、その段階が終わったら、次にはどの瞑想をするのでしょうか。

（僧）座して四念処の瞑想を行なうとき、体にしたがって見るとき、心が何を行なっているのか、心に何が浮かんでくるのか、体の中の苦痛とは何なのか、こうしたことを見ることができます。

そして、その四念処を続けていると、その四つが心の中にやって来ます。すると、例えば苦痛が生じてきます。例えば十五分、三十分、四十分と瞑想をしてると、体中に苦痛が生じます。そして、苦痛が来たところに今度は集中を行ないます。そこに集中して、それが苦痛であると考えます。そうしているうちに、その苦痛を完全に除去できます。

（尊師）その経験はわかりました。

◆そして阿羅漢まで

（尊師）続いてお尋ねしたいのですが、最終的な段階になると光の粒が生じ、六神通

の段階に入るはずです。六神通の段階の最終的な段階では経験の滅尽が起きるはずですが、そのときに光の粒の海が見えて、その光の海の粒一つ一つが衆生の流転を表わ

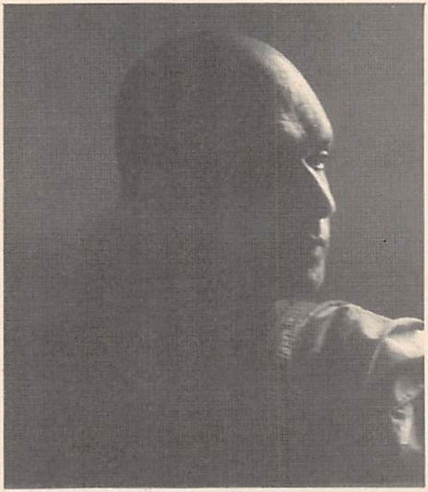


していることを認識できる状態になってくるはずです。

そして、それは表層の意識に戻るときは光として見え、深い意識状態に入ると、それが粒として見え、より深い意識状態に入ると、その粒は一つ一つの魂の経験、魂の流れを表わしているという状態が来るはずです。そこでお尋ねしたいのですが、この状態の次にはどういう経験をするのでしょうか。

(僧) 我々が長く瞑想していると、ルーパ、ヴェーダナー、サンニャー、サンカーラ、ヴィンニャーナ……。

(ヴァンギーサ師) 形状-容姿、感覚、表



象、経験の構成、識別です。

（尊師）五蘊（ごうん）のことですね。

（僧）五蘊について長く瞑想していると、それらがわたしたちに直面してきます。そして、より高くより高く瞑想ステージが進んでいって、ある高い時点に達すると、そこで止まります。

そして、サッカーヤディッティ、ヴィキッチャー、シーラバタパラーマーサ……。

（ヴァンギーサ師）有身謬見（うしんびゅうけん）、疑念、戒誓（かいせい）のとらわれ。

（尊師）これは、五下分結（ごかぶんけつ）だね（これは、弟子たちへ対しての言葉）。

（僧）そして、有身謬見、疑念、戒誓のとらわれ、これらが心からなくなっていきます。

（尊師）〝戒誓のとらわれ〟の意味を詳しく説明していただけますか。

（僧）この世の中にはたくさんの宗教があ

りますが、自分が行なっている瞑想だけが本当の瞑想なんだと信じることです。

（尊師） うんうん、同じだね、発想としては（と、これも、弟子たちに）。

（通訳の僧） 〝ヴィチキッチャー〟はわかりますか。

（ヴァンギーサ師） はい。疑念ですね。

（通訳の僧） そうです。三宝、つまり、ブッダ（仏陀）、ダンマ（法則）、サンガ（出家教団）に対する疑いです。

（尊師） それでは、その次は五上分結の瞑想をするのですか。

（僧） 一来のステージに来た人は、これらのこと、つまり、下分結などがなくなります。つまり、サッカーヤディッティ、ヴィチキッチャー、シーラッバタパラーマーサ、カーマラーガ、パティガ、マーナ、ウッダッチャ、アヴィッジャーです。

（ヴァンギーサ師） 有身謬見、疑念、戒誓のとらわれ、愛欲愛著、嫌悪、慢、興奮、非神秘力です。「愛欲愛著」とおっしゃっていますが、普通ここのところは、愛欲の衝動（カーマッチャンダ）と害心（ビャーパーダ）が来ます。ここの言葉が若干違います。

（尊師） 五下分結と五上分結。わかりました。これが最後なのですか。

（僧） いいえ、違います。それが最後ではありません。その五つが終わると、預流、

一来、不還（ふげん）、阿羅漢（あらはん）です。仏教徒はだれでも、「わたしは預流になりたい」「一来になりたい」と思っています。

（尊師）では、阿羅漢が最後ですか。

（僧）はい、それが最後です。

（尊師）阿羅漢になったら、そのときは何の瞑想をするのでしょうか。

（僧）アラハット（阿羅漢）に到達した者は、二度と再生することがなく、それが最後の生であって、もう再び瞑想をする必要はありません。五下分結と五上分結とがすべてわたしの心からなくなって、わたしの心は綺麗になったと考えます。その段階でもまだ瞑想をしているわけですが、それは単なる行動です。

テーラヴァーダの教えによるとアラハット、パッチェーカブッタとブッダ、この三つがあります。

（尊師）阿羅漢、独覚（どっかく）、仏陀ですね。

（僧）そして、仏陀がこの世に生まれたときのみ、その仏陀の力によって、他の人がアラハットやパッチェーカブッタになることができます。

◆四無量心の瞑想は　現世に関するもの？

（尊師）では、四無量心の瞑想は、どの段階から始まるのですか。

〈僧〉メッター（聖慈愛）、カルナー（聖哀れみ）、ムディター（聖称賛）、ウペカ（聖無頓着）ですね。

これらは主要な善きことであり、すべての人はこれらを使うべきです。メッターとは親切です。カルナーは……。

〈尊師〉ちょっと待ってください。四無量心の意味を聞いているのではなくて、これらの瞑想がいつから始まるのかを聞いているんですが。

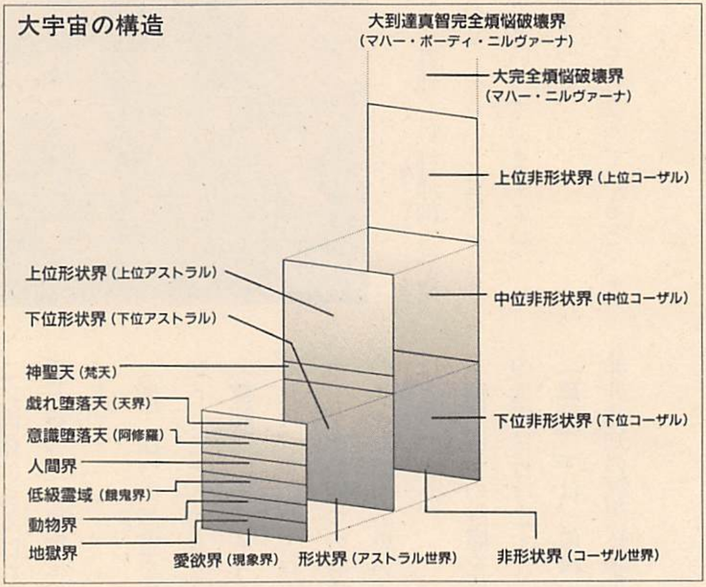
〈僧〉この四つは、もちろん瞑想の一種類ですが、これらによって四向四果の段階には行けません。四無量心はこのわたしたちの現世に関係するものです。

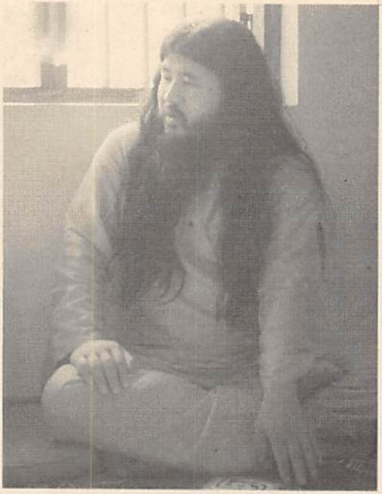
◆三界について

〈尊師〉では、この愛欲界（カーマ・ローカ）、形状界（ルーパ・ローカ）、非形状界（アルーパ・ローカ）の三つの世界の経験はいつの段階で起きるのでしょうか。

〈僧〉カーマ・ローカとは、我々は今この瞬間に生きているということです。ルーパ・ローカとは……。

〈尊師〉いえ、ちょっと待ってください。そういう意味で聞いているのじゃありません。例えば、カーマ・ローカにも、意識堕落天があるし、ナーガがあるし、ガンダッバがあるし、あるいはインドラがあるし、ヤマ天があるし、トゥシタ天があるし、創


大宇宙の構造
大到達真智完全煩悩破壊界
(マハー・ボーディ・ニルヴァーナ)
大完全煩悩破壊界
(マハー・ニルヴァーナ)
上位非形状界(上位コーザル)
中位非形状界(中位コーザル)
下位非形状界(下位コーザル)
上位形状界(上位アストラル)
下位形状界(下位アストラル)
神聖天(梵天)
戯れ堕落天(天界)
意識堕落天(阿修羅)
人間界
低級霊域(餓鬼界)
動物界
地獄界
愛欲界(現象界)
形状界(アストラル世界)
非形状界(コーザル世界)



造満足天があるし、為他心以神通創造欲望満足従事天があるし、そういう世界を含めてカーマ・ローカといっていますよね。しかも、地獄から始まって。

つまり、瞑想修行を行なっていると、ここに肉体はあるけれども、例えば愛欲の天界へ行ったり地獄へ行ったりするはずなんです。

（僧） 四つの静慮を修習する者はその世界に行くことができます。

（尊師） ええ、そういう意味でいったら、それは、ルーパ・ローカもアルーパ・ローカも、その四つの静慮で行くことができるのじゃないかと思いますが、それについてはどうですか。

（僧） 四つの静慮を修習すれば、その三つの世界に行けます。

（尊師） では、最後の質問ですが、非認知非非認知の瞑想状態をスリランカの僧の方々

はどのように解釈してるのでしょうか。

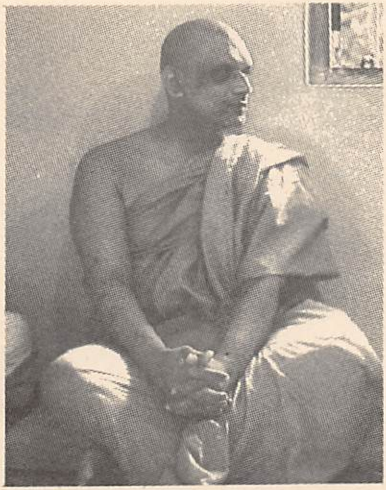
(僧) 仏陀が説くところによれば、その世界に瞑想家が行ったとしても、そして、その世界に住んだとしても、その世界は永久に存在するものではなくて、また下の愛欲界に落ちる可能性があります。

(尊師) いや、それはわかっています。そうではなくて、その非認知非非認知境は言葉で説明できるものであるかどうかをお聞きしたいのですが。

(僧) それは、非形状界に属する神々の場所で、そこに生まれた人は体がなくて、心だけが存在しています。

(尊師) それはアルーパの説明ですね。わかりました。

今日は大変勉強になりました。スリランカにはこれからもちょくちょく来ますので、いろいろとお伺いに来ます。そのときはよろしくお願いします。



仏教はアインシュタインを超える！

3月26日

スリランカ 国営テレビインタビュー

於：コロンボ　ヒルトン・ホテル

オウム・サッチャ・サンガ・アソシエーションの建設や、スリランカの仏教界の活性化、そして、スリランカの人々の福祉のために精力的に活動される麻原尊師に、スリランカのマスコミも大変注目をしていたようだ。

さっそく、二十六日にはスリランカの国営テレビの特別番組の取材が行なわれた。

インタビュアーのシャーミニー・ラトゥアトゥンガさんは人気のニュース・キャスターで、日々、超多忙のスケジュールをこなしているということだったが、事前に尊師のご著書の英訳版『Tathāgata abhidhamma』や『The Teachings of the Truth』『Declaring Myself the Christ』を読んでいらしたようで、鋭い質問が飛び出す一幕も見られた。

マスコミの取材はこれだけにとどまらず、二十八日には道路建設のオープニング・セレモニーに出席された尊師にたくさんの取材陣が押しかけた。

スリランカの人々の尊師への関心の深さを示すように、この模様は、早速国内のテレビ、ラジオ、新聞で一斉に報道された。



国民の七〇パーセントが仏教徒であり、仏教の教えを土台とした道徳観が浸透しているスリランカだけあって、中味の濃いインタビューとなった。







◆教えの基本はテーラヴァーダ

――スリランカに訪問した目的からお話しいただけますでしょうか。

（尊師）スリランカへ来た目的は二つありまして、そのうちのまず第一は、〝オウム・サッチャ・サンガ・アソシエーション〟をこのスリランカにつくりまして、そこでより深いテーラヴァーダの教えをスリランカの方々に浸透させたいということが一つと、それからもう一つは日本の技術、これを導入することによって、スリランカの経済的な活性化を行なうというのが第一の目的です。

それから第二は、スリランカの仏教徒の方々の援助をするために来ました。例えばストゥーパを建設することをお手伝いするですとか、あるいは経済的なその他の援助ですとか、そういうことが目的です。

――麻原尊師が教えていらっしゃる仏教の種類、そして、そのベースとなるようなものについてお話しいただければと思います。

（尊師）ベースのお話をする前に、わたしの修行歴を少しお話した方がいいと思います。といいますのは、仏教と一言で言っても、例えば北伝に伝わるヒナヤーナ、マハーヤーナ、ヴァジラヤーナ、タントラヤーナという四つの教え、それから南伝に伝わる

テーラヴァーダという体系の五つの体系がありますｃで、わたしはその五つの体系のすべてを一応学んだわけですが、その中で教えの基本となっているものはテーラヴァーダの教えです。

――麻原尊師の説法を収録された、いくつかの本を読ませていただきました。その中に〝四つの真理〟という言葉がありますが、それについて説明していただけますでしょうか。

（尊師）四つの真理というのは、〝四つの絶対的真理〟のことですか。

――ええ、そうです。

（尊師）人間には煩悩というものがあります。そして、この煩悩は、必ず活動をすると生起すると。そしてそれを止滅しなければならないと。そして止滅するための方法があると。それはなぜかというと、その煩悩が生起すると煩悩の存在そのものは苦しみの存在とイコールであると。そして煩悩が生起することによって、苦しみも生起すると。そして煩悩を滅尽することによって苦しみも滅尽すると。そして煩悩を滅尽する方法を実践することによって、苦しみを滅尽する方法と同じになると。

では、なぜその煩悩を滅尽しなければならないのかと。確かに煩悩は喜びであると。しかし、それは無常を根本としているもの



であり、その無常を根本としたものの上にわたしたちが立脚する限り、絶対的な平安を得ることができない。これが四つの絶対的真理です。

◆経済も科学も仏教をベースにして

——第三世界には、本当に困っている人たちがたくさんいますが、具体的には、どのような形でその方たちを助けようとしていらしゃるのでしょうか。

（尊師） 今までの社会の流れを見ますと、ただ単に経済的な援助を行なうだけにとどまっていると。しかし、それでは本当にその人たちを幸福にすることはできないと。やはり、その人たちが完全に自立するためには、正しい仏教の教えと、そして正しい経済的発展をもたらすためのテクニック、それとあと、どのようにしたら経済が安定するのかという具体的な方法、これらの三つが必要ではないかと考えています。

——仏教を広める上に当たって、科学的手



法が必要だということをお聞きしましたが、それについて少しお話ししていただけますか。

〈尊師〉これについては二つの検討をする必要があると思います。その第一番目は、経典に書かれていることが、この現代の科学に即してるのか、あるいは現代の科学を超えているものなのかということが一つと、それからもう一つは、一口に仏教といってもいろいろなステージ――例えば、静慮の四つのステージ、あるいはサマディのステージがあるわけですが、こういうものを科学的に測定することによって、その人が真に例えば解脱した人であるとか、あるいは成就した人であるとかをチェックできる機能が存在するならば、より合理的に人の魂の成熟の状態を理解することができると考えています。

特に、第二番目はもうすでに行なわれていますが、第一番目の検討、例えば、仏教には六つの神通力があるわけですが――

例えば過去世を知るですとか、あるいは自分の来世を知るという神通力があるわけですが、これは、アインシュタインの一般相対性理論とちょっと反する考え方でして、それについての検討をするとか、あるいは、実際に「真理勝者は、未来にも過去にも現在にも、存在しているともいえるし存在していないともいえる」という経典の一節があるわけですが、これは、アインシュタインの相対性理論を完全に超越した状態を表わしているんですね。そういうことをしっかりと数式的に論理的に表現できるようになったならば、洋の東西を問わず、仏教の教え、それから仏教の達成するものが最高のものであるということが証明できると思います。ですから、それを証明していきたいと考えています。

◆神、仏陀、キリストの定義

——「神の存在」という考え方、これを支持されるでしょうか。

（尊師）わたしの場合、神と会う、あるいは神を経験するということを何度も行なっていますので、支持するというよりも当然のことだと思います。しかし、神もまた無常です。

——神の存在というのは、仏教の教義的な考え方に反するものではないでしょうか。

（尊師） いや、仏教の修行を行なっていくと、必ず神へ至ります。神へ至るとはどういうことかというと、例えば、わたしにしろあなたにしろ、修行を続けていくことにより、神の存在となっていきます。そしてその神の存在を超えて、次の段階で阿羅漢へと到達し、そして仏陀に至ると。そして最終的には、タターガタ（真理勝者）、あるいは、バガヴァント（世尊）の状態へと至ると。これが、テーラヴァーダの教えです。

例えば例を挙げるならば、まず愛欲神の神にわたしたちはなります。次に、形状界の神、そして非形状界の神へと至るわけです。

――尊師の説法集を見せていただきましたら、そこで編集者が尊師のことを〝仏陀〟というふうに呼び、そして仏陀の時代に生きることができて非常に喜びであるというふうにおっしゃっていましたけれども、そのように尊師のことを仏陀と見る人たちがいることについて、尊師ご自身どのようにお考えになりますか。

（尊師） まず仏陀の定義から行なわなければならないと思います。仏陀の定義とは、オウム真理教の教え、あるいはテーラヴァーダの教えでは、六神通を得た者、そして三界に対して精通した者というふうに考えています。この六神通の体験そのものは、わ



たしの中に存在していることは間違いありません。ただ、その体験が完全な状態、つまり、百パーセントのものであるかどうかというのは、現代はかなりけがれた時代ですから、それは百パーセントと言い切れない部分があるかもしれません。しかし、六神通を体験したことは事実であると。まあ、その意味においては仏陀の定義に反さないのではないかと考えています。

付け加えさせていただくならば、現に、北伝の最高の僧の方々から〝イエシェ〟、つまり「完全なる絶対なる神の叡智を得た者」という称号も実際に得ていますし、それから、これは自分自身の体験としてですが、これから多くの生を経験した後、マイトレーヤとして転生することは間違いないと思いますので、そのような意味においても、彼らの評価というものは正しいとわたし自体も考えています。

——具体的にいえば「自分自身がキリストであるというふうに宣言すること」というタイトルの本（編集部注：尊師のご著書『キリスト宣言』の英訳版）を読みましたが、これは尊師ご自身によって書かれたものですか。この本についてお伺いしたいのですが。

（尊師）もともとキリストというのは何を教えたかというと、神聖世界へ至るための道を教えたわけです。で、この神聖世界へ至るための道というのは、テーラヴァーダの国であればご存じのとおり、要するにブラフマンの世界へ至るための道を教えたわけです。このブラフマンの世界へ至るための道を教えるということは、何を意味するかというと、単なる三界の中の形状界の世界へ至るための道を教えたというふうにいうことができます。となると、それよりも高いテーラヴァーダの教えを、世界に、しかも科学的に浸透させるとするならば、それこそまさに今から二千年前に、キリストが予言したキリストということができるのではないかというのが、わたしとそれからオウム真理教の立場です。

——どうもありがとうございました。今回のスリランカの訪問が記憶に残るものになることを願っています。

（尊師）ありがとうございました。

解脱への道、修行の道

3月27日

アーナンダ・マイトリー僧との対談

於：バランゴダ

二十七日には、だれもがスリランカナンバーワンと認める瞑想家であり学者でもあるアーナンダ・マイトリー僧との対談が持たれた。

コロンボから車に揺られること四時間で、アーナンダ・マイトリー僧がおられるバランゴダの町に到着した。チャンドラシリ僧の寺とは打って変わって、敷地内には大勢の人が集まっていて活気にあふれている。どうやら、尊師を迎えるために、檀家の人たちがもてなしの準備をしてくれているらしい。

一行がこの日の対談のために用意された席に着いてしばらくすると、とても九十歳とは思えない元気な足どりで、アーナンダ・マイトリー僧は姿を現わした。

瞑想ステージから過去世の話、ヨーガやタオ（仙道）……。対談は仏教の枠を超えて広がっていく。僧は、対談中に幾度もうれしそうな笑い声をあげ、瞑想家同士でなければ交わすことができない会話を心から楽しんでおられるように見受けられた。

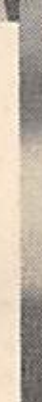








アーナンダ・マイトリー僧は、尊師の提唱される“オウム・サッチャ・サンガ・アソシエーション”の理念に賛同され、理事を引き受けてくださった。



◆解脱への道の集大成

（尊師）今回は、偉大なるアーナンダ・マイトリー僧とお会いすることができまして、大変光栄に思っております。

（アーナンダ・マイトリー僧：以下僧）あなたを歓迎することができて、わたしも大変うれしく思います。

（尊師）アーナンダ・マイトリー僧に、いくつか教えを請いたいことがあります。

（僧）どういうものでしょうか。

（尊師）まず、上座部（テーラヴァーダ）の仏教というのは、ものすごい数の経典があるわけですが、その中で、系統立った瞑想プロセス、系統立った仏陀への道というのは指し示されているのでしょうか。

（僧）あります。『ヴィスッディ・マッガ』という本の中に、仏陀の瞑想プロセスが載っています。それは「浄化への道」というような言い方をしています。

（尊師）ああ、『清浄道論（せいじょうどうろん）』ですね。ということは、その『清浄道論』が、僧にとっての解脱への道の集大成と見てよろしいわけでしょうか。――これは確認の意味でお伺いするのですが。

（僧）そうです。〝解脱への道〟。そうです。

（尊師）わかりました。では、続けてお聞きしますが、今、わたしたちの団体では、イギリスにある「パーリ・テキスト・ソサ

エティ」の文献を使って経典の翻訳をしているわけですが、文献としては「パーリ・テキスト・ソサエティ」の文献を使っていいとお考えですか。

（僧）そのソサエティは『ヴィスッディ・マッガ』を英語で出版しています。「Path of Purity（清浄への道）」という名前で『ヴィスッディ・マッガ』の翻訳もあります。

同じ本を、「Path of Purification（清浄への道）」という名前で英国人が出していまして、それは得ることができますが、それはキャンディ（編集部注：スリランカの都市）の「ブッディスト・パブリケーション・ソサエティ」から出版されています。

（ヴァンギーサ師）英語で読んでいると勘違いしていらっしゃるようですね。

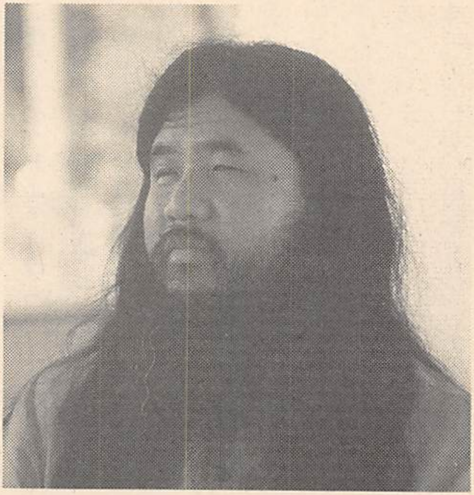
（尊師）※マイトレーヤ、それを説明してください。わたしたちは、パーリ語から翻訳していると。

（僧）わかりました。しかし、これら紹介した本は、英語によって非常によく翻訳されています。

◆南伝も北伝も根本は同じ

（尊師）わたしは、上座部の仏教、それから、北伝に伝わっていますヒナヤーナ、マハーヤーナ、ヴァジラヤーナ、タントラヤーナの研究および、その修行をしています。

＊マイトレーヤ＝オウム真理教の出家修行者、聖者マイトレーヤ智徳成就者を指す。マハー・ムドラーの成就者で、一連の対談の通訳を務められた。



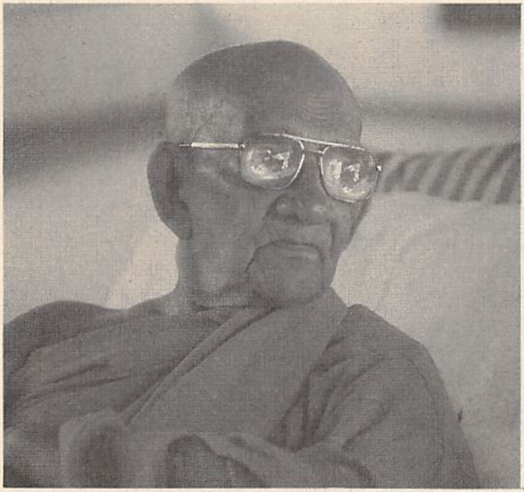
わたしは、一昨年に亡くなられた、カギュ派の総師カール・リンポチェ師——この方は、わたしの前生のグルでもあられたわけですが——や、チベットの高僧の方々と何度もお会いして、経典や修行の話をしておりますし、チベットの経典を翻訳しておりますが、仏教の目的が北伝と南伝では、若干違っているように感じています。アーナンダ・マイトリー僧は、この点についてどのようにお考えでしょうか。

(僧) ああ、カール・リンポチェ師にはアメリカでお会いしたことがあります。

お尋ねの件ですが、修行自体に関しては違いがあるかもしれませんが、仏教の根本というか、実際的な部分については変わらないのではないかと考えています。

(尊師) わたしもそのとおりだと思います。

◆テーラヴァーダの修行法



(僧) テーラヴァーダにおいては、どのように修行するかは三つの段階に分かれています。それは、〝シーラ、サマーディ、パンニャー〟の三つです。

(尊師) ええ。戒・定・慧ですね。

(僧) まず、よい行ないをすること。これは、道徳的によい性格の発展ということですが、これはすべての修行の基礎になります。これが〝シーラ(戒律)〟といわれるものです。それは、修行をする前に行なうべきことです。

それから、その次は〝サマーディ(サマディ)〟を修行しなくてはなりません。その修行によって、種々の静慮に到達します。それは、非常に高い段階の集中です。この

状態になりますと、多くの感情が、すべて抑制されることになります。

この段階になると、心を一点に統一するということについても、非常に高いステージを得ることができます。これは、パーリ語では〝ジャーナ（漢訳では「静慮」）〟といいます。日本語ではこれを「念」といいますか？

（尊師） 禅定……、「禅」ですね。

（僧） これが第二段階で、この第二段階においては、要するに集中の心の発達において、より高い段階になります。この段階に入れば、もしそれを望むならば、超能力も身につけることができます。

◆無常の理解が智慧を産む

しかし、最も高いステージというのは〝パンニャー〟の開発です。要するに、智慧の開発。ここでいう智慧というのは、この我々の生命の完全な理解のことです。これが、瞑想の最高段階といえます。パーリ語ではこれを、〝パンニャー〟あるいは〝ヴィパッサナー（正観）〟といいます。

この修行において、まず精神的に肉体を分析します。そして、精神的に肉体を調査します。この修行の結果、わたしたちは、わたしたちの肉体というものが、常に変化するものの集積であるということを理解します。この段階になると、肉体を見ません。

というか、この肉体は見るのですが、その肉体を単に原子の集合としかとらえませんから、見えないと同じことです。

そして、このすべての原子の粒子というのが、すべて変化を避けられないものであるということを理解します。この原子の集合である肉体というものは、常に生じ、そして滅することを繰り返しています。

そして、このような性質を見ることによって、自分の体のすべての部分が無常であるということを理解します。永久に続かないということを理解します。その肉体の原子的単位というのは、一瞬一瞬に生じ、滅し、生じ、滅しを繰り返しています。この性質を理解すれば、この肉体というのは、苦しみである、ドゥッカであるということを理解します。

これを直接に理解することによって、肉体の中には、変わらない中核というものはないということに気づきます。

こうすることによって、肉体というものは、無常であって苦であって、そして、本質的なものではないということを理解するようになります。

この肉体的身体の性質をよく理解すれば、その次は心を吟味しなくてはなりません。つまり、心の働きについて吟味しなくてはなりません。どのように思考が生じ、そし

て、去っていくかという過程を理解しなくてはいけません。その心というものについて、一瞬に、注意深く心を傾けてなくてはいけません。心の本質というものを吟味しなくてはなりません。いつもしなくてはなりません。ずっと、し続けなくてはなりません。

この、心の自己観察に没頭することによって、最終的にすべての思考というものが、すべての心の部分が、瞬間的な変化を避けることができないものだということを理解します。つまり、心の中にも、変わることがないものが何もないということを理解します。わたしたちが心と呼んでいるものは、思考が生じ、思考の発生、および消滅の流れでしかないということを理解します。それして、すべての思考というのが変化するものだということを理解します。すべての精神的特質というものが、よいものであろうと悪いものであろうと、すべて変化するものだということを理解します。

このとき、心全体が変化を避けられない、本質的に変化するものであるということを理解します。そして、このように、消滅、そして発生を繰り返していって、これが苦しみであり、そして本質が存在しない、本質不在のものであるということを理解します。

このようにして心の観察を続けていくと、

最終的にわたしたちは、心全体というものがスンニャッタ、空性であるということを理解します。

繰り返し繰り返し、繰り返し繰り返し、この肉体のスンニャッタ、そして心のスンニャッタを理解するようにしなくてはなりません。見るようにしなくてはなりません。

このようにしていると、この心というものが、自分自身の知識であるということを理解し、そして貪りや、もしくは欲求というものが消滅します。

このように、徹底的に心と肉体に無常性を観察することによって、欲求を除去することができます。このような認識をどんどん進めていくことによって、この人生というものに飽きることになります。そして、最終的に心の中のすべての欲求を除去することになります。欲求というのは、この世界に対する欲求のことです。

ここで、心の智慧というものが芽生えます。それは、心と体に関する正確な観察をします。そして、無智というものが払われ、智慧というものを得られるのです。

そのとき、世界の反対を見ることになります。それがニルヴァーナです。ニルヴァーナの完全なヴィジョンを得ることになります。

そうすることによって、生きている間にニルヴァーナの祝福というものを享受する

ということになります。そして、ニルヴァーナと一体となります。そして、この肉体を捨てた後も、精神はそこにいます。

これが、この国に伝えられる瞑想の体系の要約ですが、詳細については『ヴィスッディ・マッガ』の方をご参照ください。

◆一致する経典と修行上の経験

（尊師）一つ質問してよろしいでしょうか。原子とおっしゃるのは、光の粒の海みたいなものがあって、その一つ一つの粒が、それぞれ生きているというか――実際、いろいろな世界の転生を表わしているわけですが――そのことを言っていらっしゃるのですか。

（僧）光の粒とは、どういう意味ですか。

（尊師）要するに、普段はいろんな意識とか、あるいはいろんな煩悩とか、それを色とか光で具体的に視覚的にとらえることができると思うわけですが、それが、より深い瞑想状態、サマディの状態に入ると、光の帯が、実際は一つ一つの光の粒の集合であることが認識でき、それよりもっと深い意識状態に入ると、その粒一つ一つが完全なる転生を表わしている、つまり、魂がそこに存在していて転生を表わしているというデータであると理解できます。そのことを言っていらっしゃるのでしょうか。

（僧）まず第一段階の色が見えるというこ

とについては、そのとおりです。『ヴィスッディ・マッガ』の中に、その記述がありま す。集中を開発すれば、それはできます。それはサマディということです。その光を見ることはできます。

(尊師) といいますと?

(僧) 『ヴィスッディ・マッガ』の中に、どのように光が発達するか、開発されるかということが書いてあります。

(尊師) わたしはまだ『清浄道論』を読んでいませんから、それについてはお答えできません。ただ、わたしの経験からいくと、その光の粒一つ一つが、それぞれの転生とか、あるいは経験を表わしているわけですが、その次があるのかということをお聞きしているのですが。

(僧) そうかもしれません。

(尊師) そうですか。わたしは、経験の構成であることは間違いないと思いますね。

(僧) より高い瞑想の状態というのは、心と肉体を観察して、そして、その本質を完全に把握することだと思います。

(尊師) それについてですが、深い瞑想状態に入ると、データ、つまり意識というものと自己とが分離された状態で存在していますが、そのデータに対して集中すると、思念が止滅しますね。

(僧) それは消滅していきます。それは一

つの方法です。それは『ヴィスッディ・マッガ』の中にあります。

◆最終段階はニルヴァーナ

（尊師）では、それが消滅し終わった後は、どうなるのでしょうか。要するに、ヴィジョンと、それから意識の集中についての経験をお話ししたわけですが、この後どのような変化があるのでしょうか。

（僧）集中によってそのような状態を得ることができます。集中によってその光というものを見ることができます。

（尊師）それが、集中しようと思わなくても、その状態になってしまうわけですが。

（僧）そのようにして内側の光を開発すれば、心の目を開くことができます。

（尊師）この心の目というのは、六神通と関係がありますか。

（僧）はい、関係あります。集中のある段階に入ると、そういう神通を身につけることができます。それは〝アビンニャ（証智）〟といいます。サイキック・パワーズです。

（尊師）サイキック・パワーの中に、漏尽も含まれますか。

（僧）それは最後のものでして、すべての煩悩を消滅することのできる智慧です。そして、それは六つの中の最後の力です。

（尊師）この最後の状態が終わった段階で

ニルヴァーナが来るのでしょうか。

〈僧〉 そのとき、――それらを得た後に、ニルヴァーナを得ることになります。

◆同じ修行者として
――過去世、そして来世

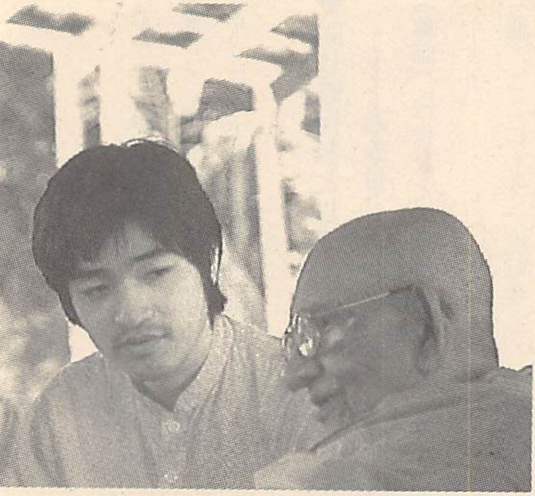
〈尊師〉 来世、どの世界へ転生なさる予定ですか。

〈僧〉 ここにもう一度転生したいと思います。というのは、仏教、そしてこの世に奉仕したいからです。

〈尊師〉 やっぱり大乗の思想をお持ちなんですね。わたしのはっきりとした仏教の修行の始まりは、ヴィパッシー真理勝者のときです。そのとき、わたしは有能神でした。そのときから、本格的な仏教の修行が始まりました。その前は、わたしはヴェーダを奉ずるヨーガの修行者でした。ですから、今生もそのカルマによって、わたしはヨーガのすべてを修め、そして北伝の仏教、南伝の仏教の修行をしているわけです。

〈僧〉 わたしの一つ前の生は、インドのハイデラバードでヴェーダーンタの祭司に生まれています。ですから、わたしはヴェーダンティックの修行について、たくさんの経験があります（笑）。

〈尊師〉 そうでしたか。わたしの一つ前



の生は、ナーガの王でした。そこで、あらゆる仏典のコレクションを行ないました。ですから、今もその世界から意識堕落天、阿修羅に至るまでは、その教えの浸透がなされているはずです。

そして、時は、これから五十億とも七十億ともいえる、長い間にわたっての、破壊期に向かって進んでいます。

（僧）全世界ですか？

（尊師）そうです。

（僧）それは全世界の破壊ではなくて、多くの人が苦しみを得るという意味だとわたしは思いますが。——大地震とかそういう。

（尊師）神聖世界までの破壊であると考えています。

（僧）テーラヴァーダの教えによると、神聖世界まで破壊されることが非常に遠い将



来に起こるということがいわれています。

（尊師）そのとおりです。そして、それまでの間にサッチャ（真理）を広めなければならないと、わたしたちは考えているんです。

（僧）そうですね。

（尊師）だから、ブラフマンの世界（神聖世界）が破壊するまで、人間の世界、あるいは、人間より上の世界に輪廻転生を繰り返したいと考えています。

◆仏教とヨーガの類似性

（尊師）わたしたちがこのように、いろんな国を訪問して善行を積まさせていただく。そして、それと同時に、あなたのような偉大な方々とお会いしている一つの理由というのは、そのサッチャの確定を目的としているんです。

（僧）来ていただいて非常にうれしく思います（笑）。そして、同じ考え方を共有していることがわかって、非常にうれしく思います。

（尊師）仏教とヨーガというのは、かなり類似性が大きいとわたしは考えているわけです。それは前生の経験と、今生の経験との差をお考えいただいても、同じことがいえるんじゃないでしょうか。

（僧）わたしは、かなり前の生で、ヒマラヤでヒンドゥーのヨーガの専門家のもとでラージャ・ヨーガを修行しました。その経験から、両者は非常に近いということを知っています。パタンジャリの『ヨーガ・スートラ』のたくさんの瞑想体験について、仏教の瞑想体験と非常に似た面を教えられていました。

（尊師）全くそのとおりだと思います。で、大切なことは、その共通性と、それから、その差異とをはっきりと世の中の人に示してあげることじゃないかと思いますね。

（僧）ある生は、タオ（仙道）の瞑想をしていました。それも、仏教の瞑想と非常に似ていました。

（尊師）全くそのとおりだと思います。すごくわたしの経験と似ていますね。わたしもタオにいわれているステージは完全に経

験し終わりましたし、ヨーガについても、パタンジャリの『ヨーガ・スートラ』の系統すべてを経験し終わりました。ただ、シャンカラ・アーチャーリアの系統について研究が遅れているのですが。

（僧）タオの教え、それからパタンジャリの教え、それから仏教の瞑想体系、その仏教の瞑想体系のサマディの部分は非常に似ています。

◆仏教の優位性

（尊師）そうですね。ただ、仏教の教えが最も危険性のない道であるとわたしは思いますね。

（僧）確かにヒンドゥーの教えはいいとは思いますけれど、不必要な儀式が非常に多くあります。タオの教えにも同じことがいえます。そして、仏陀が来て、他の宗教のすべてのいいところは受け入れるべきだと推薦しました。

そして、仏陀はさらに、それに付け加えられました、正観、あるいは智慧の瞑想という名のもとに。ヨガやタオの人たちが、仏教のやり方に従うならば、それは非常に安全な道だといえます。

（尊師）簡単な方法ですが、戒、サマディ、智慧、解脱、解脱智見という五つのプロセス、特にその戒の確立、これは最もわたし

たちを安全に目的地へ到達させる入り口だと考えます。これは、ヴァンギーサに言葉を選んでいただいてほしいね。

(ヴァンギーサ師) はい。シーラ (戒)、サマーディ (サマディ)、パンニャー (智慧)、ヴィムッティ (離解脱)、ヴィムッティニャーナダッサナ (離解脱精通見解)。

(尊師) で、ヨーガにも確かに戒律は存在していますが、その戒律の規定が大変甘いと思います。

◆プラーナーヤーマの意味

(僧) ヨーガの体系では、仏教の戒はヤマ (禁戒) とニヤマ (勧戒) です。

(尊師) イエス、イエス。

(僧) それから、プラーナーヤーマ (調気法) とダーラナー (精神集中) が来ます。

(尊師) イエス、イエス (笑)。

(僧) それからサマディです (笑)。

(尊師) イエス。それでは、プラーナーヤーマと入出息——ヴァンギーサ、「入出息」の正確な発音は?

(ヴァンギーサ師) "アーナーパーナ" です。

(尊師) アーナーパーナとプラーナーヤーマの関係は……。

(僧) アーナパーナはプラーナーヤーマです。

(尊師) イエス。

(僧) ヒンドゥー語の本においては、これは〝プラーナーパンナ〟と呼ばれています。『ヨーガ・ワシスタ』では〝プラーナーパーナ〟と呼ばれています。このプラーナーヤーマにはたくさんの方法があります。

〝プラーナ(Prānā)〟とは「生命原理」という意味です。〝アーヤーマ(āyāma)〟とは「貸す」という意味です。つまり、〝プラーナーヤーマ(Prānāyāma)〟とは「生命原理を貸す」という意味なのです。つまり、生命原理をコントロールするということです。これをコントロールすることができれば、どんなふうにも使うことができます。〝プラーナーヤーマ〟には様々な意味があります。ある人は「生命の原則というものをコントロール下に置くことによって寿命を延ばす」と説明する人もいます。他の意味としては、生命の法則をコントロール下に置く。すなわち、呼吸を調御するというのもあります。

(尊師) これは、両方の意味があるんじゃないでしょうか。わたしは経験的にそう思います。

というのは、呼吸をコントロールすることによって——人間の一生のうちに決められた呼吸回数があるわけですが——呼吸を少なくすることによって、生命を延長させるという一つのメリットがあるという

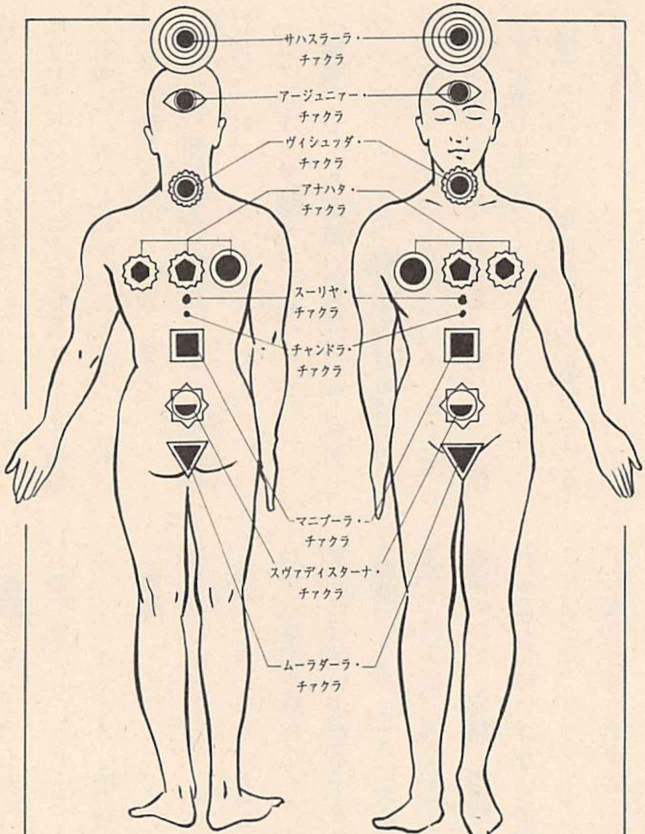
説。それから、もう一つは、プラーナーヤーマによって風を上昇させると。それによって意識を上に引き上げると。高い意識状態に至ると。神の意識状態に至ると。

◆クンダリニーと煩悩の関係

(僧) 意識は、三千の花弁を持つ蓮華、つまりサハスラーラ・チァクラにまで上げることができます。クンダリニーの力は、ムーラダーラ・チァクラにひそんでいます。つまり、それは、会陰と、それから男性性器の間にあります。それはプラニック・パワーと呼ばれていて、そこにひそんでいて、ヨーガの修行によって、頭頂の三千花弁の蓮華、すなわちサハスラーラ・チァクラに至るまで、少しずつ少しずつ上昇させなければなりません。

そして、それが少しずつ上昇するにつれて、超能力とか、心の力が目覚めます。

(尊師) ええ。それについて、わたしの経験と、弟子たちを指導した経験から、少し話をさせていただきたいんですけども。クンダリニーが男性性器と尾てい骨の中間からスタートする場合と、それから尾てい骨から上がっていく場合と、それから、スヴァディスターナ・チァクラから上がるという場合の三つに、経典は分かれていると思いますが、これはその人たちの特性、煩悩の



—チァクラ—

チァクラとは、人間の身体にある霊的なセンターで、主なものは七種である。しかし、普通の人はそれが眠った状態で働いていない。霊的エネルギー、クンダリニーが覚醒すると、そのエネルギーをもってチァクラが開いていくのである。また、チァクラは、身体の下部に位置するものに比べ、上部へいくほど次元が高くなっていく。

特性を表わしてるんじゃないでしょうか。
つまり、クンダリニーの覚醒イコール煩悩の昇華と、わたしは考えています。これはまさに仏教的見解とも一致します。
例えば、邪悪心が強ければ、——邪悪心は何だっけ。
(ヴァンギーサ師) 〝ドーサ〟です。
(尊師) ドーサが強い場合は、ムーラダーラからスタートする。疑念が強ければスヴァディスターナから上がっていく。そして、結局エネルギーが上昇することによって煩悩が止滅します。
(僧) そうです。なぜなら心を集中させるからです。
(尊師) イエス、イエス、イエス。
(僧) 集中し、そして、心が鮮明になり、ゆっくりゆっくりと煩悩がなくなります。
(尊師) それによってクンダリニーが解き放されるんですね。
(僧) 一つ一つの、チャクラ、センターに対する集中を培わなくてはいけません。精神的には強い決意をする必要があります。
(尊師) ええ。まさにそのとおりだと思います。例えば、例を挙げるならば、仏教の戒律の中で、妄語・綺語・悪口・両舌、これをなしてはいけないとあるわけですが、これなどは、ヴィシュッダ・チャクラに対する集中と同じではないかと考えています。

◆再会を期して

（尊師）　今日は、もっともっと長くお話をしたいのですが、しかし、次の予定が組まれていますので、今日はこれで失礼します。わたしはこれから、スリランカにはよく来ると思いますから、そのとき、あなたの方で時間がおありになったら、また、会っていただきたいと思います。

（僧）　以前に来られたことがありますか。

（尊師）　ええ。昨年の十月に来ました。

（僧）　それは知りませんでした。

（尊師）　これから、何度も来ますので。今日はどうもありがとうございました。

（僧）　ここへ来ていただいてどうもありがとうございました。そして、有意義な討論をしてくださってありがとうございました。

皆さん、どうもありがとう（編集部注：これは、尊師に随行した弟子たちに対してのお言葉です）。

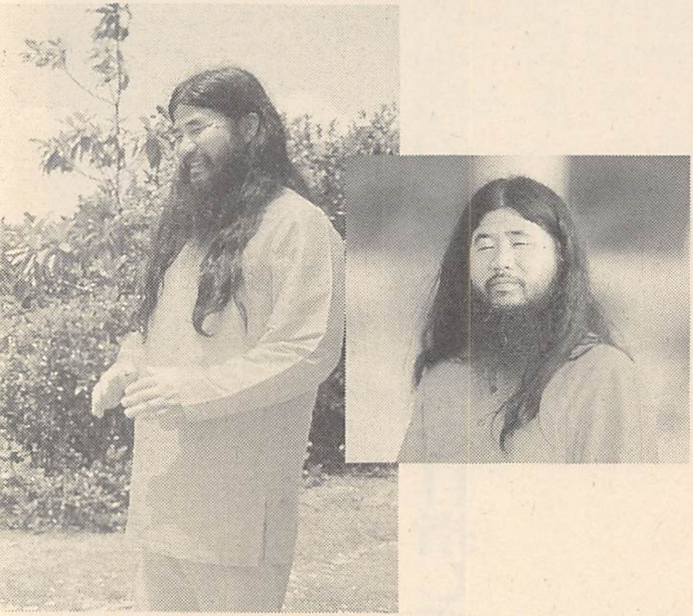
（尊師）　どうもありがとうございました。お会いできたことを、大変うれしく思っています。

お釈迦様の慈愛の再現を目指して

3月28日

ラーフラ僧との対談

於：コロンボ　仏教研究所



談笑される尊師とラーフラ僧。

明日はスリランカを発たなければならないという二十八日。麻原尊師一行は、コロンボ郊外の閑静な場所に建つ仏教研究所に、ラーフラ僧を訪ねた。

ラーフラ僧は、フランスのソルボンヌ大学で教授として教鞭(きょうべん)をとっていたこともあるという学僧で、現在はケラニヤ大学の総学長を務めていらっしゃる。八十四歳という高齢にもかかわらず、精力的な著作活動をされているとのことであった。

仏典研究家として名高いラーフラ僧だけに、麻原尊師がパーリ聖典をパーリ語から直接翻訳



ティヤワナ・オヤ湖を望む仏教研究所の庭で

しておられると聞くと、その活動に非常に興味を持たれたようだった。

なお、対談中に約束した僧の著作『WHAT THE BUDDHA TAUGHT』の日本語版の出版は、残念ながら実現しなかった。サキャ神賢の真理の教えと食い違った部分に注釈を入れることを、僧が好まれなかったからである。

ただ、約束どおり、四月十日には翻訳が完了し、四月二十二日には本が完成する手はずがついていたことは付け加えておこう。

◆日本の仏典はここがダメだ！

（尊師）わたしは、南伝と北伝の仏教、それからその他のいろいろな宗教を研究していると同時に、瞑想をしています。そして、あなたが大変な学僧であるということをお聞きしまして、いろいろとテーラヴァーダの教えについて、お話をお伺いしたいと考えました。

（僧）中村元さんをご存知ですか。

（尊師）はい、知っています。

（僧）彼とはよい友人で、以前一度、わたしが学長を務めているケラニヤ大学に招待したことがあります。わたしの著書の一つに『WHAT THE BUDDHA TAUGHT（仏陀の教えたこと）』という本があって、現在、仏教圏の十四カ国語に翻訳されていますが、日本語にはまだ訳されていません。そこで、中村元さんに、日本語に訳して、日本で出版できるようにお願いしました。できれば、彼を助力していただければと思います。

（尊師）いえ、訳すとしたら、わたしが訳します。

（僧）それは、中村さんが認めないと不可能です。なぜならば、中村元さんは学者だからです。

（尊師）ただ、間違いも多い。

（僧）それはありません。日本の仏教の研

究において、中村さんよりも秀でた者はいません。

(尊師) 今わたしは、テーラヴァーダの教えの全訳を敢行しています。

(僧) 『WHAT THE BUDDHA TAUGHT』というわたしの本は、原本に基づいて訳されています。中村元さんは、その詳細をよく知っています。それから、彼はサンスクリットのテキストも訳していますし、漢語についてもよく知ってます。

(尊師) では、それは理解しましょう。しかし、例えば漢訳で〝涅槃(サンスクリット語ではニルヴァーナ)〟という言葉があります。しかしこのニルヴァーナというのが「煩悩破壊」であることは、今まで日本人はだれも示しませんでした。それは中村元先生も同じです。これはなぜでしょうか。それを例えば〝涅槃〟と訳されても、日本人は救済されません。

(僧) そのとおりです、そのとおりです。

(尊師) ちょうど今から百年前の言葉を使っているのが、今の日本の仏典なんです。

◆〝ニルヴァーナ〟は言語で表現できないのか?

(僧) しかし〝ニルヴァーナ〟という言葉は、どんな言語においても一言で表わせるものではありません。

（尊師）いや簡単だと思います。

（僧）わたしの『WHAT THE BUDDHA TAUGHT』という本に、〝ニルヴァーナ〟が何かということを説明している章があります。わたしはそこで一章をかけて説明しました。その本でわたしが述べたことは、〝ニルヴァーナ〟というのは「これがニルヴァーナなんだ」と表現する、すなわち、積極的な言葉では説明できず、「これはニルヴァーナでない」と消極的にしか説明できないということです。〝ニルヴァーナ〟は、いつもそれは否定的な言葉で、否定的な方法で説明されます。それは要するに「ニルヴァーナはこうではなかった」という言葉で説明するということです。〝ニルヴァーナ〟というのは、貪（とん）・瞋（じん）・癡（ち）のない状態です。それが、そこで述べられていることです。

（尊師）結論から言うと、〝ニルヴァーナ〟というのは「光のスピードを超えた意識の状態」というふうに考えています。

（僧）そうではありません。意識の状態ではありません。

（尊師）いや、もちろん、言葉上では「意識」としか使えないから「意識」という言葉を今使っているんです。表現不能であるから。

（僧）それは、意識を超えたものです。

(尊師) ええ、それはそのとおりです。それはなぜかというと、意識が光で構成されているから、「超えたもの」と言っても間違いではありません。よって、わたしは「光を意識が超える」という表現を使ったんです。

(僧) ニルヴァーナは非二元的なものですから。一元的なものですから……。

(尊師) そのとおりですね。

(僧) そのように定義することはできません。この全体の世界は二元的なものです。二元的なものというのは、イエスかノーかというようなもので、二元的なものというのは善・悪とかいうものであって、または、光と闇といったようなものです。ですから、この世界のすべては二元的です。わたしたちが言葉を使ったときに、もうすでにそれは二元的です。

(尊師) それはよく理解できます。

◆仏教は科学的に証明できる

(尊師) 実は、昨日、アーナンダ・マイトリー僧とお会いしました。そのときの話で、彼とわたしにはよく似た過去世があることがわかったのですが、わたしの仏教的修行のスタートは、ヴィパッシー真理勝者のころです。もちろんその前にはヨーガ的修行、その他の修行を多く行なってきましたが、

そのときの生では、わたしは有能神でした。そして、もちろんカッサパ真理勝者のときや、あるいはサキャ神賢のときにも、仏教の流れと関係してきています。

で、大切なことはここです。例えば、ユダヤ教はユダヤ教の教えに基づいて多くの科学を発達させました。その、代表的なものがアインシュタインの相対性理論であり、それから今の量子力学です。そして、サキャ神賢はそれ以上の教えを説いていらっしゃいます。それは、わたしよりあなたの方がご存知でしょう。そして今、先進国、特に日本においては、古典的な教えと同時に、それを科学的に証明する段階に入ってきています。

わたしは中村元先生を大変尊敬しています。それは、わたしが中村元先生の難しい言葉を理解する能力があったからです。

(僧) ちょっと説明させてください。仏教を「科学的」というふうに表現した場合は、仏教に対して侮辱になると思います。仏教は科学を超えたものだと思います。仏教を科学と対照させて比較して論じることには反対です。科学というのは物質を扱いますが、しかし、科学は〝慈愛〟または〝愛〟というものに関して何も知りません。接触することができるもの、物質については科学は論じますが、仏教は物資ではなくて心

を扱うものだと思います。わたしは、ケラニヤ大学で講義をしたことがありますが、その中で「宗教は科学を超える」というふうに論じまして、それは出版されております。もし仏教と科学を比較した場合、仏教を通常のもののレベルに落としめてしまうでしょう。

(尊師) ちょっと待っていただけますか。一つ説明させてください。わたしも、日本で同じことを言っています。しかし、それはどういうことかというと、例えば数学がそうであるように、あるいは理論物理学がそうであるように、手に触れないものを数式的に表わすことは可能なんです。つまり、一般的に科学といった場合、科学技術が科学と混同されていますが、実際は、科学と科学技術は別物です。

(僧) それには同意できません。

(尊師) いや、日本ではそのように定義されています。

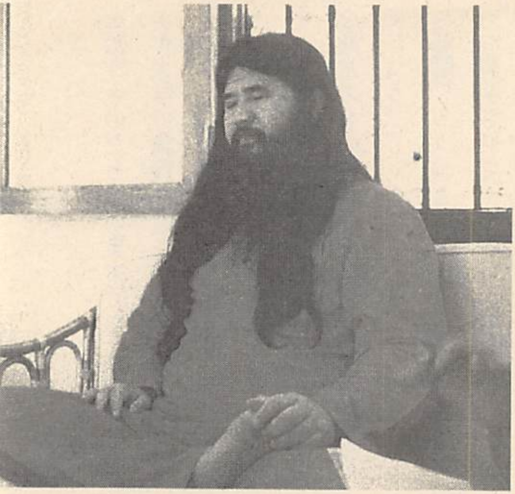
(僧) 科学は物を扱います。

(尊師) 例えば、量子力学が、形状界、あるいは非形状界の世界に対して検討しているということをご存知でしょうか。

(僧) ルーパ・ローカ（形状界）も、アルーパ・ローカ（非形状界）も物質です。

(尊師) アルーパ・ローカも物質だとお考えですか。

（僧）それも同様に物質であって、それは仏典に書かれています。アルーパ（arūpa）といったときは、ルーパ（rūpa）に関係するものです。



（尊師）しかし、アルーパを構成しているものは意識ではないですか。

（僧）それは意識でできています。しかし、ニルヴァーナはそれを超えています。それは事実であり、経典に書かれている教えです。

（尊師）ヴァンギーサ。「十二の条件生起の段階」は何だったっけ。

（ヴァンギーサ師）パティッチャサムッパータです。

（尊師）例えば、パティッチャサムッパータというのは、明らかに、魂がニルヴァーナからこの現象界へと落ちていくプロセスを哲学的、論理的に展開したものではない



でしょうか。
（僧）それは因果の教義だと思います。
（尊師）では、例えばそこで使われているプロセスというのは、アルーパ・ローカ、ルーパ・ローカ、そして、カーマ・ローカ（愛欲界）の、この三つのプロセスですね。

◆なぜ、パーリ語の根本経典を訳さなければならないのか？

（僧）ナーガールジュナの重要な著作の中で「十二縁起の法」についてよく説明しています。
（尊師）ただ、ナーガールジュナは、仏陀の時代の人ではありません。
（僧）彼は先生でした、二世紀の。
（尊師）だから、サキャ神賢の直弟子ではありません。で、わたしが何を言いたいかというと、わたしがなぜテーラヴァーダの

教えを完全訳しなければいけないかということ、その中に仏陀の教えのすべてが言い尽くされているからです。

（僧）それは、パーリ語のテキストから訳しているのですか。

（尊師）そのとおりです。ですから、ナーガールジュナの解説がなくても、しっかりしたパーリテキストを完全に訳すことによって、テーラヴァーダの教えは完全に理解できるはずだと考えているんです。

（僧）「これが仏陀が言ったことだ」ということを、パーリテキストだけに頼るわけにはいかないと思います。なぜなら、後で修正されたことが数多くあるからです。

（尊師）いや、それについては理解しています。理解していますが、本質的な部分というのは、パーリ三蔵の中に最も綺麗な形で残ってると、わたしは確信を持っています。今、実際にパーリ語から日本語への翻訳を、約十名ぐらいの弟子を使ってやっています。

◆いつの時代も学者は重要ではなかった

（僧）それは非常に難しい仕事です。

（尊師）翻訳の作業には、コンピュータを使っています。

（僧）コンピュータは、そういうものには

あまり頼りにならないと思います。コンピュータがする前に、自分がコンピュータにデータを入れなくてはなりません。もし、コンピュータにニルヴァーナが何かを理解させることができれば、もうすることはありません。

（尊師）いや、それはできないけれども、パーリ語が何であるかを理解するのは、人間より早いと思います。

（僧）コンピュータは、何回その言葉が出てきたかということを調べるには非常に有効だと思います。しかし、法を理解することは、コンピュータにはできません。

（尊師）逆に、法を理解しようとするがあまりに、法則がねじ曲げられているんじゃないかとわたしは考えております。つまり、言語を素直に読み取ることが重要なのだと。

（僧）おっしゃっている意味がよくわかりませんが。

（尊師）要するに、理解しようとするときに意識が動きます、心が動きます。それによって、逆に理解ができなくなってしまうと。それより、サキャ神賢のお説きになった言葉を正しく翻訳して、それを素直に読めば、法則を理解することは決して難しくないと思います。

つまり、どういうことかというと、当時は、それほど学問的に優れている弟子たちはいなかったはずであると。だとするなら

ば、お釈迦様は、わかりやすい言葉で法を説かれているはずです。それを、難しく解釈しようとするがあまりに理解できなくなってくるんです。

（僧）どんな時代においても、学者というのは重要ではありませんでした。

（尊師）そのことは『創世期経』に載っていますね。で、結局のところ、例を挙げるならば、漢字――日本には漢字というものがあるわけですが――その漢字があまりにも難しいがゆえに、逆に仏教を一般の人から遠ざけているという傾向があるんです。これは、お釈迦様のメッター、つまり、慈愛に反します。そういう意味においても、できるだけわかりやすい、現代人にわかりやすい言葉で説き明かす経典を復活させることがわたしたちの今の仕事なんです。

実際、そのためにはものすごいハードな瞑想をも行なっています。そして、わたしの弟子の中には、四つの静慮の最終段階に到達した者も多数います。そして、それは科学的測定によって呼吸の停止を認めています。これは経典に書かれているとおりのことです。そのような形で確認をしながら、経典の翻訳作業を進めていっているんです。とにかく「衆生に利益を与える」、これがお釈迦様のメッターですから、それにのっとった形でこれからもやっていきたいと考

えています。

◆それは奇跡だ！

（尊師）ですから、もし翻訳させていただけるんでしたら、中村元先生は中村元先生として、わたしはわたしとして学長の本を翻訳させていただけたらありがたいと。

（僧）わたしの本は英語で書かれていますが。

（尊師）ええ、それは結構です。

（僧）では、先程申し上げた『WHAT THE BUDDHA TAUGHT』という本を持ってきましょう。もしよければこれを訳して、出版してください。

（尊師）大変うれしいです。

（僧）そうしたら、十五カ国語に訳されたことになります。早く日本語版を見たいと思います。

（尊師）おそらく、四月中には出版することになるでしょう。というのは、弟子の中には英訳の専門家もおりますし、印刷所も出版社もすべて持っていますから。

（僧）そんなに早く訳せますか。

（尊師）大丈夫だと思います。

（僧）今、三月ですよ。次は四月です。

（尊師）はい、大丈夫です。

（僧）それは奇跡だ！　その翻訳は信頼できるものになるでしょうか。

（尊師）それは『タターガタ・アビダンマ』

（編集部注：尊師のご著書。ラーフラ僧には英訳版をお渡ししてあった）をぜひお読みください。

自己宣伝に聞こえたら、失礼なことを言っているなとお感じになって結構ですが、わたしはチベットで〝イェシェ〟、つまり、パンニャー（智慧）に到達した者といわれています。これは、チベットの最高の僧たちから贈られた称号です。

（僧）わたしの本が翻訳され、そして、出版されるのは非常にうれしく思います。

◆座るだけが瞑想ではない

（尊師）最後に、わたしが聞いたことと感じたことの違いを述べさせていただきます。学長は、学者であると聞きましたが、学者というだけでなく、初めて会ったときから、大変瞑想をされている方だなと感じました。ですから、わたしも、わたしが感じたことを率直に述べさせていただきました。

（僧）わたしの生活のすべては瞑想です。わたしは、座って瞑想するのは好みませんが、いろいろなところを歩いて瞑想するのを好みます。〝サティパッターナ〟というのをご存知ですか。

（ヴァンギーサ師）〝サティパッターナ〟は「念処」のことです。

（僧）その中には「座れ」ということはありません。呼吸するためには座りますが、

その他の面については、座る、歩くなど、いろいろなことをしながら瞑想することができます。わたしの場合は、座って瞑想しようというのではなくて、生活すべてが瞑想になっているんです。

(尊師) ええ。それは正しいと思います。教義を現象化するためには、当然、行動、言葉、それから心の働きの三つの統御によって完成していくわけですから、おっしゃっていることは正しいことだと思います。

(僧) ところで、わたしについて何か悪いことを聞きましたか。

(尊師) いや、何も聞いておりません。

(僧) 多くの人がわたしに反対の立場をとっています。

(尊師) ああ、それは知りませんでした。では、本が完成したら、ぜひとも早くお送りしますから。

(僧) 出版された段階でですか。

(尊師) もちろんそうです。でも、チェックの段階でお送りすることもできます。

(僧) 日本語で翻訳されたものを見ても何を言っているのかわかりませんので(笑)。あなたが望むように訳していただいて結構です。でも、それはわたしにはわかりません。それは、あなたの責任になります。

(尊師) わかりました(笑)。今日はどうもありがとうございました。

人類の団結と世界の平和を

3月28日

国際仏教会議　尊師講演

於：コロンボ　アグラリアン・リサーチ・センター



会場は、僧と熱心な仏教徒で満員になった。

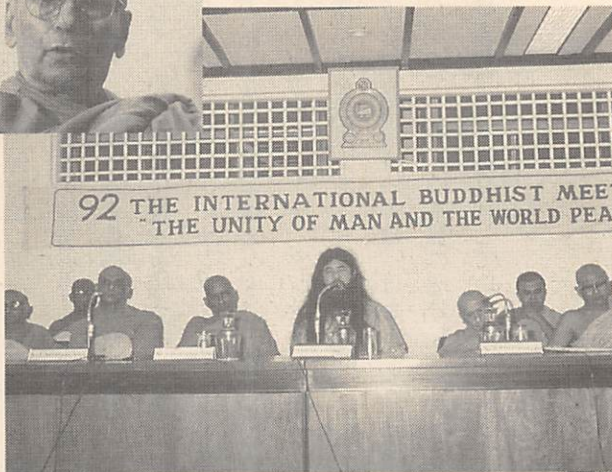
ラーフラ僧に別れを告げ、一行はスリランカでの最後のイベントである「国際仏教会議」の行なわれるアグラリアン・リサーチ・センターに向かった。

麻原尊師の呼びかけで開催された国際仏教会議は、「真理」を絆として人々の団結と平和を訴えた尊師の講話で幕を閉じた。

日本語から英語、英語からスリランカの言語シンハリ語へという二重の通訳を介しての講演となったが、伝統的テーラヴァーダの教えになじんでいるスリランカの人々や数多くの僧にも、尊師の説かれる法は感銘を与え



高名なパンニャーナンダ僧も出席された。





たのは確かなことに思える。それは、会場の出口にプレゼント用に用意した尊師のご著書が、あっという間になくなってしまったことからもうかがわれた。

〝ロシアツアー〟でも、昨年のラオス訪問の際でも、尊師の説法は多くの人を魅了してきた。

尊師の説かれる法は、文化・人種を超えて、すべての人の心を動かす――。ここでもまた、尊師と尊師の説かれる法の力を再確認することができたのである。

◆宗派を超えた理解を

今日の命題は、「人類の団結と世界の平和」という命題です。

ここで考えなければならないことは、まず人類はどのようにして団結できるのか、あるいは、平和には、何種類の平和があるのかを検討しなければなりません。

まず、人類の団結の障害となるもの、それは、いろいろな思想であり、宗教だと思います。つまり、対象となる他の宗教や、あるいは思想・哲学に対して、その本質を検討することなく、自己の優位性を主張する、ここからセクトが生じます。

昨日、わたしは、アーナンダ・マイトリー僧とお会いする機会に恵まれましたが、そのときの話として、例えばヒンドゥー教、あるいはテーラヴァーダの仏教、あるいはマハーヤーナやヴァジラヤーナ、タントラヤーナの仏教、あるいはタオイズムといったような宗教の基本的な戒律である五戒、例えば、不殺生（ふせっしょう）、不偸盗（ふちゅうとう）、不邪淫（ふじゃいん）、あるいは不妄語（ふもうご）といったような、五戒については、ほとんどの宗派も取り入れている戒律です。

したがって、教えの本質の部分では食い違っていたとしても、お互いが理解し合える部分というのは、多数存在しています。そして、相手の教義そのものを許容する度量、つま

り器が存在すれば、決して他の宗派と争いを起こすことはあり得ないはずです。
特にこのテーラヴァーダの教えについていうならば、すべての宗教を包含するだけの世界観、あるいは教えというものを存在させているわけですから、他の宗派の考え方を理解する上においては、全く問題がないはずです。
例えば、キリスト教の教えの本質、これを検討する場合、これは、十七形状界の下位四つの、要するに神聖世界について説き明かした教えです。それは、瞑想ステージから検討すると、第一静慮の達成を意味します。そして、いろいろな宗派の根本的な教えの中には、慈愛、あるいは隣人への愛といった、基本的に他を利する考え方が存在しているわけですから、その部分をとって、すべてが他を理解し認めるという方向で生きていくならば、人類の団結は決して難しくありません。

◆四つの静慮――四無量心を背景として

次に、平和について検討してみましょう。
一般に平和といわれているのは、軍事バランスによる、見かけ上の平和を指します。し

かし、この平和はわたしたちに何の利益も与えてくれません。わたしたちに必要なのは、わたしたち一人一人が、本当の意味で平和になれることなのです。そして、一人一人の平和の総和が世界の平和へとつながる、これこそが、わたしたちの求めなければならない平和の考え方です。

そのためにはまず第一の段階で、戒を確立させなければなりません。これによってわたしたちは、カーマ・ローカ（愛欲界）のきずなを完全に捨断することができます。

そして、これらの徳のエネルギーをもって、次は四つの静慮へとわたしたちは進んでいかなければなりません。この四つの静慮に入った場合、わたしたちは四つの偉大な心の実践を行なわなければなりません。

まず、第一の慈愛の達成によって、わたしたちは喜びの身体、喜びの瞑想を得ることができます。そして、第二番目のジャーナ（静慮）の段階で、わたしたちは、悲哀の実践を行ないます。これによって、わたしたちは光と音楽による祝福を受けるようになります。第三番目のジャーナによって、わたしたちは、美しい世界の経験を始めるようになります。そして、精神的特徴としては、このときわたしたちは、えもいわれぬ、楽の境地を経験し

ます。そして、第四番目の静慮の段階で、わたしたちの呼吸は完全に停止し、感覚が完全に止まります。

この段階で、わたしたちの頭上、頭頂から、別の身体が抜け出します。この別の身体の活動範囲は大変広く、このわたしたちの生きている現象界だけではなく、いろいろな世界を経験することができます。そしてこの身体は、この愛欲の世界、あるいは形状の世界の経験を、わたしたちに一気にさせてくれます。このときの、時の密度は、この現象界のわたしたちの経験している時よりも、ずっと高密度であるということができます。

◆訪れる六神通の世界

そしてこの段階から、完全にサマディという段階へ入ります。なぜならば、サマディという本義的な意味は、〝死〟を意味するからです。つまり、呼吸の停止、そしてこの身体からの完全なる離脱、これをもってサマディと定義すべきなのです。わたしの経験からいいますと、この次に、自動的に天耳通（てんにつう）が生じます。この段階の感覚器官は、耳ではなく、喉（のど）を使います。他の部分で聞こえる声、これは、わたしたちに正しい示唆を与えませんが、

喉で聞こえる声、これはわたしたちに正しい示唆を与えます。正確にいうと、喉と頭上で聞こえる声、この二つが正しい、わたしたちに示唆を与える声であるということができるでしょう。

次の段階でわたしたちは、他心詳解智を経験します。ここで検討しなければならないことは、他心通イコール、何となく相手の心がわかる、というのでは他心通とはいえません。ここでの他心通は、相手の心がはっきり把握できるだけではなく、視覚的にとらえられなければなりません。つまり、相手の煩悩を色としてしっかりとらえられてこそ、初めて正確な他心通ということができます。

次は、宿命の段階に入ります。宿命精通の段階に入ります。このときわたしたちは、この現象界のスピードより大変速いスピードで、そのときの前世の経験を、単に思い出すだけではなく、アナウンスメントされた形で聞くことができます。例えば例を挙げるならば、一分間の時間。この現象の世界、わたしたちが生活している時間が一分間の間に、わたしたちは生まれてから死ぬまでの一生を、サマディの世界では経験できるのです。

次の段階でわたしたちは、死生智の経験に入ります。このときわたしたちは、今生の要

素の蓄積によって、まず次の生の光を見、その光をスクリーンとして、その世界の導きのヴィジョンを見ることとなります。これらの経験の後、わたしたちは本当にこの人生が苦であることを認識することができるようになるわけです。

それはなぜでしょうか。それは、例えば、最終の段階、漏尽詳解智(ろじんしょうかいち)の段階に入ると、すべての人たちの心の本質は無常であり、そしてそれは煩悩であり、その煩悩は、自己を決して幸福にしてくれないものであることが理解できるからです。例えばそれは、両親にしろ、あるいは兄弟にしろ、あるいは友人にしろ、あるいは先生にしろ、煩悩を有する人たちの心の働きがよくわかり、そしてその人たちが、それらの煩悩によって発する、言葉・行為・心の働きが、次の生どのような結果を招くかをはっきりと知ることができると。それによって、すべての言葉・行為・心の働きは苦しみであることが理解できるようになるからです。

テーラヴァーダの中の『テーラ・ガーター』の中には、このような教えがあります。ある、阿羅漢(あらはん)に到達したサキャ神賢の弟子が、自分自身の知人に対して、「お前は、阿羅漢にもなっていないのに、なぜ法則を説くんだ」と。つまり、阿羅漢になっていないのに法

則を説いてもそれは無意味であるという一節があります。それは先程述べた、この最終のステージに来ると、すべてが理解できるからなのです。そしてこの段階に入ると、経典の本当の意味を理解することができ、そして、経典は自己の経験の確認に至ります。

◆真の平和の境地へ

この段階に来て初めて、本当の平和の境地に到達できるのです。そして、ここにいらっしゃる方々が、三宝を信じ、三宝に帰依し、日々の修行において戒・定・慧・解脱・解脱智見の実践に入られ、そして、一人一人が最終の阿羅漢の境地へ到達し、神聖なヴァイブレーションを世界中に発することができるならば、本当の意味での平和の到来、これは、間違いなく間もなくやってくることでしょう。

あなた方には、二つの道が示されています。その第一は、欲望を修習し、そして、マーラの支配下に入り、三悪趣（さんあくしゅ）を流転するという道です。そしてもう一つの道は、あなた方が三宝を信じ、帰依し、そして阿羅漢に至り、最終的には、遠い遠い未来生においては、十力者（じゅうりきしゃ）として流転し、すべての魂の平和の源となることです。それを決めるのは、あなた方

の、今この瞬間の決意です。しっかり頑張ってください。
どうもありがとうございました。

※オウム真理教では、本来の意味を正確に表わしていない既製の仏教用語は用いず、パーリ語原典を忠実に翻訳し、吟味した結果、決定した訳語を使っています。以下に、代表的な言葉の対比表を掲げますので参照してください。また、仏教・ヨーガの言語対比表も参考までに掲載しました。

◆言語対比表

欲界(よっかい)→愛欲界(あいよくかい)
阿修羅(あしゅら)→不飲酒天(ふいんしゅてん)
憤怒天(ふんぬてん)→意識堕落天(いしきだらくてん)
戯忘天(ぎぼうてん)→戯れ堕落天(たわむだらくてん)
地居天(じごてん)→地上愛欲神天(ちじょうあいよくしんてん)
四天王衆天(してんのうしゅうてん)→四大王天(しだいおうてん)
忉利天(とうりてん)→三十三天(さんじゅうさんてん)
夜摩天(やまてん)→支配流転双生児天(しはいるてんそうせいじてん)
兜率天(とそつてん)→除冷淡天(じょれいたんてん)
楽変化天(らくへんげてん)、化楽天(けらくてん)→創造満足天(そうぞうまんぞくてん)
他化自在天(たけじざいてん)→為他神以神通創造欲望満足従事天(いたしんいじんつうそうぞうよくぼうまんぞくじゅうじてん)
色界(しきかい)→形状界(けいじょうかい)
梵天(ぼんてん)→神聖天(しんせいてん)
梵衆天(ぼんしゅうてん)→神聖衆愛欲神天(しんせいしゅうあいよくしんてん)
梵輔天(ぼんぽてん)→神聖臣天(しんせいしんてん)
大梵天(だいぼんてん)→大神聖天(だいしんせいてん)
浄天(じょうてん)→美天(びてん)
遍浄天(へんじょうてん)→総美愛欲本質神天(そうびあいよくほんしつしんてん)
広果天(こうかてん)→偉大果報愛欲本質神天(いだいかほうあいよくほんしつしんてん)

浄居天→清潔居住天
無煩天→超空間愛欲神天
無熱天→超燃焼愛欲神天
善現天→善安楽愛欲神天
善見天→善現象愛欲神天
色究竟天→超越童子愛欲本質神天

無色界→非形状界
空無辺処→空間無辺境
識無辺処→識別無辺境
無所有処→無所有境
非想非非想処→非認知非非認知境

東勝身洲→東の高貴なる身体を得る大陸
南贍部洲、閻浮提→南のバラリンゴの大陸
西牛貨洲→西の願いがかなう牛の大陸
北倶盧洲→北の悪しき音の大陸

釈迦牟尼→サキャ神賢
如来→真理勝者
応供→供養値魂
正等覚→最上正覚者
明行足→智徳成就者
善逝→最上善逝
世間解→世間解（変更なし）
無上士→無上士（変更なし）
調御丈夫→丈夫調御者
天人師→天人師（変更なし）
仏陀→覚者
世尊→世尊（変更なし）

菩薩→到達真智運命魂
比丘→向煩悩滅尽多学男
比丘尼→向煩悩滅尽多学女
優婆塞→帰依信男
優婆夷→帰依信女
僧伽→出家教団
長老→高弟
声聞→多学の弟子
沙門→出家修行者
遊行者→托鉢修行者

バラモン→祭司
クシャトリヤ→武人
ヴァイシャ→庶民
シュードラ→奴隷

四双八輩→四対の人々・八つの宗教的特性を持つ人々
預流→真理の流れに入ること
一来→（愛欲界に）一度だけ再生すること
不還→不還（変更なし）
阿羅漢→供養値魂
四預流支→四つの真理の流れに入る段階

四聖諦→四つの絶対的真理
苦聖諦→苦しみの絶対的真理
集聖諦→苦しみの生起の絶対的真理
滅聖諦→苦しみの滅尽の絶対的真理
道聖諦→苦しみの滅尽に至る方法の絶対的真理

四念処→四つの記憶修習述

四無量心
慈→聖慈愛
悲→聖哀れみ
喜→聖称賛
捨→聖無頓着

五取蘊→五つのとらわれの集積
色取蘊→形状-容姿のとらわれの集積
受取蘊→感覚のとらわれの集積
想取蘊→表象のとらわれの集積
行取蘊→経験の構成のとらわれの集積
識取蘊→識別のとらわれの集積

五蓋→五つの障害
貪欲蓋→愛欲の衝動による障害
瞋恚蓋→害心による障害
惛眠蓋→頑固と愚鈍による障害
掉挙蓋→興奮と後悔による障害
疑蓋→疑念による障害

五妙欲→五つの愛欲の構成部分
色→形状-容姿
声→声（変更なし）
香→香り
味→味（変更なし）
触→接触

五下分結→五つの下位に結びつけるきずな

有身見→有身謬見
疑→疑念
戒禁取→戒誓のとらわれ
貪欲→愛欲の衝動
瞋恚→害心

五上分結→五つの上位に結びつけるきずな
色貪→形状愛著
無色貪→非形状愛著
慢→慢（変更なし）
掉挙→興奮
無明→非神秘力

十二縁起の法→十二の条件生起の段階
無明→非神秘力
行→経験の構成
識→識別
名色→心の要素-形状-容姿
六処→六つの感覚要素と対象
触→接触
受→感覚
愛→渇愛
取→とらわれ
有→生存
生→出生
苦→苦しみ
信→信（変更なし）
悦→歓喜
喜→喜（変更なし）
軽安→静寂

楽→楽（変更なし）
三昧→サマディ
如実知見→如実精通見解
遠離→現世否定
離貪→離愛著
解脱→離解脱
涅槃→煩悩破壊
般涅槃→完全煩悩破壊
中般涅槃→中完全煩悩破壊
生般涅槃→減少完全煩悩破壊
無行般涅槃→形状界にて経験の構成がなく
　功徳の果報を受けつつある完全煩悩破壊
有行般涅槃→形状界にて経験の構成があり
　真理の実践による完全煩悩破壊

一種者→一種者（変更なし）
家家者→徳の高い家から家へと転生する者
極七返→最高七回流転者
正智→正精通
正解脱→正離解脱
心解脱→心の離解脱
慧解脱→智慧の離解脱

◆仏教・ヨーガ　言語対比表

愛欲界―現象界
形状界―アストラル世界
非形状界―コーザル世界

PART-9　尊師、聖地インドを行く

尊師がインドを行く。不思議な神秘の力によって、様々な過去の事実を明かされる尊師。第一部では、信徒と共に行かれた巡礼の旅の全記録を、そして第二部ではなんと、今まで部外秘だった直弟子用奥儀説法を満載！

B6判　定価750円

PART-10　仏教真理　五蘊無我

わたしたち本来のものではない五蘊（形状・容姿、感覚、表象、経験の構成、識別）を我と錯覚し、迷妄に苦しむ人間。この五蘊を証智し超越することによって、わたしたちは人間を超え、神に至れるのである。

B6判　定価650円

PART-11　自己を超えて神となれ！

――大人気を呼んだ尊師大学講演会特集――。東大、京大をはじめ、九一年の大学祭で尊師が若者に、現代における宗教の存在意義等について語られた模様を一挙掲載。

B6判　定価820円

PART-12　仏教真理　十二縁起

サキャ神賢が初転法輪でお説きになった「十二縁起の法」。魂の落下と上昇のプロセスを克明に描き、人間がこの世に生を受け、絶対的な自由の世界へ至る道程を明らかにする。

B6判　定価620円

PART-13　これが尊師！



B6判　定価570円

雑誌・テレビ・ラジオにと、今大人気の麻原尊師。尊師の人気の秘密は何か？　雑誌社からの取材を中心に、様々な角度から尊師の魅力を探る。

PART 14　宗教の条件



B6判　定価570円

今、本物が明らかになる！　真の宗教の条件とは？　第三次宗教ブームと呼ばれる現在、様々な宗教の中から間違いなく本物を選び出すための条件を、あますところなく説き示す一冊。

PART-15　絶対幸福への道



B6判　定価620円

最終解脱者、麻原彰晃尊師が、幸福になるための最速・最短の道をあなたに伝授する！　あなたを確実に幸福へと導く秘法が満載の、在家修行者座右の書。

PART-16　麻原彰晃　方便品



B6判　定価720円

難解な仏典の比喩・奥儀が現代的に説き明かされた！　釈迦牟尼の深遠な教えの真髄を、最終解脱者麻原尊師が巧みな方便でわかりやすく解説。読んで、考え、実践するための、本物のお経を公開！

（価格にはすべて消費税が含まれています。）

●全国の有名書店にてお求めください。弊社に直接お申し込みの場合は下記まで。

オウム出版　本社　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL03(3439)6043 振替 東京2-109325
営業部 〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL03(5370)1598

ズバリ！ 真理のメッセージ



モスクワからあなたに──

「朝まで生テレビ」「ビートたけしのTVタックル」等の出演で話題独占の麻原彰晃尊師が、毎晩ラジオにのってあなたのもとへ。宗教、音楽、科学、神秘……盛りだくさんの内容と次から次への新しい発見で、眠気も吹っ飛ぶ1時間！
　さあ、あなたも今日から尊師を聴こう！



※今週の聴きどころなどを毎日紹介。便利なテレホンサービスもぜひご利用を。
TEL 03 (5370) 1608

※タイアップマガジン「えんじょい・はぴねす」定期購読受付中！

詳しいお問い合わせは、「エウアゲリオン・テス・バシレイアス」係まで。 TEL 03 (3335) 4965



あなたに絶対の幸福を約束する

——オウム真理教

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

最高の教義、最高の奥儀、そして麻原尊師のもと、すべては確実に実現します。

●オウム真理教が誇る三つの基本的修行体系

1、マハーヤーナ

現実生活をより豊かにし、幸福な人生をお約束します。ご年輩の方、仕事が忙しく時間のあまり取れない方にお勧めです。

2、タントラ・ヴァジラヤーナ

行法、イニシエーションを中心として進め、霊性を向上させて、神秘世界を実体験することができます。この修行体系を選択すれば今生で解脱し、悟ることも夢ではありません。

3、テーラヴァーダ

原始仏教の上座部仏教を再現しました。真理にのっとって清浄な日常生活を送ることによって、幸せな来世が約束されます。また、経典の記憶修習によって心の成熟が促され、悟りを得ることが可能です。オウム真理教の深遠な教義を徹底的に学びたい方に最適です。

※資料請求券を貼付けしたハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

麻原彰晃の世界
PART 17
資料請求券

オウムについてもっと詳しく知りたい……
教義その他について、いろいろと聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

好評！ あなたとオウムをつなぐ パソコン通信、〝オウム真理教ネット〟

面倒くさい手続きは一切ありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

〝オウム真理教ネット〟のご紹介

TEL番号	03-5370-1726
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BITS-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、SYSOPあてメールにて申請

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。

〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
〝オウム真理教ネット〟事務局
TEL 03-3335-4965

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『麻原彰晃の世界』読者係」までお送りください。

〒418-02　静岡県富士宮市人穴381-1
オウム真理教「『麻原彰晃の世界』読者係」

◆各道場のご案内◆

富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場） 03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
那覇支部　098 (869) 7707
〒902　沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F
堺支部　0722 (21) 1843
〒590　大阪府堺市海山町4丁168の9
深谷出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所　03 (3476) 5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号

〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hügel 48, Endenich, 5300 Bonn 1,　S.R.Germany
スリランカ支部（AUM SACCA SAṄGHA ASSOCIATION）
Sorahēna, Watta, Anglugaha, Galle, Shri Lanka

麻原彰晃の世界PART17
『世界は尊師を待っている』

一九九二年七月四日　初版発行

定　価　一〇三〇円
発行者　松本知子
　　　　石井久子
編　集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
東京都世田谷区世田谷二―八―一七
郵便番号　一五四
電　話　〇三（三四三九）六〇四三
振　替　東京二―一〇九三二五

乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

ISBN4-87142-049-3 P1030E

麻原彰晃の世界 PART17

世界は尊師を待っている





ISBN4-87142-049-3 C0014 P1030E 定価1030円(本体1000円)